

令和2年度
山口大学のFD活動

山口大学 教育・学生支援機構
山口大学 教学委員会

第1部 全学FD活動

第1章 教育・学生支援機構主催等のFD活動	1
第1節 教育・学生支援機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 教育・学生支援機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	7
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	61

第2部 学部・研究科のFD活動

第3章 人文学部のFD活動	63
第1節 授業公開	63
第2節 学部・研究科主催FD研修会	65
第3節 教育改善に関する活動	71
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	72
第5節 FD実施経費報告書	76
第6節 来年度の課題	76
第4章 教育学部のFD活動	78
第1節 授業公開	78
第2節 学部・研究科主催FD研修会	78
第3節 教育改善に関する活動	80
第4節 FD実施経費報告書	81
第5節 来年度の課題	81
第5章 経済学部のFD活動	82
第1節 授業公開	82
第2節 学部・研究科主催FD研修会	82
第3節 教育改善に関する活動	84
第4節 FD実施経費報告書	85
第5節 来年度の課題	85
第6章 理学部のFD活動	86
第1節 授業公開	86
第2節 学部・研究科主催FD研修会	93
第3節 教育改善に関する活動	95
第4節 FD実施経費報告	98
第5節 来年度の課題	98

第7章	医学部のFD活動	99
第1節	授業公開	99
第2節	学部・研究科主催FD研修会	100
第3節	教育改善に関する活動	105
第4節	FD実施経費報告書	110
第5節	来年度の課題	110
第8章	工学部のFD活動	113
第1節	学部・研究科主催FD研修会	113
第2節	教育改善に関する活動	115
第3節	学生授業評価・教員授業自己評価	116
第4節	FD実施経費報告書	120
第5節	来年度の課題	120
第9章	農学部のFD活動	121
第1節	授業公開	121
第2節	学部・研究科主催FD研修会	122
第3節	教育改善に関する活動	127
第4節	FD実施経費報告書	127
第5節	来年度の課題	127
第10章	共同獣医学部のFD活動	128
第1節	授業公開	128
第2節	学部・研究科主催FD研修会	130
第3節	教育改善に関する活動	136
第4節	FD実施経費報告書	137
第5節	来年度の課題	137
第11章	国際総合科学部のFD活動	139
第1節	授業公開	139
第2節	学部・研究科主催FD研修会	141
第3節	教育改善に関する活動	144
第4節	FD実施経費報告書	144
第5節	来年度の課題	144

第 12 章	人文科学研究科の F D 活動	146
第 1 節	授業公開	146
第 2 節	研究科主催 F D 研修会	146
第 3 節	教育改善に関する活動	146
第 4 節	F D 実施経費報告書	148
第 5 節	来年度の課題	148
第 13 章	教育学研究科の F D 活動	149
第 1 節	授業公開	149
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	149
第 3 節	教育改善に関する活動	150
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	150
第 5 節	F D 実施経費報告書	151
第 6 節	来年度の課題	151
第 14 章	経済学研究科の F D 活動	152
第 1 節	授業公開	152
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	152
第 3 節	教育改善に関する活動	153
第 4 節	F D 実施経費報告書	154
第 5 節	来年度の課題	154
第 15 章	医学系研究科の F D 活動	155
第 16 章	創成科学研究科の F D 活動	156
	理学系	
第 1 節	授業公開	156
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	158
第 3 節	教育改善に関する活動	158
第 4 節	学生授業評価	158
第 5 節	F D 実施経費報告書	159
第 6 節	来年度の課題	159
	農学系	
第 1 節	授業公開	160
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	160
第 3 節	教育改善に関する活動	161

第4節	F D実施経費報告書	161
第5節	来年度の課題	161
第17章	東アジア研究科のF D活動	162
第1節	授業公開	162
第2-1節	研究科主催F D研修会：その1	162
第2-2節	研究科主催F D研修会：その2	163
第3節	教育改善に関する活動及び教員による授業評価	163
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	165
第5節	F D実施経費報告書	165
第6節	来年度の課題	166
第18章	大学院技術経営研究科のF D活動	167
第1節	授業公開	167
第2節	学部・研究科主催F D研修会	168
第3節	教育改善に関する活動	179
第4節	F D実施経費報告書	179
第5節	来年度の課題	179
第19章	共同獣医学研究科のF D活動	181
令和2年度	山口大学 教学委員会 名簿	
令和2年度	山口大学 学部・研究科F Dコーディネータ 名簿	

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 教育・学生支援機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として教育・学生支援機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む※）。

※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 教育・学生支援機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は2020年度の教育・学生支援機構主催FD講演会・研修会の一覧である。全学講演会の参加者は164名であった。また、研修会は計19回開催され、参加者は計1,109名であった。各学部・研究科と教育・学生支援機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計477名であった。延べ1,750名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	教学マネジメントについて考える～「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに着目して～	2021年3月3日(水)	14:00～16:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室(オンライン及び会場聴講)	浅野茂(山形大学 学術研究院 教授)、塙雅典(山梨大学 大学院総合研究部 工学域 電気電子情報工学系 教授)、松野浩嗣(山口大学 理事・副学長)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	教学マネジメントのあり方をテーマに、「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」の各レベルに着目した話題提供を行い、フロアとの意見交換を交えながら、学修者本位の大学教育について考える。	164名
									参加者 164名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会(第1回)	2020年4月3日(金)	13:30～17:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア講義室 工学部D11 講義室 医学部総合研究棟多目的室	第1部:学長、人事労務・財務施設担当 副学長、学術研究担当副学長、学術基盤担当副学長ほか 第2部:教育・学生支援機構長、教育支援センター長、教学マネジメント室及び学生支援センター教員	(1)前回の研修会以降 に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の 日以前に本学の教育職員となった者 で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員23名
2	共通教育TA・SA研修会	2020年4月9日(木)	13:00～15:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育1番教室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	仲間瑞樹(教育支援センター長)、岡田菜穂子(学生支援センター准教授)、森本宏志(保健管理センター准教授)	共通教育においてTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員13名 学生196名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
3	各学部・研究科FDコーディネータ研修会	2020年5月13日(水)	17:45～ 18:45	吉田地区・常盤地区・小串地区	各地区第1テレビ会議室	松野浩嗣(教学マネジメント室長)、林透(教学マネジメント室准教授)	各学部・研究科のFDコーディネータ	各学部・研究科のFDコーディネータを対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修を行う。	教職員17名
4	FD・SDワークショップ (1)オンラインによるオンライン授業づくりのためのランチョンFD(4回シリーズ)	2020年6月12・17・19・24日	12:00～ 12:40		オンライン	鳴海孝之(創成科学研究科(工)准教授)、林透(教学マネジメント室准教授)、西井淳(創成科学研究科(理)教授)、武本 Timothy(経済学部教授)	希望者	新型コロナウイルス感染症のため、大学の授業は原則としてオンラインによる授業が主となっている。このため、全学の教職員を対象に、Zoomによる「オンラインランチョンFD」を企画した。この企画については、5月中旬に開催されたFDコーディネータ研修会において、学部のFDコーディネータから強い要望があり、教学マネジメント室が学部教員の協力を得て実現した。	教職員237名 (4回合計)
5	「学位プログラム」レベルの教学マネジメントの対応方策 (教学マネジメント・教学IR関係FD)	2020年9月16日(水)	15:00～ 15:30	吉田地区	教育学部11・21番教室 オンライン	林透(教学マネジメント室准教授)	希望者	「学位プログラム」レベルの教学マネジメントの要点とポイントを解説しながら、教学IRの観点を交え、必要となるであろうエビデンスの数々やその見せ方、さらには、学習成果や教育成果に活かす方策などについて、学部・学科、研究科・専攻の先生方と一緒に考えてる。	教職員69名
6	FD・SDワークショップ (2)オンライン授業づくりのためのランチョンFD(実践編) 【4回シリーズ】	2020年9月17・23・25・28日	12:00～ 12:40		オンライン	田中愛子(医学系研究科(保健)教授)、林透(教学マネジメント室准教授)、西井淳(創成科学研究科(理)教授)、齊藤智也(情報基盤センター講師)	希望者	新型コロナウイルス感染症のため、後期の授業もオンラインによる授業が引き続き実施されるため、6月時開催の好評に伴い、全学の教職員を対象に、Zoomによる実践編のFDを4回シリーズで企画する。	教職員251名 (4回合計)

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
7	新任教員研修会(第2回)	2020年9月24日(木)	13:30～16:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育16番教室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	松野浩嗣(山口大学理事・副学長)、仲間 瑞樹(教育支援センター長)、林寛子(アドミッションセンター准教授)、岡田菜穂子(学生支援センター准教授)、林透(教学マネジメント室准教授)	(1)前回の研修会以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員16名
8	ラーニングアドバイザー養成講座2020	①2020年12月10日(木) ②2020年12月21日(月)	14:30～16:30		オンライン	宝来華代子(崇城大学SILC准教授)	希望者	学習支援者として身に付けておくべき「内部資源の情報」や「各種制度」、「学生のニーズ」等を把握・理解した上で、学生の学びに関する疑問・悩みに応えることができる「ラーニング・アドバイザー」となることを目指す。	教職員39名
9	大学マネジメントセミナー2020 in やまぐち	2020年12月21日(月)	14:30～16:30	吉田地区	大学会館2階会議室(オンライン及び会場聴講)	高橋哲也(大阪府立大学副学長)、松田優一(関西大学 職員・日本ピア・サポート学会理事)、池田一郎(筑波大学研究推進部職員・URA)	希望者	組織経営に関する専門家を招へいた基調講演を行い、各大学共通のテーマやノウハウの共有を図りながら、山口地域の大学職員の人的ネットワークづくりの強化を促進することを目的とする。	教職員124名
10	授業の過程における著作物利用ルール変更への対応	2021年2月17日(水)	13:30～14:10	吉田地区	農学部大会議室	小川 明子(国際総合科学部教授・知的財産センター長)	希望者	著作権法を理解することは大学教育及び研究にとって重要である。本研修会では、大学における著作権の考え方について基本的な情報を共有するとともに、研究倫理について再度検討することを目的とする。	教職員28名
11	大学生のインターンシップと就職活動の最新事情	2021年3月17日(水)	14:30～15:00	吉田地区	人文・理学部4階大会議室(オンライン)	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	日々の就職相談の事例を踏まえて、いま山口大学の学生たちが直面しているインターンシップおよび就職活動の現状を語る。	教職員42名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
12	山口大学 共育ワークショップ2021 『今、改めて「学生参画」について考えてみよう!』	2021年3月26日(金)	13:30～16:00		オンライン	橋本勝(富山大学教育・学生支援機構教育推進センター教授)	希望者	近年、我が国でも、国際的動向の影響を受けながら、教育の内部質保証の観点から、学生が教育システムの構成員として参画する動きが広がりにつつある。そこで今後の「学生参画」のあり方について現役学生とともに展望する。	教職員・学生 54名
									参加者 計1,109名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	教学マネジメント室と教育学部・教育学研究科(教職大学院を含む)・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	2020年10月21日(水)	15:00～15:30	吉田地区	教育学部21・11番教室	霜川正幸(教育学部附属教育実践総合センター教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員81名
2	教学マネジメント室と工学部、創成科学研究科(工学系)との教育改善FD研修会	2020年11月11日(水)	14:10～14:40		オンライン	和泉研二(教職センター教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員74名
3	教学マネジメント室と人文科学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	2020年11月18日(水)	14:30～15:00		オンライン	森重祐二(教職センター客員教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員43名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
4	教学マネジメント室と農学部、創成科学研究科(農学系)との教育改善FD研修会	2020年11月25日(水)	13:30～14:00	吉田地区	農学部大会議室	美作健悟(教育学部准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員25名
5	教学マネジメント室と医学部保健学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	2020年12月2日(水)	13:00～13:30	小串地区	医学部本館6階第1会議室	生鷹亜樹子(教育学部附属教育実践総合センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員27名
6	教学マネジメント室と技術経営研究科(MOT)との教育改善FD研修会	2020年12月8日(火)	14:30～15:00	常盤地区	大学院技術経営研究科棟1階会議室(オンライン)	藤上真弓(教育学部専任講師)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員10名
7	教学マネジメント室と理学部、創成科学研究科(理学系)との教育改善FD研修会	2020年12月9日(水)	15:00～15:30	吉田地区	理学部22番教室	松岡敬興(教職センター)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員55名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
8	教学マネジメント室と国際総合科学部との教育改善FD研修会	2020年12月16日(水)	13:30～14:00	吉田地区	国際総合科学部2階大会議室	熊井将太(教育学部准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員26名
9	教学マネジメント室と共同獣医学部、連合獣医学研究科との教育改善FD研修会	2021年1月13日(水)	14:30～15:00	吉田地区	獣医学研究科棟4F大会議室	静屋智(教育学部教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員37名
10	教学マネジメント室と経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	2021年1月20日(水)	13:30～14:00	吉田地区	経済学部第1会議室(オンライン)	森重祐二(教職センター客員教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員61名
11	教学マネジメント室と医学部医学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	2021年2月10日(水)	13:00～13:30	小串地区	医学部本館6階第1会議室	霜川正幸(教育学部附属教育実践総合センター教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみたい。	教員38名
									参加者計477名

第2節 教育・学生支援機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

1. 講演会

『教学マネジメントについて考える

～「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに着目して～』開催報告

日時：令和3年3月3日（水）14:00～16:30

方法：オンライン聴講及び会場聴講（吉田キャンパス・共通教育棟2階会議室）

参加者：164名

主催：山口大学

共催：大学リーグやまぐち

概要：

14:00～14:10 開会挨拶・趣旨説明 山口大学 理事・副学長（教育学生担当） 松野 浩嗣

14:10～15:40 基調講演

(1) 「山形大学における教学マネジメント

～教育ディレクター制度の深化とアセスメントへの挑戦～

山形大学 学術研究院 教授（教学マネジメント特別委員会委員） 浅野 茂 氏

(2) 「山梨大学における教学マネジメント

～内部質保証の実質化と自己点検・改善の定常化～

山梨大学 大学院総合研究部 工学域 電気電子情報工学系 教授 埴 雅典 氏
（教育国際化推進機構大学教育センター長・学長補佐）

(3) 「山口大学における教学マネジメント

～学部・研究科との関係性を重視したアクション～

山口大学 理事・副学長（教育学生担当）・教学マネジメント室長 松野 浩嗣 氏

15:40～16:20 パネルディスカッション「教学マネジメントの本質とは何か？」

16:20～16:30 クロージング

[総合進行：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室 副室長・准教授 林 透]

内容：

2021年3月3日（水）に、山口大学 令和2年度全学FD・SD講演会『教学マネジメントについて考える～「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに着目して～』を、学内外から164名の参加者を集め、Zoomによるオンライン聴講及び吉田キャンパス・共通教育棟2階会議室による会場聴講を併用したハイブリット型セミナーにて開催した。オンライン聴講を可能としたため、北海道から沖縄にかけて全国各地の教職員が参加した。本講演会は、大学リーグやまぐちの主催で実施された。

冒頭、松野 浩嗣 山口大学 理事・副学長（教育学生担当）・教学マネジメント室長より開会挨拶があり、教学マネジメントの重要性が謳われる中で、所属大学を超えた大学関係者の議論に期待が寄せられた。また、「山」が付く国立3大学が顔を揃え、有意義な交流を行いたい旨、発言があった。

基調講演では、まず、山形大学 学術研究院 教授（教学マネジメント特別委員会委員）浅野 茂 氏より、「山形大学における教学マネジメント ～教育ディレクター制度の深化とアセスメントへの挑戦～」と題して講演があった。各学科・専攻に配置された教育ディレ

クターとの連携により、カリキュラム・マッピングを通じたカリキュラム・ポリシー（CP）及びディプロマ・ポリシー（DP）の妥当性を検証しながら、教育目標の可視化を図っている取組が紹介された。特に、教育目標の妥当性を強調し、そのことを通して初めて、学修成果測定の正確さが担保されると述べられた。また、学修成果のアセスメントの事例として、大学独自に開発した基盤力テストの取組状況について説明があった。

次に、山梨大学 大学院総合研究部 工学域 電気電子情報工学系 教授（教育国際化推進機構大学教育センター長・学長補佐） 埴 雅典 氏より、「山梨大学における教学マネジメント ～内部質保証の実質化と自己点検・改善の定常化～」と題して講演があった。内部質保証システムの概要や実施体制について詳細な説明があり、大学独自に策定した教育環境及び教育内容の内部質保証基準に従って、2019年度に全学部、2020年度に全研究科を対象に「教育内容」の自己点検・評価を試行したことが紹介された。特に、自己点検・評価の4段階判定の目安や記入上の注意など、非常に参考となる内容が沢山盛り込まれていた。

最後に、山口大学 理事・副学長（教育学生担当）・教学マネジメント室長 松野 浩嗣 氏より、「山口大学における教学マネジメント ～学部・研究科との関係性を重視したアクション～」と題して講演があった。山口大学では、2020年1月公表の『教学マネジメント指針』に忠実な取組を行っており、同年4月に創設した「教学マネジメント室」の構成や各教学組織との関係性を中心に、内部質保証体制や教学IRの整備や今後の取組の方向性について紹介があった。

後半では、林 透 教学マネジメント室 副室長の進行のもと、参加者からのチャットによる質問に講師が回答する形で全体共有を行った。参加者からは「基盤力テストで測定できるものはDPを構成するさまざまな能力の一部かと思いますが、他の諸能力はどう評価されているのでしょうか。また、基盤力テストの結果を、カリキュラム改善や授業改善に結びつけるために、教員集団に対してどのようにフィードバックされていらっしゃるのでしょうか。」「2019年度、2020年度の試行を通して、どのような気づきがありましたか、良い点や課題がありましたか。」「教学マネジメント室という新設組織を設置した必要性やねらいについて、お教えてください。」などの質問があった。各講師からは、山形大学の基盤力テストで測定している能力の範疇、山梨大学の教育課程ごとの自己点検・評価を通して見えてきたこと、山口大学の教学マネジメント室設置の意図などについて回答があった。

参加者アンケート結果から満足度の高いセミナーとなり、今後も同様のオンラインによるFD・SD講演会を望むコメントが寄せられ、更なる充実を図っていくこととした。

山梨大学 令和2年度 全学FD・SD講演会
教学マネジメントについて考える
 ～「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに着目して～

趣 旨：2020年1月に公表された『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会）で「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」の三つのレベルに区分して、教学マネジメントのあり方や方向性を指し示しています。多様な学生の受け入れとともに、個々の学生の学修成果の把握や可視化、さらには、社会への情報公開が求められています。一方、隠微評価などの第三者評価では、「学位プログラム」レベルの評価、検証の仕組みの確保が必要とされるなど、複雑化する質保証に対応できる教学マネジメントの組織力が求められています。そこで、今年度の「全学FD・SD講演会」では、教学マネジメントのあり方をテーマに、「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」の各レベルに着目した話題提供を行い、フロアとの意見交換を交えながら、学修者本位の大学教育について考えてみます。

日 時：2021年3月8日（水）14:00～16:30
実施方法：オンライン聴講及び会場聴講（山口大学メディア講義室（吉田キャンパス））
対 象：大学関係者ほか、どなたでも参加可能（参加費無料）
定 員：100名
構 成：
 14：00～14：10 開会挨拶・趣旨説明
 14：10～14：40 【講演（1）】
 「山形大学における教学マネジメント ～教育ディレクター制度の強化とアセスメントへの挑戦～」
 山形大学 学術研究院 教授（教学マネジメント特別委員会委員） 遠野 茂
 14：40～15：10 【講演（2）】
 「山梨大学における教学マネジメント ～内部質保証の実質化と自己点検・改善の定常化～」
 山梨大学 大学院総合研究部 工学域 電気電子情報工学系 教授 兼 埴 雅典
 （教育国際化推進機構大学教育センター長・学長補佐）
 15：10～15：40 【講演（3）】
 「山口大学における教学マネジメント ～学部・研究科との関係性を重視したアクション～」
 山口大学 理事・副学長（教育学生担当）、教学マネジメント室長 松野 浩嗣
 15：40～16：20 【パネル・ディスカッション】
 「教学マネジメントの本質とは何か？」
 （進行：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室 副室長 林 透）
 16：20～16：30 クロージング

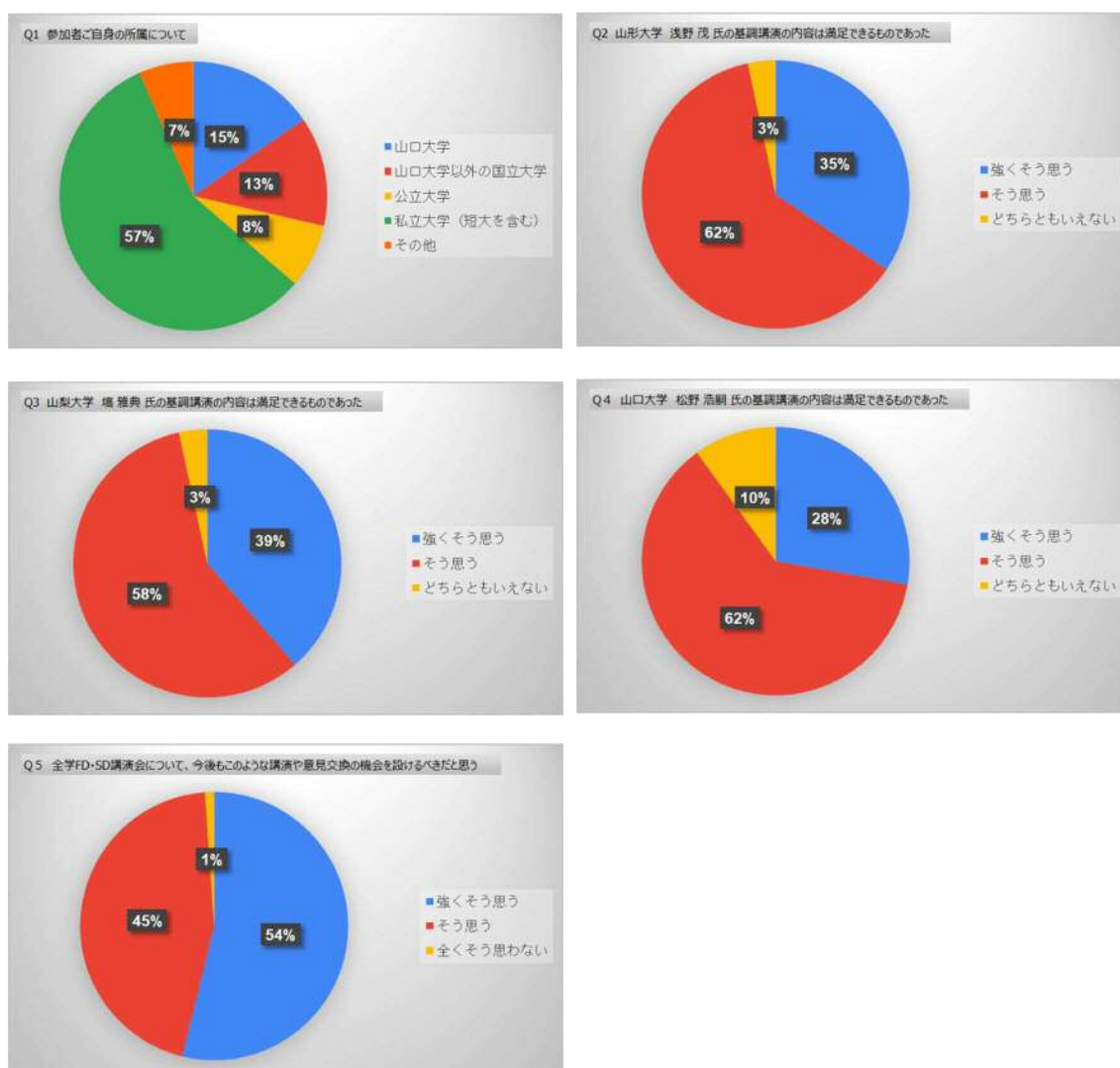
申込先・申込方法
 ＊本参加希望の方は、併せて「全学FD・SD講演会参加申込」として、「①所属、②氏名、③連絡先メールアドレス、④聴講方法の選（オンライン聴講又は会場聴講）」を明記の上、2月28日（金）までに、以下の申込先までメール送付ください。なお、定員を超えた場合には申込期日前に締め切ることがあります。また、オンライン聴講の参加申込者には、別途、アクセス方法をご連絡いたします。
 【申込先】山口大学 学生支援部 教育支援課 教育企画係 E-mail: ga115@yamanashi-u.ac.jp TEL: 083-933-5080

主催：山口大学、共催：大学リーグやまぐち

参加者アンケート結果：

参加者アンケート（N=91）では、三つの基調講演ともに、満足度（「強く思う」「そう思う」）が90%以上であったほか、今後も継続的に開催することを望む声が99%に上った。自由記述において、「学内の教学システムだけでなく、同じ国立大学法人でも異なること等が分かり有意義な研修でした。企画された先生方のご尽力およびオンライン研修ならではの貴重な研修に参加できて良かったです。」「大変勉強になる機会を設けてくださりありがとうございました。アセスメントと改善活動をシステムとして組織に組み込み、そのシステムが十全に機能するようにマネジメントする、その過程で既存の仕組みの過不足をうまく調整し、スクラップ・ビルドしていく継続的な活動全体を『教学マネジメント』と呼ぶのかな、と思いました。」といった具体的な内容理解が深まった旨のコメントが多かった。

オンラインでの開催による講師からの話題提供内容の幅が出て、今後の可能性が広がった貴重な機会となった。



2. 研修会

(1) 2020年度「新任教員研修会（第1回）」実施報告

1. 主催 山口大学 教育・学生支援機構および総務企画部人事課
2. 日時 2020年4月3日（金）13:15～17:00
3. 会場および実施方法（各地区の遠隔講義室を利用し、研修会を実施する）
吉田地区：メディア講義室（主会場）
小串地区：総合研究棟多目的室（8階）（遠隔中継）
常盤地区：工学部 D21 講義室（遠隔中継）
4. 対象者
(1) 2019年度第1回研修会（2019年4月3日）以降に本学の教育職員（フルタイムの契約教育職員を含み、附属学校教育職員を除く。以下同じ。）となった者。
(2) 上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。
5. 参加者数：23名
(内訳) 吉田地区：6名、小串地区：12名、常盤地区：5名
アンケート回収：20枚（回収率 87.0%）

6. 内容

本研修の目的は、新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深めることにある。年2回（第1回目4月、第2回目9月）開催されることとなっている。

具体的には、第1部および第2部の2部構成となっており、第1部では総務企画部人事課が提供するメニューとして、大学の経営方針や新任教員として知っておくべき基礎知識を中心に説明を行い、第2部では教育・学生支援機構が提供するメニューとして、

授業運営や学生対応において知っておくべき基礎知識や注意点を中心に説明を行った。

まず、第1部では、岡 正朗 学長より山口大学の経営方針、現状と課題、さらには、2020年度に取り組むべき重要項目について講話があり、新任教員に向けて期待を込めたメッセージが送られた。その後、学術研究担当、人事労務担当、学術情報担当の副学長（上西 研 副学長、小坂 慎治 副学長、根ヶ山 徹 副学長）より新任教員として知っておくべき基礎知識を中心に説明があったほか、大学研究における知的財産の留意点や個人情報の取扱いについて担当教職員（李 鎔璟 知財教育センター副センター長、庄野 栄二 総務企画部情報企画課長、河上 喜弘 総務企画部総務課法規係長）から説明があった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	10.0%
良かった	11	55.0%
どちらとも言えない	6	30.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	5.0%
合計	20	100.0%



次に、第 2 部では、松野 浩嗣 教育学生担当副学長及び仲間 瑞樹 教育支援センター長から教育・学生支援機構の組織や共通教育の特徴について説明があった後、林 透 教学マネジメント室 准教授より「授業の設計と実施方法について」、岡田 菜穂子 学生支援センター准教授より「障がい学生支援について」、岡田 耕一 情報基盤センター講師より「修学支援システムの使い方について」と題して、授業運営や学生支援において知っておくべき基礎知識や注意点について説明を行った。研修会の途中では、参加する新任教員自身が「授業において大事にしていること、大事にしたいこと」を考えるワークを取り入れながら、新しく担当する授業に向けた心構えを共有し、参加者同士の意識を高め合った。



参加者は前年度より少なめの参加者であったが、参加者アンケートの自由記述では「着任早々は大学のシステムが各大学によって異なるので、こういった研修で説明してもらえるのは受講者側としてもありがたい」「大学全体を俯瞰した視点を持つことができました」といった肯定的なコメントが見られた。



(2) 2020年度「共通教育TA・SA研修会」実施報告

1. 主催 山口大学 教育・学生支援機構
2. 日時 2020年4月9日(木) 13:00~14:30
3. 場所 全体研修：共通教育1番教室、
工学部E棟31番教室(遠隔中継)、
医学部総合研究棟8階多目的室(遠隔中継)
個別研修：共通教育棟(分科会ごと(吉田キャンパスのみ))
4. 対象 共通教育においてTA・SAに採用予定の大学院生・学部生で今回初めて採用された者、およびTA・SAを採用する教員
5. 参加者数：209名(学生196名, 教職員13名)
(内訳)
吉田地区：155名(学生143名, 教職員12名)
小串地区：4名(学生3名, 教職員1名)
常盤地区：50名(学生50名)
アンケート回収：164枚(回収率78.5%)

6. 内容

(1) 第1部 全体研修 13:00~14:00

最初に、仲間 瑞樹 教育支援センター長より「共通教育の特徴とTA・SAの職務内容と注意点」と題して、現行の共通教育カリキュラム編成と特徴、さらには、TA・SAの基本的な心構えについて説明があった。

その後、岡田 菜穂子 学生支援センター・学生特別支援室 准教授より「障がいを持つ学生の対応について」、岡田 耕一 情報基盤センター講師より「出席確認システムと修学支援システムの宿題提出機能の使い方」、森本 宏志 全学労働安全衛生管理室主任・保健管理センター准教授より「大学の授業における安全衛生」と題して説明があり、TA・SAとして知っておくべき個別事項について学んだ。最後に、背戸 英明 教育支援課教育企画係長より「TA・SAの諸手続について」説明があった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	24	14.6%
良かった	89	54.3%
どちらとも言えない	36	22.0%
あまり良くなかった	8	4.9%
良くなかった	7	4.3%
無回答	0	0.0%
合計	164	100.0%



(2) 第2部 個別研修 14:10～

吉田地区のみの開催であった個別研修として、「情報処理」、「多人数・講義系授業科目」、「実験系安全教育」の分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿って、TA・SAに関する詳細の注意点について説明を行った。

今年度は、3キャンパス合計で200名を超える大勢の参加者があり、参加者アンケートの回収率も高かった。参加者アンケートの内容について、満足度68.9%（非常に良かった+良かった）であり、自由記述では「いろいろなことを学びました。非常に良かったです。今後の仕事にも役立ちます。」「資料が分かりやすかったです」といったコメントが見られた。



(3) 2020年度 各学部・研究科 FD コーディネータ研修会 実施報告

1. 主催：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室
2. 日時：2020年5月13日（水）17:45～18:45
3. 会場および実施方法（各地区の遠隔講義室を利用し、研修会を実施する）
（吉田）事務局1号館4階特別大会議室、（常盤・小串）第1テレビ会議室
4. 対象者：各学部・研究科 FD コーディネータ

5. 内容

本研修の目的は、各学部・研究科が FD 計画を策定時に、教育・学生支援機構が企画・提供する各種研修会（全学 FD・SD 講演会、講師派遣型アラカルト研修会、教育改善 FD 研修会など）を組み込む際に、それぞれの研修内容や FD 経費の予算について理解を深めることにある。

具体的には、「1. 本年度の教育・学生支援機構が企画・提供する各種研修会の概要について」「2. 各学部・研究科の FD 計画の立て方について」「3. FD 経費の予算について」「4. 意見交換」の順序で、同研修会が進められた。

まず、冒頭 松野浩嗣 教学マネジメント室長より挨拶があった後、林 透 教学マネジメント室 准教授より、本年度の教育・学生支援機構が企画・提供する各種研修会の概要について説明があった。具体的には、本年度の各種研修会の方針として、大学教育の入口に当たる「高大接続」と出口に当たる「社会接続」を意識した内部質保証の整備が求められている状況を踏まえながら、高校教育改革に伴う新しい時代における大学の授業のあり方や『教学マネジメント指針』に沿った教学マネジメントのあり方に力点を置きたい旨、説明があった。その後、本学の FD 研修の3本柱である「Ⅰ. 全学対象の講演会・研修会・ワークショップ」「Ⅱ. 講師派遣型アラカルト研修会（学部・研究科の FD 活動に大学教育センター等から講師を派遣し実施する研修会）」「Ⅲ. 教育改善FD研修会（学内統一テーマによる学部・研究科主催 FD 研修会）」の具体的な研修メニューについて説明を行った。特に、今年度においては、オンライン授業づくりに関する FD などを適宜、企画実施したい旨、説明を行った。



次に、各学部・研究科の FD 計画の立て方及び FD 経費の予算について、同じく、林 透 教学マネジメント室 准教授より説明があった。具体的には、「2020年度 各学部・研究科 FD 計画の策定について（依頼）」に基づき、各学部・研究科における FD 計画及び所要経費を所定様式にとりまとめ、5月下旬までに提出するように依頼を行った。併せて、当該 FD 計画を策定する際の留意点につ



いて詳細に説明を行った。

最後に、FD コーディネータとの意見交換では、新型コロナウイルス感染症の影響に伴い、オンライン授業が余儀なく行われている現状において、オンライン授業に関する FD を早めに企画実施してほしいとの要望・意見があり、教育・学生支援機構として、全学対象の FD・SD として早急に企画したい旨、説明を行った。

学内の FD 活動を行っていく上で、大学教育機構と各学部・研究科 FD コーディネータとの連絡調整は大事な機能であり、本研修会を契機に、お互いの役割を明確化しながら、FD 活動の継続的な充実を図っていきたい。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	15.4%
良かった	6	46.2%
どちらとも言えない	4	30.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	7.7%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

(4) オンラインによるオンライン授業づくりのための

ランチョンFD (4回シリーズ) 実施報告

1. 主催：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室
2. 日時・講師：第1回：6月12日（金）12：00～12：40
創成科学研究科（工）准教授 鳴海孝之
第2回：6月17日（水）12：00～12：40
教学マネジメント室 准教授 林 透
第3回：6月19日（金）12：00～12：40
創成科学研究科（理）教授 西井 淳
第4回：6月24日（水）12：00～12：40
経済学部 教授 武本 Timothy
3. 実施方法：Zoom によるオンライン開催
4. 参加者：第1回72名、第2回55名、第3回54名、第4回56名 計237名
5. 内容

新型コロナウイルス感染症のため、大学の授業は原則としてオンラインによる授業が主となっている。このため、全学の教職員を対象に、Zoomによる「オンラインランチョンFD」を企画した。この企画については、5月中旬に開催されたFDコーディネータ研修会において、学部のFDコーディネータから強い要望があり、教育・学生支援機構 教学マネジメント室が学部教員の協力を得て実現した。4回ともに、多くの参加者があり、延べ237名の参加者を数えた。

第1回・第2回は「【Part1】オンライン授業づくりに役立つ基礎知識」として、「遠隔講義ポータル」の紹介のほか、共通教育・専門教育での実践事例を通して、オンライン授業づくりに役立つ基礎知識を学んだ。第1回では、鳴海先生から、工学部での実践事例を中心に、オンライン授業での多様な方法を紹介いただくとともに、実際のオンライン授業での学生の反応や学習評価のあり方などについて紹介のほか、実験の様子を紹介やアクティブラーニングへの活用案などの提案があった。第2回では、林から、「遠隔講義ポータル」の紹介のほか、共通教育における大人数クラスでのオンライン授業実践を通して、学習者のためのオンライン授業設計のポイントを紹介し、今後のブレンディッド学習の重要性を強調した。参加者からは、「遠隔講義ポータル」に関する要望も寄せられ、適宜、

**オンラインによる
オンライン授業づくり
のためのランチョンFD**

新型コロナウイルス感染症のため、大学の授業は原則としてオンラインによる授業が主となっています。このため、全学の教職員を対象に、Zoomによる「オンラインランチョンFD」を企画いたしました。ぜひ、リアルタイムでご参加をお待ちしております。なお、当日の記録動画を後講可能とする予定です。

【Part1】オンライン授業づくりに役立つ基礎知識

「遠隔講義ポータル」の紹介のほか、共通教育・専門教育での実践事例を通して、オンライン授業づくりに役立つ基礎知識を学びます。

第1回：6/12（金）12:00～12:40 （講師：創成科学研究科（工） 准教授 鳴海 孝之） 工学部での実践事例を中心に、オンライン授業での多様な方法を紹介いただくとともに、実際のオンライン授業での学生の反応や学習評価のあり方などについてお話しします。	第2回：6/17（水）12:00～12:40 （講師：教学マネジメント室 准教授 林 透） 「遠隔講義ポータル」の紹介のほか、共通教育における大人数クラスでのオンライン授業実践を通して、学習者のためのオンライン授業設計のポイントをお話しします。
---	---

【Part2】オンライン授業づくりに役立つ実践スキルと応用

修学支援システム、Moodle、Zoomなどを活用したオンライン授業実践を通して、実践スキルと応用を学びます。

第3回：6/19（金）12:00～12:40 （講師：創成科学研究科（理） 教授 西井 淳） 理学部での実践事例を中心に、オンライン授業での多様な方法を紹介いただくとともに、実際のオンライン授業での学生の反応や学習評価のあり方などについてお話しします。	第4回：6/24（水）12:00～12:40 （講師：経済学部 教授 武本 Timothy） 語学教育におけるオンライン授業実践内容や工夫している点などを紹介いただくとともに、実際のオンライン授業での学生の反応や学習評価のあり方などについてお話しします。
---	--

対応することとした。

第3回・第4回は「【Part2】オンライン授業づくりに役立つ実践スキルと応用」として、修学支援システム、Moodle、Zoomなどを活用したオンライン授業実践を通して、実践スキルと応用を学んだ。第3回では、西井先生から、理学部での実践事例を中心に、オンライン授業での多様な方法を紹介いただくとともに、実際のオンライン授業での学生の反応や学習評価のあり方などについて、これまでの長年の授業実践を踏まえながら詳細の説明があった。特に、後半の学生同士の相互評価・相互採点の効果については参加者から強い関心が寄せられた。第4回では、武本先生から、Zoomの各種機能紹介をはじめ、語学教育におけるオンライン授業実践内容や工夫している点などを紹介いただいた。学生の主体性を引き出すポイントやオンライン授業の場こそ「学びの道場」であるとの説明があり、語学担当教員を中心に多くの質問があった。

以上のように、お昼の短い時間帯ではあったが、4回ともに中味の濃い内容となった。特に、今回のオンラインランチョンFDでは医学部教員の参加が多かった。参加者アンケートも概ね好評で、「オンラインで、昼食時間に有益な情報を配信するのは、大変良い取り組みと思います。キャンパスと

無関係に参加できますし、チャットを利用できるのもメリットです。」「具体的な活用例を豊富に紹介いただいて、大変参考になりました。」遠隔講義を始めたばかりなので、とても参考になりました。全学的なZOOM使用方法など、学習会をしていただけると助かります。貴重な話題提供していただいた先生に感謝しています。」といった自由記述が目立ち、お昼休み時間での参加しやすさ、キャンパス間の壁を超えるオンライン実施などに満足する声が聞かれた。今後においても、オンライン授業をテーマとした内容、オンラインを活用したFDの実施などを企画していきたい。

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	18	36.0%
良かった	30	60.0%
どちらとも言えない	1	2.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.0%
合計	50	100.0%

(5) 教育学部FD研修会「学位プログラム」レベルの教学マネジメントの対応方策

日 程：令和2年9月16日（水） 15:00～15:30

場 所：教育学部 11・21 番教室，Web 参加

講 師：林 透（教学マネジメント室 准教授）

参加者：69名（アンケート回収 38名）

【研修内容】

最初に、教育学部森下徹教授から教育学部アカルト型FD研修会の主旨説明があった。その後、教学マネジメント室林透准教授より『「学位プログラム」レベルの教学マネジメントの対応方策』について説明があった。

まず、教学マネジメントにかかる学内組織体制について、今年4月、教育・学生支援機構に教学マネジメント室が設置され、教育・学生支援機構長（副学長）を室長とし、教育開発，教学IRの役割・機能を担う組織が新たに設置されたこと、及び教学マネジメント室と教学組織との関連性について説明があった。

つづいて、『教学マネジメント指針』について、大学は内部質保障の基準の確立が求められていること、「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルの3つの階層で、3ポリシーに基づいてエビデンス（教育成果・学習成果）をもって質保証の検証をしなければならないこと、検証を支えるための教学IR，教育充実のためのFD・SDが必要になること、特にDP・CPがしっかりと妥当なものになっているか、またそれが検証されているかがポイントになることの説明があった。また、『教学マネジメント指針』は、令和4年度に予定されている機関別認証評価に求められるさまざまな基準にリンクしていること、国立大学法人評価の現況調査表や運営費交付金における教育・研究に関する評価指標ともリンクしていること、国立大学法人ガバナンス・コードで求められている情報公表ともリンクしていることなどの説明があった。

その上で、「学位プログラム」レベルで対応すべきことの方向性について説明があった。まず、『教学マネジメント指針』の別紙1で示されているDP・CPをどのようなエビデンスをもって把握し確認していくのかという関連図に従って、教育学部小学校教育コース（小学校総合選修）の例が紹介された。また、DP・CPの妥当性，教育成果・学習成果の妥当性を評価するために、学位プログラムの点検評価について新たな枠組みの構築が求められており、例として新潟大学の学位プログラム評価指標が紹介された。

山口大学においては教学マネジメント室において学位プログラム評価の枠組みのたたき台を作成し、学部との意見交換を行いながら構築していく予定であることの説明があった。また、学位プログラム評価については人材育成の根幹の部分であるため、やられる評価ではなく、育成する学生のために評価を受けてほしいと学部教員へ理解と協力を求めた。



【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	1	2.6%
良かった	21	55.3%
どちらとも言えない	13	34.2%
あまり良くなかった	3	7.9%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	38	100.0%

感想の自由記述

- ・全く知らない内容だったので大変勉強になった。
- ・資料がわかりやすかった。
- ・学位プログラムの新しい方向がわかった。求められているものが理解できた。
- ・わかりにくかった。
- ・知識の乏しい者もいるのでわかりやすいと良いと思う。
- ・例示があればイメージがもっと伝わったと思う。
- ・教学マネジメント室の活動内容を知ることができた。学部として行うべき事柄の概要がわかった。
- ・本学部の場合、学位プログラムレベルについて自由度がほとんどない。教員免許について文科の要求に応えるだけで忙しい。モチベーションが続かない。
- ・認証評価の作業と一体で行ってほしい。

開催時期等についての自由記述

- ・参加者が議論できるよう、もう少し時間をかけてほしい。
- ・会議前でない方が良い。
- ・9月の教授会は議事が多いので、9月以外の方が良い。
- ・議題が多い時はやめてほしい。

(6) オンライン授業づくりのためのランチョンFD（実践編） 【4回シリーズ】実施報告

- 主催：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室
- 日時・講師：第1回：9月17日（木）12：00～12：40
 医学系研究科（保健）教授 田中愛子
 第2回：9月23日（水）12：00～12：40
 教学マネジメント室 准教授 林透
 第3回：9月25日（金）12：00～12：40
 創成科学研究科（理）教授 西井淳
 第4回：9月28日（月）12：00～12：40
 情報基盤センター 講師 齊藤智也
- 実施方法：Zoomによるオンライン開催
- 参加者：第1回55名、第2回66名、第3回67名、第4回63名 計251名
- 内容

新型コロナウイルス感染症のため、後期の授業もオンラインによる授業が引き続き実施されるため、6月時開催の好評に伴い、全学の教職員を対象に、Zoomによる「オンラインランチョンFD（実践編）」を改めて企画した。今回の企画も、教育・学生支援機構 教学マネジメント室が学部教員の協力を得ることで実現できた。4回ともに、多くの参加者があり、6月時開催を超える、延べ251名の参加者を数えた。

第1回・第2回は「【Part1】各種授業形態に応じたオンライン活用に学ぶ」として、オンラインによる問題解決学習やグループワークを取り入れたアクティブ・ラーニング型授業など、前期の授業実践の紹介により、オンライン授業づくりを学んだ。第1回では、田中先生から、医学部保健学科での授業実践事例を紹介いただき、時差の少ないオーストラリアの外国人教員とのオンラインによる問題解決学習に発展した様子が詳細に説明された。第2回では、林から、前期におけるオンライン授業状況全般を全学アンケート結果を踏まえながら概要紹介したほか、Zoomによるグループワークを取り入れたオンライン授業づくりの基礎知識について説明した。なお、話題提供の途中で、前期の授業でのブレイクアウトセッションの活用状況を投票機能による情報収集した。

第3回・第4回は「【Part2】オンライン授業による課題設定や評価方法を学ぶ」として、オンライン授業における課題設定や評価方法を学び、Moodleによる理解度チェック作成やルーブリック作成機能を活かした相互評価などを学んだ。第3回では、西井先生から、理学部

オンライン授業づくり のためのランチョンFD (実践編)

新型コロナウイルス感染症のため、後期の授業もオンラインによる授業が引き続き実施されます。前期の授業実践の紹介により、オンライン授業づくりを学びます。ぜひ、リアルタイムでご参加をお待ちしております。なお、当日の記録動画を視聴可能とする予定です。

【Part1】各種授業形態に応じたオンライン活用に学ぶ

オンラインによる課題解決型学習やグループワークを取り入れたアクティブ・ラーニング型授業など、前期の授業実践の紹介により、オンライン授業づくりを学びます。

第1回：9/17（木）12:00～12:40 (講師：医学系研究科（保健）教授 田中 愛子)	第2回：9/23（水）12:00～12:40 (講師：教学マネジメント室 准教授 林 透)
---	--

『看護学概論Ⅰ』で生まれた学生からの質問をきっかけに、PBL（課題解決型学習）「国際看護学」（スローン教授：オーストラリア）に繋がったオンライン授業の実践例についてお話します。前期におけるオンライン授業状況全般を紹介するとともに、ZoomやSlackなどによるグループワークを取り入れたオンライン授業づくりの基礎知識についてお話します。

【Part2】オンライン授業による課題設定や評価方法を学ぶ

オンライン授業における課題設定や評価方法は重要な関心テーマです。そこで、Moodleによる理解度チェック作成やルーブリック作成機能を活かした相互評価などについて学びます。

第3回：9/25（金）12:00～12:40 (講師：創成科学研究科（理）教授 西井 淳)	第4回：9/28（月）12:00～12:40 (講師：情報基盤センター 講師 齊藤 智也)
--	--

長年のオンライン授業実践経験を活かしながら、Moodleによるルーブリック作成と学生によるレポート相互評価の方法を中心にお話します。先生方から要望の多いMoodleによる理解度チェック作成（○×問題、多肢選択問題、組み合わせ問題、ランダム問題）の手順等についてお話します。

での実践事例を中心に、Moodle によるループリック作成と学生によるレポート相互採点の方法をデモ画面に沿って分かりやすい説明があった。第 4 回では、齊藤先生から、Moodle による理解度チェック作成として、○×問題、多肢選択問題、組合せ問題、ランダム問題の設定の手順について、デモ画面に沿って分かりやすい説明があった。後半の 2 回にわたった Moodle の機能説明は大変に分かりやすく、参加者から多数の質問が寄せられ、ニーズの高さが実感された。

以上のように、6 月開催時と同様に、お昼の短い時間帯ではあったが、4 回ともに中味の濃い内容となった。参加者アンケート（47 名回答（回答率 18.7%））も前回以上に好評であった。

「新しい授業方法において先生方の

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	21	44.7%
良かった	25	53.2%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.1%

工夫が参考になり非常に良かった」「前期、初めてのオンライン授業で戸惑いもありましたが、ほかの先生方の取り組みを知り、さまざまな可能性を感じることができました。」「説明が具体的で、わかりやすかった。」といった自由記述が目立ち、前期の授業実践事例が参考となったということや具体的な操作説明などを行うことで、参加者の理解が深まったことが良く伝わってくるコメントが多かった。お昼休み時間での参加しやすさ、キャンパス間の壁を超えるオンライン実施などに満足する声が聞かれた。今後においても、ハイブリット型授業なども視野に入れながら、オンライン授業をテーマとした内容、オンラインを活用した FD の実施などの企画の充実を図っていきたい。

(7) 2020年度「新任教員研修会（第2回）」実施報告

1. 主催 山口大学 教育・学生支援機構および総務企画部人事課
2. 日時 2020年9月24日（木）13:30～16:30
3. 会場 吉田キャンパス：共通教育棟16番教室
常盤キャンパス：工学部E31講義室,
小串キャンパス：医学部総合研究棟8F多目的室
4. 対象者
 - (1) 前回の研修会（2019年9月25日）以降に本学の教育職員（附属学校を除く。以下同じ。）となった者。
 - (2) 上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。
5. 参加者数：16名（アンケート回収：12枚（回収率75.0%））

6. 内容

本研修の目的は、新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深めることにある。年2回（第1回目4月、第2回目9月）開催されることとなっている。

具体的には、第1部および第2部の2部構成となっており、第1部では、本学の教育システムの特徴や近年の入学者の傾向などを中心に説明を行い、第2部では、日々の教育活動において知っておいてほしい事項の説明とともに、自らの教育活等を見つめるミニワークを行った。

第1部前半では、松野 浩嗣 教育学生担当副学長より「これからの山口大学の教育について～データサイエンス教育を中心に～」と題して、本学が力を入れて取り組んでいる全学的なデータサイエンス教育の導入の状況や社会人向けプログラムの実施などについて説明があった。その後、仲間 瑞樹 教育支援センター長より「山口大学の共通教育について」と題して、本学の共通教育の枠組や特徴について説明があった。さらには、林 寛子 アドミッションセンター准教授より「山口大学の入試動向と近年の学生の傾向」と題して、本学の入試動向の詳細の状況や入学者の追跡調査を通じた学生の資質能力等の傾向について説明があった。

第1部後半では、岡田 菜穂子 学生支援センター准教授より「障がい学生支援について」と題して、学生特別支援室の業務内容や障がい学生対応の基礎的情報について説明があった。その後、林 透 教学マネジメント室 准教授より「三つのポリシーとシラバス～大学教育の内部質保証のために～」と題して、大学教育の内部質保証における三つ



のポリシーの重要性やシラバス作成のポイントについて説明があった。さらに続けて、「自らの教育活動を振り返ってみよう～ティーチング・ポートフォリオ (TP) への誘い～」と題して、TP チャートというワークシートを使い、参加者個々人のこれまでの教育活動を振り返ることを通して、自分自身の教育理念を明確化し、今後の教育活動の目標設定を行うワークを行った。



前年度並みの参加者数が集まり、参加者アンケートについては、下表のとおりであった。

自由記述では「大学の方針や傾向などを理解することができた」「定期的に研修会が行われて前回のレビューあるいは新しく学ぶことができたことは良かった」などのコメントが寄せられた。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	8.3%
良かった	6	50.0%
どちらとも言えない	4	33.3%
あまり良くなかった	1	8.3%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	12	100.0%

(8) 「ラーニング・アドバイザー養成講座2020」実施報告

【概要】

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援について重要性が増しており、授業内外における教員による学習支援に加え、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、事務職員や学生がその役割の一端を担っている。しかし、近年の学生の多様化に伴い、当該学生への指導助言に苦慮する場面も見受けられる。このため、可能かつ適切な範囲において、柔軟かつ積極的な学習支援ができる人材（「ラーニング・アドバイザー」）が必要となっている。2017年度以降、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を企画実施してきたが、今年度からは、これまでの同講座の実績を踏まえながら、山口県外の大学関係者に対象を広げ、オンラインにて実施した。

今年度は、コロナ禍の影響を受けて、オンラインによる2回シリーズとして、12月10日（木）に開催された第1回（アカデミックスキル編）では定員を超える39名が参加し、12月21日（月）に開催された第2回（ピア・サポート編）は大学マネジメントセミナー2020 in やまぐちとの合同開催（当該参加者数等は別途、大学マネジメントセミナー2020 in やまぐちの実施報告を参照）とし、レポート課題提出を含め、17名が講座修了者となった。

第1回（アカデミックスキル編）では、まず前半に、崇城大学 SILC 宝来 華代子 准教授から「学習支援の実践と効果～崇城大学 SILC・SALC の取組を通して～」と題し、崇城大学での SILC（Sojo International Learning Center）での英語カリキュラムにおける自律学習支援での成果を基礎に、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）を通して SALC（Self-Access Learning Center）を全学規模・学科規模で展開し、学科教員 FDer や学生ファシリテーター養成を通して、組織的な自律学習支援の実践と効果を紹介いただいた。

後半のグループワークセッション「自律学習のためのアドバイジングスキルを学ぶ」では、引き続き、宝来先生のファシリテーションのもと、Zoom ブレアウトセッションによるペアワーク・グループワークを通して、アドバイジングスキルを活用した学習者への関わり方を具体的に学んだ。講座終了後も講師への質問が相次ぎ、大変好評であった。

ラーニング・アドバイザー養成講座2020 ～アドバイジングとピア・サポートを学ぶ～

趣 旨：大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援について重要性が増しています。授業内外における教員による学習支援に加え、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、事務職員や学生がその役割の一端を担っています。しかし、近年の学生の多様化に伴い、当該学生への指導助言に苦慮する場面も見受けられます。このため、可能かつ適切な範囲において、柔軟かつ積極的な学習支援ができる人材（「ラーニング・アドバイザー」）が必要となっています。

これまで、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を2017年度より企画実施し、2020年度以降も開催し、引き続き実施してきます。学習支援を通して中心となって取り組む「内部関係者の連携」「各種取組」の学生のニーズや状況を把握し、学生の学びの好循環に資する取組・取組の導入などができるとして「ラーニング・アドバイザー」に必要と見られることを目指します。

注 冊：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室
対 象：学習支援に関心のある大学教職員、大学生、大学院生
参加費：無料
定 員：30名
実施方法：オンライン受講
同時内容：
12月10日（木）14:30～16:30
14:30～14:40 開会挨拶・趣意説明・チェックイン
14:40～15:10 「学習支援の実践と効果
～崇城大学 SILC・SALC の取組を通して～」
講師：崇城大学 SILC 准教授 宝来 華代子
(小休憩)
15:15～16:10 「自律学習のためのアドバイジングスキルを学ぶ」
講師：崇城大学 SILC 准教授 宝来 華代子
(小休憩)
16:15～16:30 クイズとピア・サポート課題提示
(全席進行：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室 林 浩)

2 日目（ピア・サポート編）※大学マネジメントセミナー2020合同開催
12月21日（月）14:30～16:30
14:30～14:40 オープニング・趣意説明
14:40～15:55 講義
●「ピア・サポート支援」小グループでの自主的な学習支援の実践方法について～
山口大学 教育支援機構 教員 山本アサ子 准教授 山本 浩 氏
●「アドバイジング」実践を促す授業力・行動力は？
筑波大学 研究推進部 外部連携課 講師 / URA 池田 一郎 氏
●「自律的な内部関係者を育てるには～その仕組みづくり～」
大阪府立大学 副学長（総務） 高橋 直也 氏
15:55～16:30 質疑応答・クイズ

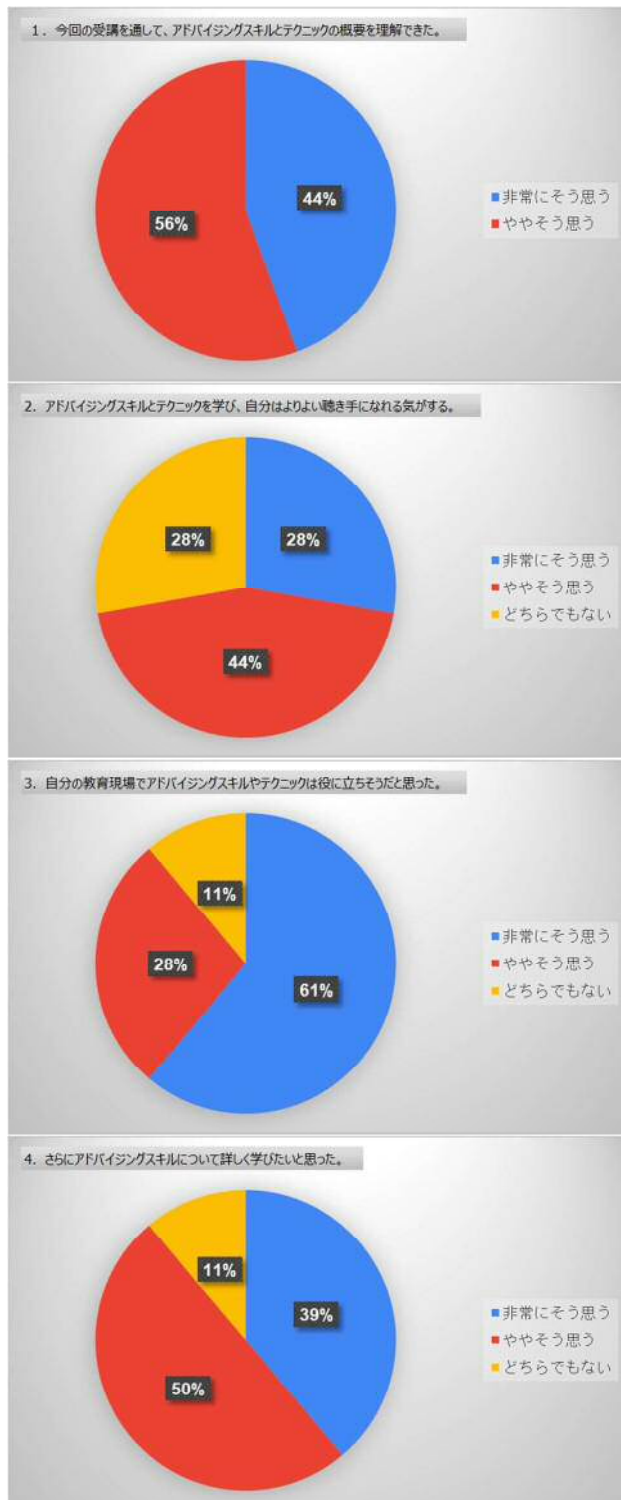
受講日程：
(1) 大学における学習支援の重要性について理解し、説明することができる。
(2) 学習支援者に必要なスキル・態度について理解し、活用することができる。
(3) 学習支援者としての役割を定め、実践することができる。

申込方法・期間：
参加希望者は、各自「ラーニング・アドバイザー養成講座参加申込」に、「(1) 所属・職名、(2) 氏名、(3) 連絡先メールアドレス、(4) 【A】、①必ずすべて参加【B】、②のみ参加【C】、③のみ参加【D】」のいずれかを選択し、申込上 **12月4日（金）までに**、下記申込先宛てに、メール（ga115@yamaguchi-u.ac.jp）でお申し込みください。なお、定員を超えた場合は、抽選により参加ができません。
また、参加者には、別途、オンラインアクセスに関する情報を事前に連絡いたします。

【申込先】
山口大学 学生支援部 教育支援課 教育企画係
TEL：083-933-5060
E-mail：ga115@yamaguchi-u.ac.jp

【参加者アンケート (N=18)】

参加者アンケートの主な回答結果は下図のとおりであり、自由記述では「学生に寄り添いながら、成長を促す姿勢に感銘を受けました。学生の主体性や能動性だけに期待をするのではない、自律学習とはまさに「何を教えた」のではなく「何を学んだのか」の視点に立った教授法だと思いました。」「ティーチングとアドバイジングの違いを分かりやすく整理してくださったところ、自律学習について応用言語学の視点からの説明で簡潔に分かりやすく説明してくださったところは、自分自身が学生へのアプローチをどうするか、また学生自身がどの段階にいるのかというところを整理しやすくしてくれた。」などのコメントがあった。



(9) 大学マネジメントセミナー2020 in やまぐち 『大学マネジメントのためのマインドセット』開催報告

日 時：令和2年12月21日（月）14:30～16:30

方 法：オンライン聴講及び会場聴講（吉田キャンパス・大学会館2階会議室）

参加者：124名（オンライン聴講114名・会場聴講10名）

主 催：大学リーグやまぐち、山口大学

共 催：大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会

概 要：

14:30～14:40 オープニング・趣旨説明 山口大学 総務企画部長 多賀谷 勇治

14:40～15:55 基調講演

①「ピア・サポートを通じた学び合い・助け合い～学生支援と働き方について～」

関西大学管財局管財課職員 / 日本ピア・サポート学会理事 松田 優一 氏

②「ファンドレイジング意識を持った提案力・行動力とは？」

筑波大学研究推進部外部資金課主幹 / URA 池田 一郎 氏

③「自律的な内部質保証を育むには～その仕組みづくりと意識づくりを学ぶ～」

大阪府立大学 副学長（統括） 高橋 哲也 氏

15:55～16:30 質疑応答・クロージング

[総合進行：山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室 副室長・准教授 林 透]

内 容：

2020年12月21日（月）に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2020 in やまぐち『大学マネジメントのためのマインドセット』を、学内外から124名の参加者を集め、Zoomによるオンライン聴講及び吉田キャンパス・大学会館2階会議室による会場聴講を併用したハイブリット型セミナーにて開催した。オンライン聴講を可能としたため、東北から沖縄にかけて全国各地の教職員が参加した。本セミナーは、大学リーグやまぐち、山口大学の共同主催、大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会の共催で実施された。

冒頭、多賀谷 勇治 山口大学 総務企画部長より開会挨拶があり、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、所属大学を超えた大学関係者の議論や情報交流に期待が寄せられた。

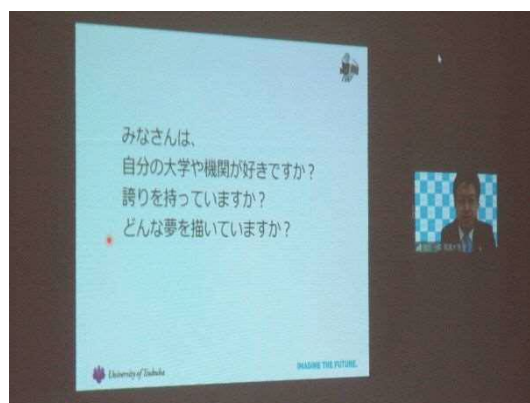
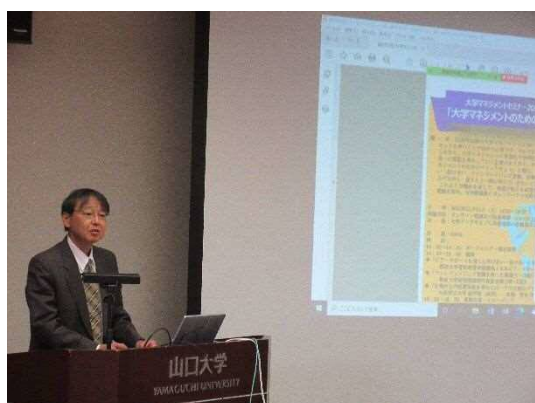
基調講演では、まず、関西大学管財局管財課職員 / 日本ピア・サポート学会理事 松田 優一 氏より、「ピア・サポートを通じた学び合い・助け合い～学生支援と働き方について～」と題して講演があった。ピア・サポートは教育活動であって、対人援助の知識と技術を学び、実践することで、援助する方も援助される方も人間力を高めることができ、ボランティアとは異なる。日本では、いじめが社会問題化した1990年代から学校現場を中心にピア・サポートが注目され始め、今日では大学生支援にも活用され、広がりを見せている。ピア・サポートによる「自立を促し、エンパワーを生む」コンセプトは、大学教職員の働き方における協働意識に適用でき、大学マネジメント力の向上に役立つことを意識させる講演となった。

次に、筑波大学研究推進部外部資金課主幹 /URA 池田 一郎 氏より、「ファンドレイジング意識を持った提案力・行動力とは？」と題して講演があった。ファンドレイジングの基本的な考え方を紹介しながら、大学等も広義の意味の”NPO”と捉えながら、学生を含めたステークホルダーのため、社会貢献のために、必要とされる資金を獲得し、新たなイノベーションを起こしていく意識や行動力の必要性を訴えた。筑波大学での具体的な取組事例を踏まえながら、聴く側にとって非常に説得力のある講演となった。

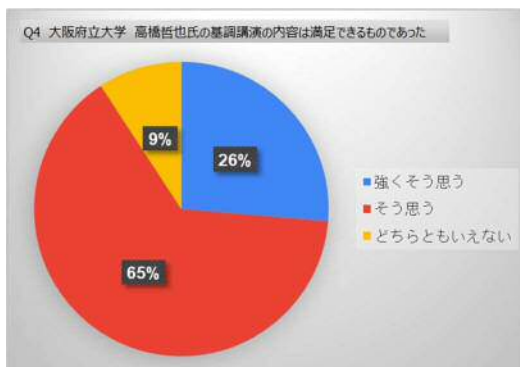
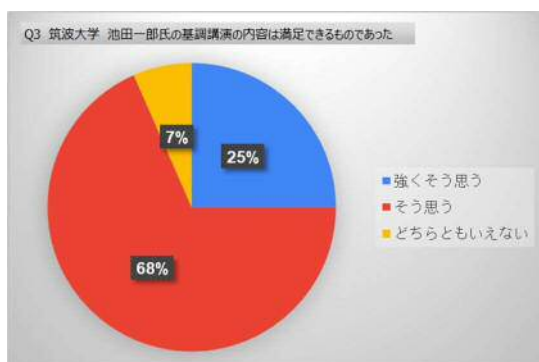
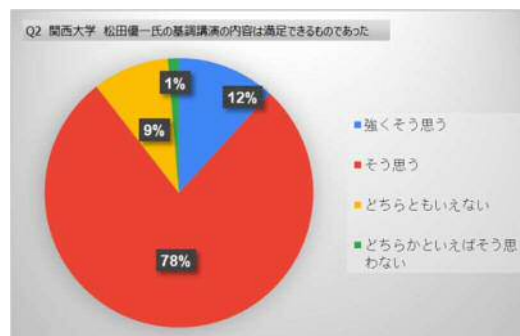
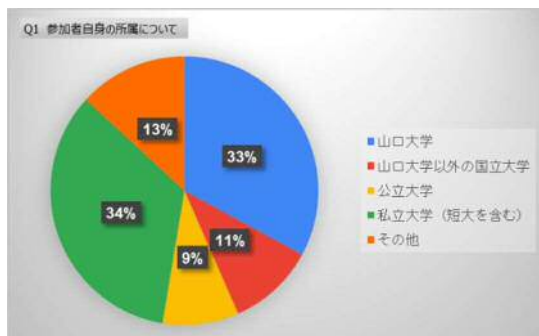
最後に、大阪府立大学 副学長（統括） 高橋 哲也 氏より、「自律的な内部質保証を育むには～その仕組みづくりと意識づくりを学ぶ～」と題して講演があった。内部質保証の定義を説明しながら、学修成果についての内部質保証の主体はカリキュラムや卒業要件を決める学科であると強調した。その観点から、大阪府立大学では、ボトムアップでの議論を醸成する教育戦略室会議の設置や内部質保証のためのスタートアップ事業の導入を通して、学科が主体となった自律的な内部質保証体制の整備を進めている説明があり、各大学での関心テーマである自律的な内部質保証の確立にとって示唆に富む講演となった。

後半では、林 透 教学マネジメント室 副室長の進行のもと、参加者からのチャットによる質問に講師が回答する形で全体共有を行った。参加者からは「大学職員に対して経営意識をどのように養っていったらよいのか」「ピア・サポートの取組を充実する上で、工夫している点はどのようなことか」「産学連携活動等が大学教員にとって評価の対象になっておらず、働きかけにくい側面があるが、どのように考えるか」「学修成果の効果的な測定方法のあり方」などの質問があった。各講師からは、「大学組織は複雑体であるが、まずは、自分の大学を良く知ることが大事であり、そこから色々なことが見えてくる」「学生から見て、教職員がナナメの立場から温かく対応することを通して、学生自身の自主性を育むようにする」「何のための研究なのか、誰のための研究なのかを起点に研究者自身や研究支援者が考えていくことが大事である」「学修成果の測定方法について、上から押し付けるのではなく、組織として納得感のあるものを導入・定着していく意識が大事である」とのコメントがあり、これからの大学マネジメントのためのマインドセットについて相互に考え、認識を強くする有意義な意見交換となった

参加者アンケート結果から満足度の高いセミナーとなり、今後も同様のオンラインセミナーを望むコメントも寄せられ、更なる充実を図っていくこととした。



参加者アンケート（N=76）では、三つの基調講演ともに、満足度（「強く思う」「そう思う」）が90%以上であったほか、今後も継続的に開催することを望む声が95%であった。自由記述において、「研究会レベルにとどまらず、所属する大学の潜在力、適正・ニーズを踏まえたフィードバックに持っていく取組こそが、教職協働として重要であると感じた」「成功事例だけではなく、失敗や課題も聞いてみたいと思います」といった積極的なコメントがあった。今後は、若手・中堅職員がもっと参加するような工夫を凝らしていきたい。オンラインでの開催による講師からの話題提供内容の幅が出て、今後の可能性が広がった貴重な機会となった。



(10) 農学部FD研修会「授業の過程における著作物利用ルール変更への対応」

日程：令和3年2月17日（水）〔吉田地区〕13:30～14:10

場所：農学部大会議室

講師：小川 明子（知的財産センター長・国際総合科学部教授）

参加者：28名（アンケート回収 22名）

【★説明内容】

アラカルト研修「授業の過程における著作物利用ルール変更の対応」について、小川明子知的財産センター長・国際総合科学部教授が講師を務め、著作権法35条改正の要点と教育場面での注意点について分かりやすく解説された。

著作権法35条が改正され、公衆送信に係る補償金の支払が発生することとなったが、令和2年度においては、コロナ禍の特別措置として無償となったが、令和3年度以降は、補償金の支払義務が実際に発生することになる。また、著作権法35条の規定を詳細に見ながら、対象となる「教育機関」「授業」の範囲、「複製」「公衆送信」「公の伝達」の意味や注意点について説明があった。さらには、著作権者の利益を不当に害することとなる場合の例示に沿って説明があった。



コロナ禍において、大学教育でのデジタル活用場面が急激に増える中で、大変有意義な研修会となり、後半の質疑応答でも活発な意見交換がなされた。

後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

Q1 Moodle へのコンテンツ掲載は公衆送信に当たるのか。

A1 公衆送信に当たる。著作権者の利益を不当に害することがないように注意すべきである。

Q2 地上波のTV録画を活用することは問題ないのか。

A2 私的複製は認められているが、例えば、ドラマを丸ごと見せることがないようにしないといけない。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	14	63.6%
良かった	8	36.4%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

Q3 YouTube に掲載されているコンテンツ等については、どうか。

A3 YouTube については、アップロードしたコンテンツの活用権限が YouTube 側に委ねるため、気をつけないといけない点がある。

Q4 教員が作成したファイルの学生への共有については問題ないのか。

A4 教員の方で、出所表示を行い、適切な引用の範囲内であれば、問題がない。



(11) 令和2年度 人文学部アラカルト FD 研修会

「コロナ禍における就職活動」(オンライン)

日時：令和3年3月17日(水) 14:30～15:00

場所：人文学部・理学部大会議室より Webex で配信

講師：平尾元彦先生

参加者：42名(教員39名, 職員3名)(アンケート回収14名)

【研修内容】

アラカルト研修「コロナ禍における就職活動」について、平尾元彦 学生支援センター教授より「いま起きていること」と「これから起こること」そして、「今からやるべきこと」について主に以下のとおり解説があった。

1. いま起きていること ～皆が同じではないの始まり

・コロナ禍により、2021年3月卒業生を対象とした就職活動は急速 WEB 化が進んだが、2022年3月卒業生については、当初から WEB にて就職活動を行うことになる。WEB にて就職活動が実施されることにより、交通費、宿泊費が抑えられ、面接日の調整も容易になるメリットがあるが、オンラインでの面接を通して、対面での面接のようなやり取りがしづらい状況があり、納得感が得にくい傾向がある。

・就職・採用活動の極端な早期化・長期化を抑制するため、「2021年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者 に係る就職について(申合せ)」にて、現行の日程と枠組みを維持するように、就職・採用活動スケジュールが示されている。

・近年の社会情勢により、就職・採用活動は大量エントリー・大規模マッチングではなく、採用手法・就活手法が多様化している。

2. これから起こること ～新しい就職活動の幕開け

・売り手市場から買い手市場への変化が起こっており、事前に決めた採用枠に達しなくても、採用要件にあてはまらない人物は採用しない厳選採用へシフトする企業も増えている。

・WEB での就職・採用活動が進化・深化し、いつでも、どこでも就活やオンラインインターンシップが実施できるようになってくる。

・マッチングの効率化が求められるため、インターンシップが重要な役割を持ってきている。

・多様な就職・採用活動が行われているため、仕組みを理解して、適切に利用することが大事。困ったときは大学への相談も必要。

3. 今からやるべきこと ～ 就職活動は、準備が重要

・ネット環境を整備するとともにオンライン化への対応力をつけること

・これまでやってきたこと、これからやることを言語化し、意味づけしておくこと

・適切な情報源から必要な知識を抽出し、活用できるように情報感度をあげること。

・3年生以上には、毎週月曜日学生支援センター/就職 NEWS を配信しているので、読むこと。1年生・2年生には、不定期に発信している学生支援センター/キャリア NEWS を読むこと

【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	7	50.0%
良かった	7	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

感想の自由記述

- ・働くというのは大変なんだなあと思った。
- ・現在の就活状況が、よくわかりました。わかりやすい説明でした。ただ、配布資料をいただけると、なおよかったです。
- ・新形式の就活型があることを知り、勉強になった。また、コロナに限ったことではなく、世の中がそういう流れにすでにあることも良い指摘をいただいたと思った。
- ・リモートを中心とする就職活動は、費用の面から考えて、コロナ禍が収束した後も継続される可能性があると思っていたが、それが確認でき、学生にもその環境を整えておく必要があると、自信を持って指導できると思われる。
- ・コロナ禍で就職活動がどのように変わってきたか、よくわかりました。普段、なかなか知ることでできない点について情報共有できてよかったと思います。

希望の研修内容についての自由記述

- ・ためになるような研修。
- ・広い意味での学生指導関する内容。
- ・今回のような就職活動にかんする話題は、毎年変化がありますので、ぜひお聞きしたいと思います。また、コロナ禍における学生のメンタルヘルスについても、ぜひご指導まわりたいところです。
- ・いくつも研修会がある必要はなく、アラカルト型、学部主催、研究科主催、大喬センター主催、毎年、どれかに絞って、やっても良いのではないかとあるいは、学部毎に、今年アラカルト型とか、後期は毎月毎月 FD 研修会のような形になり講師の先生方のお話も30分と短くせざるを得ない。しっかりじっくりやり、真の効果を考えたら良い気がする。
- ・異分野が交流する授業の先行事例があれば教えてほしい。
- ・有益な授業改善の方法、知らなかったツールの使い方、など。また学生の相談内容や相談室の利用状況など、統計的にはわかるが、専門家から見た傾向や教員が留意すべき点などについての内容。
- ・学生の就職活動や進路選択などについて、続編を期待しています。

(12) 山口大学 共育ワークショップ 2021 『今、改めて「学生参画」について考えてみよう!』開催報告

日 時 : 令和 3 年 3 月 26 日 (金) 13:30~16:00

方 法 : オンライン聴講 (Zoom)

参加者 : 54 名

主 催 : 山口大学

概 要 :

13:30~13:40 オープニング・趣旨説明

【基調講演】

13:40~14:20 『学生参画』に賭けた夢、これからの期待」

富山大学 教育・学生支援機構 教育推進センター 教授 橋本 勝

【学生からのメッセージ】

14:20~14:35 「コロナ禍でも頑張る学生 ~教学マネジメント室スタッフの取組~」

山口大学 理学部 3 年 山口 由貴

14:35~14:50 「山口大学 共同獣医学部における学生参画~国際認証の枠組~」

山口大学 共同獣医学部 6 年 仲村 岳真

14:50~15:05 「宇都宮大学における学生参画~『理想の授業』の取組~」

宇都宮大学 共同教育学部 2 年 大木 陽菜乃

(小休憩)

【パネルディスカッション】

15:10~15:55 「今、改めて『学生参画』について考えてみよう!」

(パネラー) 上記登壇者 4 名および、富山大学 都市デザイン学部 1 年 益田 耕佑

(ファシリテーター) 岡山大学 医学部 6 年 久保 卓也

15:55~16:00 クロージング・閉会挨拶

内 容 :

2021 年 3 月 26 日 (金) 午後、共育ワークショップ 2021「今、改めて『学生参画』について考えてみよう!」をオンライン開催し、学生スタッフによる司会進行で行われました。54 名の参加があり、全国から大学生、大学教職員のほか、高校教員など多様な方が参加されました。

山口大学では、教員・職員・学生が協働して教育学習を充実していくことを目標に、共育ワークショップを 2013 年度から実施しています。その成果の一つとして、2017 年 3 月には、全国学生祭典『学生 FD サミット 2017 春』を山

口大学主催で行いました。近年、我が国でも、国際的動向の影響を受けながら、教育の内部質保証の観点から、学生が教育システムの構成員として参画する動きが広がりつつあり、今回、改めて「学生参画」について考える機会を設けさせていただきました。

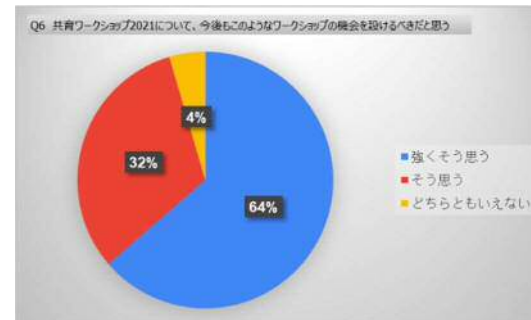
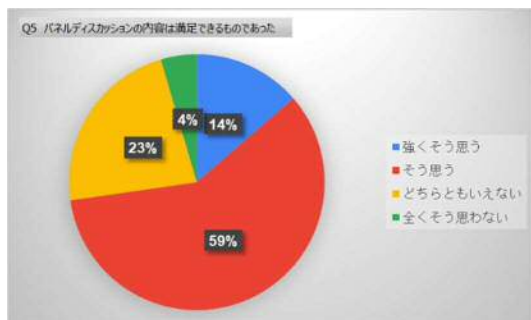
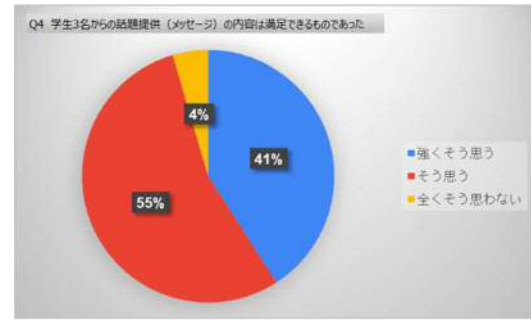
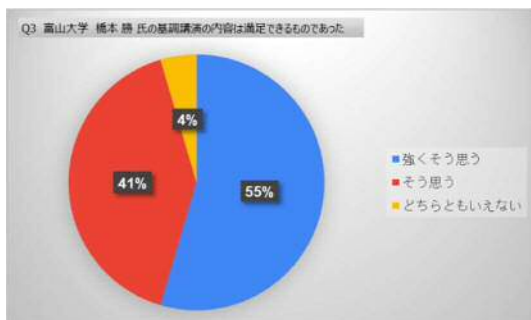
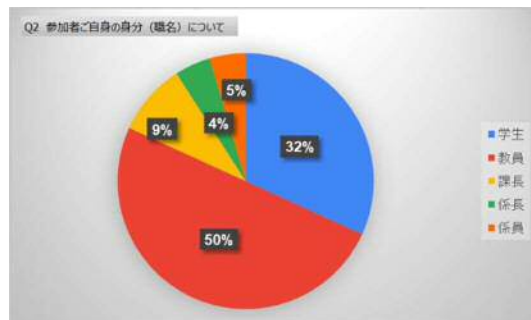
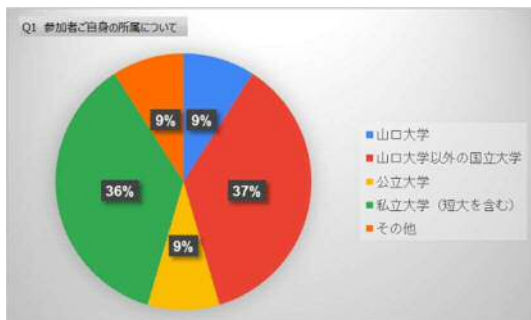
当日は、我が国の大学教育において「学生参画」を推進してきた第一人者である富山大学橋本 勝先生を講師にお招きし、富山大学 1 年生との対話型での基調講演のほか、本学の



教学マネジメント室・学生スタッフ、共同獣医学部の学生代表経験者、さらには、宇都宮大学の学生発案型授業プロジェクトのリーダー学生による話題提供、さらには、フロアとの意見交換を通して、現状と課題を見つめながら、今後の学生参画を展望しました。

参加者アンケート結果：

参加者アンケート（N=22）では、基調講演及び学生3名からの話題提供については、ともに、満足度（「強くそう思う」「そう思う」）が95%以上であったほか、今後の継続的に開催することを望む声も95%以上であった。自由記述では、「益田君の『学生にすり寄るのではなく、社会にすり寄るのでもなく、価値観をすり合わせていく』こととか、最後のセッションの『違和感を言葉にしていこう』ことなど、あらためて、大切さに気づかされた。橋本先生の『制度や組織ではなく、学生が自然に意見を言う機会があり、それが実現される環境や風潮』ができあがればそれでいいという言葉も印象に残った。」「学生さんの司会進行やパネルの進行など、学生が前面に出ていたところがよかったです。」などのコメントが寄せられ、「学生参画」の現在地を確認できる内容になったように感じられる。



3. 教育改善研修会

(1) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日 程 : 令和 2 年 10 月 21 日 (水) 15:00~15:30

場 所 : 教育学部 21 番教室・11 番教室 (遠隔)

講 師 : 霜川正幸 (教育学部教授)

参加者 : 81 人 (アンケート回収 48 人)

【研修内容】

教育学部の霜川正幸教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える」というタイトルにて講演があった。講演内容の概要は以下である。

8 年前の「高大接続改革」にて高校の授業は大きく変化しつつある。そうした高校卒業生が大学生となっている現在、学生のニーズは変化しているものと考えべきであり、高校の授業の変化を知ることは大学教育の改善につながるものと思われる。「高大接続改革」とは高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一つのパッケージとしてとらえる一体的な改革のことである。この一連のパッケージのなかで生徒や学生の「生きる力」、特に「学力 3 要素 (①知識・技能②思考力・判断力・表現力③主体性・協働して学ぶ態度)」を育む必要があるとされている。高校教育の主な役割は学力 3 要素を育成すること、大学入学者選抜はそれを評価すること、そして大学教育はそれらをさらに向上、発展させ社会に送り出すことである。高校教育における改革の柱は 3 つあり、学習指導要領改訂による教育課程の見直し、学習・指導方法の改善と教員の指導力向上、そして学力 3 要素に基づく多面的な評価推進である。県内の高校教員に対して変化に関する印象などのインタビューを行った。その結果、授業改善に取り組む教員が増えている、探求科を設置するなど学校全体で生徒の課題解決能力向上のための取り組みを行っている、高校教育の変化にとめない学校が活気づいているとのことであった。近年では、大学と連携して(大学での専門知識を用いて)授業を進めている高校も増えつつある。ある高校では中学教員や生徒に対して大学入試の変化状況説明を踏まえながら、学校の特徴紹介を行っているそうである。高校教育では普通科でも探求科でも地域課題解決に取り組んでおり、これを通して大学での学びの基盤づくりを行っている。こうした教育改革の流れに従い、グループワークやプレゼンなどはかなり導入されているが、生徒たちは抵抗感なくそれになじんでいるとのインタビュー結果



も得られた。ただ、「丸投げ」では成長は望めず、狙いを生徒に自覚させ、「仕込み」をきちんとしておく必要はある、とのことであった。授業改善をふまえての校内研修も高校において盛んに行われるようになってきているそうである。大学での講義に対して不真面目な学生がいることを話したところ、国立大学に進学するような生徒は道德心が高い傾向にあるからしっかりと指導すれば必ず伝わる、というアドバイスをもらうことができた。またグループ学習などの学びの動きにそうした学生を巻き込んでいくと実力を発揮するかもしれない、自身のロードマップを設定、自覚すれば、その学生はなすべきことがきちんと分かるのではないだろうか、という意見ももらうことができた。各校でのインタビューを通して、進学校ほど授業改善に熱心な教員が多いように感じた。そうした高校の基礎学力や内発的動機が高い生徒が山口大学に入学しているので、学生と一緒に授業をつくるという思いで大学の授業改善（授業づくり）を進めれば、学生のやる気は奮起し、豊かな自己実現につながるのではないかと、そしてそれは大学の教育や研究の発展につながるのではないだろうかと感じている。

【質疑応答・意見交換】

同一会場にて次に行事予定が入っていたことから、質問などは講師に直接メールにて連絡をとるという形に置き換えられた。

【アンケートによる満足度】

設問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数（人）	割合（％）
非常に良かった	29	60.4
良かった	16	33.3
どちらとも言えない	2	4.2
あまり良くなかった	0	—
良くなかった	0	—
無回答	1	2.1
合計	48	100.0

(2) 工学部・創成科学研究科（工学系）

日 程：令和2年11月11日(水) 14:10～14:40

場 所：Webex

講 師：和泉 研二（教育学部教職センター 教授）

参加者：74名（アンケート回収 27名）

【研修内容】

最初に、工学部 三上真人教授から教育改善 FD 研修会の主旨説明および講師の紹介があった。その後、教育学部教職センター副センター長 和泉研二教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・授業改善の実際～」について説明があった。

具体的な内容としては、まず、高大接続改革における大学の問題について説明があった。高大接続改革で高等学校の教育や授業が大きく変化しつつあり、学生たちの学びのスタイルやニーズが変わってきているため、大学側は高等学校がどのような教育改革を行っているのか理解することは、学生理解や人材育成の面から重要であること、また、入学者の期待や学生の変化にマッチするような教育改善が必要であることが説明された。

つづいて、高大接続改革の議論、検討の流れが確認され、現在、学校教育は今後の予見困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育むことが求められており、高校教育は「学力の3要素」を育成する場、大学入学者選抜は高校まで身に付けた「学力の3要素」を多面的に評価する場、大学教育は高校までに培った「学力の3要素」をさらに向上・発展させ、社会に送り出す場という人材育成の流れを作ることが重要であると説明された。

その後、大学の教育改善は高校教育の現状を知ることが重要という視点から、教職センターの霜川教授が中心に山口県の進学校に対して聞き取り調査を実施した結果について具体的な報告があった。「学力の3要素」の育成のために、高等学校は授業改善と教員の指導力向上が進められていること、授業は主体的・能動的な学びが求められティーチングからラーニングに変化してきていること、主体的学びを実現するために選択科目が増え、少人数指導や習熟度別指導が導入されていること、授業をとおして大学と連携していることなど、探求的学びの具体的な事例が宇部高校、萩高校を中心に紹介された。

聞き取り調査の結果、現在の高校生はアクティブラーニングには慣れていること、教員の側が生徒に活動のねらい、活動のプロセス、到達点を伝えて自覚させることで学習が深まっていくこと、探求的学びの教員研修が始まっているが学校全体や教員個人の意識や取り組みには大きな差があること、ただしこの度聞き取り調査を行った山口県の進学校においては意識が高まっていることの説明があった。

最後に、高校において主体的・能動的な活動をしてきたにもかかわらず、大学に入学して授業に対する意識や意欲が乏しく見える学生が少なからずいるため、今後、大学教育において高校での学びをさらに発展させることが大学の使命であることが説明された。

説明終了後、「主体的・能動的学びの素地をもって入学する学生をどのように受けるのか、受け入れた後の教育体制をどのように整えるのか、具体的な案があればお聞きしたい」という質

問があった。これに対し、今回の教育改革をふまえて、大学での学びのスタートを全学共通でどのようにとらえていくのかという点をもう一度、大学全体で議論していく必要があることが述べられた。

【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

	人数	割合 (%)
非常に良かった	6	22.2%
良かった	12	44.4%
どちらとも言えない	5	18.5%
あまり良くなかった	3	11.1%
良くなかった	1	3.7%
無回答	0	0.0%
合計	27	100.0%

(3) 人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）

開催日時： 令和2年11月18日（水） 14：30～15：00

開催場所： Webex

講師： 森重 祐二（教職センター客員教授）

参加者： 43名（教員40名，職員3名 アンケート回収 11名）

【研修内容】

最初に，人文学部 上田由紀子教授から教育改善 FD 研修会の主旨説明，および講師の紹介があった。その後，教職センターの森重祐二客員教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・授業改善の実際～」について説明があった。

まず，研修内容は①高大接続改革について，②実際に高校でどのような取組みがおこなわれているかについて，③変わりつつある現状について高校教員がどのように思っているのかについての情報提供であることが述べられた。

具体的内容としては，①高大接続改革については，高大接続改革の議論，検討の流れが確認され，現在，学校教育は今後の予見困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育むことが求められており，高校教育は「学力の3要素」を育成する場，大学入学者選抜は高校まで身に付けた「学力の3要素」を多面的に評価する場，大学教育は高校までに培った「学力の3要素」をさらに向上・発展させ，社会に送り出す場という人材育成の流れを作ることが重要であると説明された。

つづいて，②実際に高校でどのような取組がおこなわれているかについては，大学の教育改善は高校教育の現状を知ることが重要という視点から山口県の進学校に対して聞き取り調査を行った結果をもとに具体的な報告があった。高校の授業はティーチングからラーニングに変化していること，主体的学びを実現するために選択科目が増え少人数指導や習熟度別指導が導入されていること，授業をとおして大学と連携していることなど，探求的学びの具体的な事例が宇部高校，萩高校を中心に紹介された。現在，県内全ての高校・高校教諭が，宇部や萩高校のように積極的な教育改革を行っているかは確認できないが，山口大学への受験者が多い高校では総じて積極的な傾向にあることが付け加えられた。

次に，③変わりつつある現状について高校教員がどのように思っているのかについては，高校生は小中学校の時に既にグループ学習やプレゼンテーションが多く取り入れられているためアクティブラーニングには慣れていること，教員の側が生徒に活動のねらい，活動のプロセス，到達点を伝えて自覚させることで学習が深まっていることなどの高校教諭の声が紹介された。

最後に，高校において主体的・能動的な活動を経験して入学する学生がほとんどになっていく中で，大学教育においては高校での学びをさらに発展させ，社会で主体的に活動でき柔軟に物事を考えられるような人材を育成することが重要になると説明された。

【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

	人数	割合 (%)
非常に良かった	4	36.4%
良かった	5	45.4%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	2	18.2%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

(4) 農学部・創成科学研究科（農学系）

日 程 : 令和 2 年 11 月 25 日 (水) 13 : 30 ~ 14 : 00

場 所 : 農学部大会議室

講 師 : 美作健悟 (教育学部准教授)

参加者 : 25 人 (アンケート回収 23 人)

【研修内容】

はじめに宮田学部長より開会宣言があった。その後、司会の荒木教授より本 FD 研修会の趣旨説明および本日講師の美作准教授の紹介があり、講演が開始した。

教育学部の美作准教授による講演タイトルは「新時代の大学における授業のあり方について考える」であった。講演内容の概要は以下である。

8 年前の「高大接続改革」より高校の授業は大きく変化しつつある。そうした高校卒業生が大学生となっている現在、学生のニーズは変化しているものと考えらるべきであり、高校の授業の変化を知ることは大学教育の改善につながるものと思われる。「高大接続改革」とは高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一つのパッケージとしてとらえる一体的な改革のことである。これからの生徒や学生は予見できない社会の中で自らの道を切り拓き、新しい社会を作っていくことになることから、「学力 3 要素 (①知識・技能②思考力・判断力・表現力③主体性・協働して学ぶ態度)」が特に求められているとされている。つまり「高大接続改革」は「学力 3 要素」の育成で串刺しながら、高校教育では学力 3 要素を育成し、大学入学者選抜ではそれを多面的に評価し、そして大学教育にてそれらをさらに向上、発展させ社会に送り出すという、人材育成の流れを作ることと思われる。これからの大学教育の発展を目的として、現在の県内の高校教育の状況を知るとともに、高校教員に対して変化に関する印象などのインタビューを行った。

山口大学に多くの生徒送り込む高校は教育改革や授業改善に熱心に取り組んでおり、これらに意欲的な教員が多い傾向にあるように思われた。現在高校では、新学習指導要領の年次進行に伴いながら、教育課程の見直しが進められている。これにより「公共」、「プログラミング」、「〇〇総合」、「探求学習科目」が入ってきている。教員による指導方法も「ティーチング」から「ラーニング」へと大きく変化しているようである。多面的な評価の推



進として、様々な評価テストの導入などがされており、評価の観点も「学力3要素」に準じた3観点へと変化してきている。大学と連携して（大学での専門知識を用いて）授業を進めている高校も増えつつある。ある高校では中学教員や生徒に対して大学入試の変化状況説明を踏まえながら、学校の特徴紹介を行っているそうである。ある学校では普通科でも総合的な探求の時間を設け、地域課題解決に向けた実践的な学びが行われている。インタビューでは、様々な教育手法の導入により生徒同士が教え合うことで学びが進化している、という声が聞けた。以前の高校では少なかった校内研修も積極的に行われているようである。学校間では取り組みや成果に差異はあるだろうが、少なくとも聞き取りを行った進学校では、「組織的改編、皆で授業改善」という声が多く得られた。討論をはじめとした新たな教育場面での生徒の非常に表情が良いように思われる。「学習における本質的な部分で戦わせる群れ」、「ガチでぶつかる場面」を教育の現場にて創造する必要があるように思われる。インタビューでは、教え込むだけではなく、「生徒を動かす」、「頭を使わず」、「考えざるを得ない学習を入れる」ことも必要であるとのことであった。この概念は大学教育に取り入れても良いだろう。

大学での講義に対して不真面目な学生がいることを話したところ、山口大学生は与えられたことはきちんとこなすがそれ以上のことを表現するのに億劫がる学生が多いかもしれない、しかし国立大学に進学するような生徒は道徳心が高い傾向にあるからしっかりと指導すれば必ず伝わる、というアドバイスをもらうことができた。またグループ学習などの学びの動きにそうした学生を巻き込んでいくと実力を発揮するかもしれない、自身のロードマップを設定、自覚すれば、その学生はなすべきことがきちんと分かるのではないだろうか、という意見ももらうことができた。

学生と一緒に授業をつくるという思いで大学の授業改善（授業づくり）を進めれば、学生のやる気は奮起し、豊かな自己実現につながるのではないかと、そしてそれは大学の教育や研究の発展につながるのではないだろうかと感じている。

【質疑応答・意見交換】

- Q1 山口県のすべてがコミュニティースクールとなっている、とはどういう意味か。
- A1 山口県内のすべての公立小中高校が、地域住民を含めた学校運営協議会を持つなど法にて規定された要件を満たした学校となっている、という意味である。
- Q2 学校間の温度差、普通科卒業や探求科卒業の違いなど、学生間の温度差は大きいよう思われる。大学として今後どのように対応していくべきかと考えておられるか。
- A2 新学習指導要領の実施に伴い、能動的な学びを積んできた学生が増えてくると考えている。基本的にはこうした学生に焦点をあてて、これまでの詰め込み型学習をしてきた学生には能動的学習の必要性を伝えながら、教育を進めていくことが望ましいと考える。
- Q3 「深い学び」とはどのような風にとらえれば良いだろうか。
- A3 断片的な知識の貯蓄ではなく、様々な知識が連結、連動した構成的な知識となっていること、技能は単にできるではなく、知識と連動したうえでできること、他の場面で得た知識や技能が他の場面で活用できること、知識の価値をとらえ活用していこうとすることなどが研究結果として示されている。

Q4 高校の教科書の内容が非常に濃くなっているように感じている。一方で自分たちが高校で学んだ知識に対する正答率が下がってきている。このことは高校生が教科書を未消化のまま大学に進学しているのではないだろうかという危惧につながっている。知識の享受に関しては現在の高校教育はどのようなになっているのだろうか。

A4 教科書には QR コードを添付するなど、自身が興味を持ったものに対しては自宅にて自ら学ぶようなシステムが取り入れられている。また文字よりも写真や資料といった情報が増え、自ら取り組みやすい環境となっている。

【アンケートによる満足度】

設問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数（人）	割合（%）
非常に良かった	6	26.1
良かった	11	47.8
どちらとも言えない	6	26.1
あまり良くなかった	0	—
良くなかった	0	—
無回答	0	—
合計	23	100.0

(5) 医学部保健学科・医学系研究科

日程：令和2年12月2日（水）[小串地区] 13:00～13:30

場所：医学部本館6階第1会議室

講師：生嶋 亜樹子（教育学部附属教育実践総合センター准教授）

参加者：27名（アンケート回収 26名）

【★説明内容】

今年度の教育改善FD研修会のテーマは、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」である。その趣旨・目的として、2014年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあり、特に、2020年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であることを挙げている。



そこで、教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えている。

今回は、生嶋 亜樹子 教育学部附属教育実践総合センター准教授が講師を務め、高大接続改革の必要性や高大接続で育む「学力の3要素」を解説しながら、変わりつつある高校教育や高校授業の実際について、山口県内の高校の事例を現場教員の声を交えながら紹介した。特に、萩高校の普通科・探究科の教育・学習内容を取り上げ、大学等との連携を強化しながら、探究学習が活発に行われていることが報告された。その中で、教師の教え方の変容や生徒の自主性の向上などが図られつつあり、大学の授業を通して同様に学生に考えさせる豊かな授業が求められる。

後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	9	34.6%
良かった	15	57.7%
どちらとも言えない	2	7.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

Q1 高校教育でのアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の割合はどの程度なのか。

A1 総合的な探究の時間が導入されたほか、多くの教科においてアクティブ・ラーニングが浸透しつつある。

Q2 高校教育における生徒のアクティブ・ラーニングの満足度はどのような状況なのか

A2 具体的な情報を持ち合わせていないが、一定の満足度が得られていると考えたい。

Q3 保健学科の学生を見ていると、入学当初の1年生の時期には発言力が素晴らしいが、2年生以降にやや内向きになる傾向があるように感じている。この状況について、どのように考えたらよいか。

A3 教育学部では、出来る限り、学生に授業に深く関与するような授業を工夫しており、学年が上がるに従い、授業中の学生参画について更に意識した授業設計が必要なように感じる。



(6) 技術経営研究科

日程：令和2年12月8日（火）[常盤地区] 14:30～15:00

場所：大学院技術経営研究科棟 1階 会議室

（会議室・オンライン聴講併用によるハイフレックス型開催）

講師：藤上 真弓（教育学部 専任講師）

参加者：10名（アンケート回収 6名）

【★説明内容】

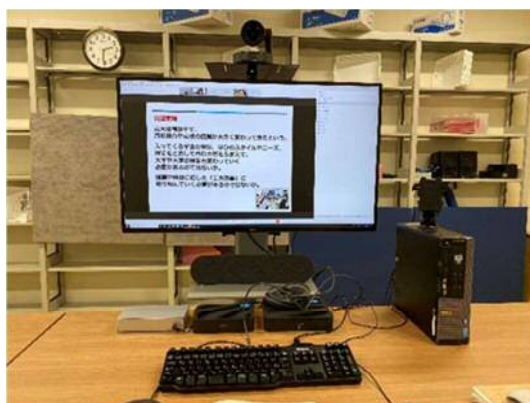
今年度の教育改善FD研修会のテーマは、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」である。その趣旨・目的として、2014年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあり、特に、2020年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であることを挙げている。



教員会議室の遠隔会議システム

そこで、教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えている。

今回は、藤上 真弓 教育学部専任講師がFD講師を務め、会議室・オンライン聴講併用によるハイフレックス型開催で行った。高大接続改革の必要性や高大接続で育む「学力の3要素」を解説しながら、変わりつつある高校教育や高校授業の実際について、山口県内の高校の事例を現場教員の声を変えながら紹介した。特に、萩高校の普通科・探究科の教育・学習内容をとり上げ、大学等との連携を強化しながら、探究学習が活発に行われていることが報告された。その中で、教師の教え方の変容や生徒の自主性の向上などが図られつつあり、大学の授業を通して同様に学生に考えさせる豊かな授業が求められる。



Webex オンライン（パソコン端末）
（オンライン配信スタジオにて）

後半の質疑応答では、以下のよう
なやりとりがあった。

Q1 大学の初年次教育の現状はど
うなっているのか。また、学生の反
応はどうか。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	16.7%
良かった	3	50.0%
どちらとも言えない	2	33.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	6	100.0%

A1 旧態依然の科目がまだあることは確かであるが、例えば、教育学部ではスタート科目
を改善して、同学部教員が一体となって授業に関わり、学生の主体性を引き出す授業運営
に取り組んでいる。

Q2 高校教育の全般的な状況はどうなっているのか。

A2 今回紹介したい事例の多くが山口県内の先進校の事例であり、高校教育全般において
は、まだまだ底上げが必要な状況にあると考えている。

(7) 理学部・創成科学研究科（理学系）

日程：令和2年12月9日(水) 15:00～15:30

場所：理学部 22 番教室

講師：松岡敬興（山口大学教職センター）

参加者： 55 名（アンケート回収 46 名）

【研修内容】

最初、理学部西井淳教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター松岡敬興准教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」について説明があった。まず高大接続改革について、高校教育、大学入試選抜、大学教育をひとつながりのものとしてとらえる。高大接続改革で、高校教育や高校の授業が大きく変わってきている。



このため、大学の授業内容も「工夫と改善」に取り組み、変えて行く必要がある主旨であった。まず、高大接続改革の説明があり、高大接続改革の必要性は、様々な社会の急速かつ大きな変化に応じて、高校教育、大学教育を通じて「生きる力」を育む事であり、特に「確かな学力」では学力の3要素をバランス良く育む事が必要であることが説明された。その後山口県内の高校教育・授業についての具体的に説明があった。さらに大学入試改革も行われることから一部の高校では普通の中に総合的な探究の時間を設け、理数科を探究科に改組し探究活動を充実している所もある。さらに大学・地域との連携し活動を高めていることについての具体的な説明があった。高校教育改革の結果、生徒の自主性が育ったことが表れてきている事、

高大接続改革により現職高校教諭も授業の取組の意識に変化が生じ、高校の授業の変化が出てきている。さらに大学の授業を通して人を育て、人を育成する事になる。また山口大学に進学する生徒は基礎学力、読解力、地道に学習しようとする姿勢は身につけているとの高校から評価されている。学生は学びの要求、希望、願いをを持って入学して来ているので、先生方は大学での授業について高大接続改革に沿った一層の授業作り及び授業改善に取り組むことで、大学在学中に学生がもっと成長すると考えられる。



【質疑応答・意見交換】

Q1： これまで約 10 年間の教育改革はどう評価されているのか？少子化のため学力が伴わない学生が入学することについての高大接続改革でもあった気がする。

A1： 教育改革に関わる評価については、再度、ご指摘の内容を確認のうえ、ご意見を拝聴させて頂きたい。

高大接続改革について、小学校、中学校では協働しながら授業が行われてるが、これまで高校ではこの部分はまだまだ十分ではなかった。一方大学では、既にこれまでこうした授業改善が進められてきた。今回の改革により高校においても協働で学ぶ視点が指摘されたことで、改善が進んでいる。

Q2: 高校でのアクティブラーニングの取り組みについて、理科とか数学の科目の中でするのか？それともアクティブラーニングのための授業するのか？

A2： 授業のプロセスの一部で行うものでもよい。一コマを通してアクティブラーニングをしているわけではない。アクティブラーニングは生徒一人一人が学びを深める為のツールである。そこで授業の進め方が重要になる。学習の流れとして、1. まずは自分で考える時間を保障する 2. 次に協働によるグループ活動を通して話し合う 3. 話し合いで出た意見や考えを踏まえながら、自分の考えを再構築することによって学習が深まる。

Q3： グループ活動をしているのですが、高校ではこんなにアクティブラーニングをしているのに大学生が話し合い（ディスカッション）に参加してくれない。大学生が参加しないのは理由があるのか？大学の授業の工夫が必要なのか。アクティブラーニングを進める方法について何か良い方法があるのか？

A3： 私見ではあるが、授業の進め方に問題があると考え。指導者は、参加しようとする学生を見逃してグループ活動を始めると、育みたい資質・能力が身につかないし、参加もしない。例えば、学生にきちんと考える時間を設けなくて、すぐにグループ活動をさせると、学生は話し合いに参加してこない。グループ活動が機能するかどうかは、学生に対してガイダンスを通し授業の方針をきちんと説明し、学生が活動の目的を理解したうえで進められるのか否かに掛かっている。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	6.5%
良かった	22	47.8%
どちらとも言えない	12	26.1%
あまり良くなかった	6	13.0%
良くなかった	3	6.5%
無回答	0	0.0%
合計	46	100.0%

(8) 国際総合科学部

日 程 : 令和 2 年 12 月 16 日 (水) 13 : 30 ~ 14 : 00

場 所 : 国際総合科学部 2F 大会議室

講 師 : 熊井将太 (教育学部准教授)

参加者 : 26 人 (アンケート回収 15 人)

【研修内容】

司会の堀家教授より本 FD 研修会の趣旨説明および本日講師の熊井准教授の紹介があり、講演が開始した。教育学部の熊井准教授による講演タイトルは「新時代の大学における授業のあり方について考える」であった。講演内容の概要は以下である。

8 年前の「高大接続改革」にて高校の授業は大きく変化しつつある。そうした高校卒業生が大学生となっている現在、学生のニーズは変化しているものと考えべきであり、高校の授業の変化を知ることが大学教育の改善につながるものと思われる。「高大接続改革」とは高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一つのパッケージとしてとらえる一体的な改革のことである。これからの社会は予見できない状況になっていく。このことから高校や大学では生徒や学生の「生きる力」の育成が求められている。「学力 3 要素 (①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③主体性・協働して学ぶ態度)」が特に求められているとされている。つまり「高大接続改革」は「学力 3 要素」の育成で串刺しながら、高校教育では学力 3 要素を育成し、大学入学者選抜ではそれを多面的に評価し、そして大学教育にてそれらをさらに向上、発展させ社会に送り出すという、人材育成の流れを作ることと思われる。これからの大学教育の発展を目的として、現在の県内の高校教育の状況を知るとともに、高校教員に対して変化に関する印象などのインタビューを教育学部の霜川教授が行った。その成果を報告する。

現在高校では、今後の学習指導要領の改訂に伴った先生が話すだけの学習ではなく探求科の設置など課題解決能力向上のための授業を行ったり、そのための教員の指導力を向上させる取り組みを行ったりしている。山口大学に多くの生徒送り込む高校は教育改革や授業改善に熱心に取り組んでおり、これらに意欲的な教員が多い傾向にあるように思われた。ある高校では入学者説明会にて生徒やその保護者に対して単なる授業ではなく課題解決を



意識した授業があることを伝えている。また大学入試の変化状況の説明も行っている。学力の育成に関して大学との接続を意識した高校もいくつかある。小中学校でもアクティブラーニングをはじめとしたアクティブ型の授業がかなりなされており、高校もその流れを受けている。教員のインタビューでは、以前は一斉学習を好む生徒が多かったが、現在はペア・グループ学習やプレゼンテーションを好む生徒が増えている、という意見があった。またそうした授業形式に対する抵抗感は減ってきているように感じるとのことであった。小中学校で盛んなお互いの授業を参観する授業研修も高校で行われつつあり、教員の指導力の向上が図られている。こうした参観の場に地域住民が参加した授業改善を考える場を設けたりもされている。

大学で講義を行っている、最近の学生はプレゼンが上手いと感じることが多い。これは高校などですでにこうした形式の授業に慣れているからであろう。ペアワークなどアクティブ型の授業ではただ「話しなさい」では授業は進まず、問いかけや役割分担など、先生側のデザインが非常に重要である、というコメントがあった。授業なので知識を教授しなければならないが、それに加えて考えざるを得ないところ、協働しなければいけないところといったものを、どのように組み込んでいくかがポイントである、とも言われていた。

大学での講義に対して意欲的でない学生がいることを話したところ、国立大学に進学するような生徒はまじめな者が多いとのことであった。ただ与えられないとできない、自分から動くことが苦手、という者が多いかもしれない、とも話された。上手く講義に巻き込んでいく必要があるだろう、というアドバイスをもらった。

【質疑応答・意見交換】

Q1 教育に関する大学と高校との連携時の「さじ加減」が非常に難しいと感じたことあった。このあたりのノウハウや関連情報はないだろうか。

A1 現時点で明確な回答はできないが、教職センターにて事例集をつくるなどの方法を検討してみたいと思う。

意見 a 高校との連携は大学の広報的立場からしても非常に重要である。とは言え、人的資源も限られていることから、組織的、戦略的に対応していくことが重要だと考える。大学は高等なことをしていると魅せたい部分もあるが、それがすでに高校で行われていることもある。このようなミスマッチは生じないよう気をつけるべきだろう。

意見 b 理系に関しては運営や指導は割とやりやすく、それは高校教員側の窓口が博士を持っているからと思われる。一方で人文社会系の高校教員は博士をもっておられることがなく、研究の仕方を指導することが非常に困難である。

意見 c 連携時に物資不足の問題が生じた。しかし限られた時間にて成果を出す必要があり、その時間調整に非常に苦労した。物資やスケジュールに関して、事前にしっかりと調整しておく必要があるだろう。

【アンケートによる満足度】

設問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数（人）	割合（%）
非常に良かった	4	26.7
良かった	8	53.3
どちらとも言えない	3	20.0
あまり良くなかった	0	—
良くなかった	0	—
無回答	0	—
合計	15	100.0

(9) 共同獣医学部・連合獣医学研究科

日程：令和3年1月13日(水) 14:30～15:00

場所：獣医学研究科棟4F 大会議室

講師：静屋 智（山口大学教職センター）

参加者：37名（アンケート回収 21名）

【研修内容】

最初、共同獣医学部島田緑教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター静屋智教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」についての講演があった。高大接続改革は高校教育、大学入試選抜、大学教育をひとつながりのものとして捉えるということ。



こと。高大接続改革で、高校教育や高校の授業が大きく変わってきている。高校（特に山口大学に進学する高校を中心として）の授業がどの様に変化しているかを本研修で情報共有し、高校教育改革に沿って大学の授業の改善に役立てて欲しいとの主旨であった。まず、高大接続改革の流れが説明され、高大接続改革の必要性は、様々な社会の急速かつ大きな変化に応じて、高校教育、大学教育を通じて「生きる力」を育む事が確認され、特に「確かな学力」では学力の3要素をバランス良く育む事が必要であることが説明された。その後山口県内の高校教育・授業についての具体的に説明があった。さらに大学入試改革も行われることから一部の高校では普通の中に総合的な探究の時間を設け、理数科を探究科に改組し探究活動を充実している所もある。さらに大学・地域との連携し活動を高めていることについての具体的な説明があった。

高校教育改革の結果、生徒の自主性が育ったことが表れてきている事、改革により現職高校教諭も授業の取組の意識に変化が生じ、高校の授業の変化が出てきている。また高校から山口大学に進学する生徒は基礎学力、読解力、地道に学習しようとする姿勢は身につけているとの評価されている。さらに大学の授業を通して人を育成する事になる。学生は学びの要求、希望、願いを持って入学して来



ているので、大学の授業について高大接続改革に沿った一層の授業作り及び授業改善に取り組むことで、大学在学中に学生がもっと成長すると考えられる。

【質疑応答・意見交換】

Q1：山口大学に入学する学生は与えられた課題はこなすが、自分から積極的に学習し考えようとしな。大学としても学習カリキュラムを充実して学習を高めようとしてしまう。この点を改善するにはどうしたらよいか。

A1：与えられた課題だけを行う傾向は小学校、中学校、高校に進学するほどその傾向がつよい。従って、はやい小学校の時期から、求められている学習が何かを考える力をつけることが大事だと思う。教える方が準備をしすぎる事は良くなく、思考ができる方向に持って行く事が必要。学習カリキュラムについて、この学習目的が何を考えさせた後に、学生に学習させるようにすることが必要だと思う。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	9.5%
良かった	10	47.6%
どちらとも言えない	6	28.6%
あまり良くなかった	2	9.5%
良くなかった	1	4.8%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%

(10) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日程：令和3年1月20日（水）13：30～14：00

場所：経済学部第一会議室から ZOOM 配信

講師：森重 祐二（山口大学教職センター・アドバイザー）

ZOOM での参加者：61名（オンライン・アンケート回答者10名）

【研修内容】

冒頭、経済学部の FD コーディネータである有村貞則教授から、今回の教育改善 FD 研修会に関する趣旨説明があった。その後、山口大学教職センター・アドバイザーの森重祐二先生から、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・教育改善の実際～（情報提供）」と題して、変化する高校教育現場の動向について、山口県内の高校に焦点を定め、特に萩高校を中心とした実例、実際に聞き取りを行った高校教員から声などの説明があった。その説明の概要は以下のとおりである。

- ・高大接続改革が進んできており、さらに山口県では探求科が設置される動きなどもあり、高校教育においても、一方通行型の授業から生徒が主体的に参加する授業が多くなってきている。

- ・県内の各高校では、そのような授業展開に積極的に取り組んできているところであるが、特に探求科を中心として、生徒が主体となって取り組むテーマ学習は高く評価、表彰されるなどもあり、課題解決型授業の成果が徐々に出てきている。さらに、中学生に対する高校説明の段階で、中学生、保護者に対して変化する大学入試を紹介し、高校での主体的な学習、大学進学へのイメージを与えるなど、生徒・保護者への学習における意識改革にも努めている。

- ・授業だけではなく学力の3要素（知識技能、思考力・判断力・表現力、主体的に多様な人と協働して学ぶ）を中心とした人材育成が、今後さらに求められることは間違いない。このことを見据えた大学教育が求められている。

【質疑応答・意見交換】

Q1：高校での授業改革が進む中、（質問者としては）大学の講義においてアクティブラーニングがしっかりできていないと感じる場面がある。大学教育において、どのような点に注意を払い、大学教育をさらに改革してゆくべきか。

A1：大学講義においてはティーチングよりも、ラーニングを重視した方がよいと考える。小中高とは異なり大学では指導要領がないため、各教員がもつ力、知識を様々な講義手法を介して、講義に織り込むことで、学生も主体的に学ぶようになってゆくものとする。

Q2：（質問者が目にする限り）最近の高校生が執筆する論文などには、優れているものが多

くある。(質問者は)論文指導が高等教育での主たる学習と考える。その論文指導のあり方について、もう少し詳しく話を聞かせていただきたい。また例えば商品開発といった取り組みのように、高校での取り組みで、あまり外部に知られていない取り組みがあれば、それもあわせて教えていただきたい。

A2：特に商業系高校を中心に実業系の高校では、古くから地域連携の枠組み等においてテーマを設定し、論文作成と発表、その他、商品開発を行っていた経緯がある。最近では、普通科においても、ある課題に関するプレゼンテーションや論文的なものを執筆する機会が増えるなどして、学校がその指導に時間を割くようになってきている。このような中で、すべてとは言えないまでも、生徒の中にはかなりのレベルで、論文作成や発表に取り組める生徒がいると考える。

コメント1：経済学部は商業教員免許を出している数少ない学部の1つである。そして、経済学部には商業教育論という科目があるが、その科目の担当教員として、現役の県立高校教員に担当してもらおうと依頼をしたところ、現役の県立高校教員が大学で講義を担当することはできないという返事であった。高大連携の重要性が叫ばれているのだから、大学の教員が高校で指導する方向だけではなく、現役の高校の先生方も大学で講義を担当できる方向が求められるのではないのでしょうか。

リプライ1：個人的には先生のご意見に同感である。しかし実際、現役の県立高校教員が大学で講義を担当することは、現行の制度・規則面から難しい点があるかと思う。

【アンケート結果】

Q2

非常に良かった	3名
良かった	5名
どちらとも言えない	1名
良くなかった	1名

Q3

・FD は素晴らしかったですが、欧米流のロゴス中心主義的な教育を促進されているのは残念に思われます。日本人の非言語的なコミュニケーション能力はどうなるのでしょうか？「対話的深い学び」とおっしゃいますが、「対話」のどこが「深い」のでしょうか？対話ほうわべだと思います。技能のほうがよっぽど深いと思います。TIMMS の国際比較によれば、日本の数学・科学教育がずっと以前から問題解決型で、一方的ではないですが、「対話」ではなく、板書をコミュニケーションのモダリティとされてきました。そのような日本流教育より「対話的な学び」のどこがよいのでしょうか？欧米人っぽくなる必要はどこにありますか？

・今の高校生は、小中学校からの対話形式の授業のおかげで、話し合ったりグループワークをすることに慣れているということは初めて知った。大学のゼミを見ていると、確かにグループワークはできるのだが、他のグループの発表に対して意見や質問をするということは、必ずしも得意ではなさそうなので、意見を言うことなどは不得手なのかと思っていた。

・ 高大連携という以前に、最近の高校でどのような取り組みをしているかもっと大学教員が知っておくべきだと考えてきた。そうでないと最近の学生は何て知識がないんだろうということしか思わない教員、社会人が多い。高校で様々な取り組みを行なっているのだから、生徒が大学に入ってからその経験をもっと高められるようにしていくべきだろう。

とりわけ、最近の高校における論文作成は、結構レベルが高く、先行研究サーベイ(高校の場合は新書程度)、聞き取り調査やアンケート調査を行ない、独自の主張をしているという点において、平均的な卒論よりも優れているほどである(但し、高校教諭では参考文献一覧の表記の仕方をご存じないようなのが残念であるが…)。こういう高校の取り組みを紹介すれば、大学での基礎セミナーなどでも、上記のようなプロセスを踏まえた論文が書けるようになるであろう。高校を含めた教育機関で最も重要な学習は、論文作成におけるような課題設定力、情報収集力、原因分析力、総じて課題解決力を培うことであろう。

・現在の高校の教育について分かり、有意義だった。

・実際の高校での現場、教員の声分かる形で、高校の授業内容、取り組みが紹介されていたので参考になりました。

Q4

是非参加したい	5名
できるだけ参加したい	5名

Q5

・内職させないオンライン教育。サウンドエフェクトやビデオ背景などを利用した高度なオンライン教育技術。

・実際の高大連携の授業を担当した方の、手応えや感想などの生の声を、何人かの先生からお聞かせいただけたら嬉しい。またそこからどのように大学教育につなげていくべきか、など様々意見をおききしたい。

・教育・研究どちらも興味がありますが、専門的な知見に基づいたFDを受けたいです。

・研究に益するような研修。または教育において、益するような内容のもの。例えば、本日のFDに関連させると、高校時代の様々な取り組み、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションを経て(論文は大学からでも十分指導できるだろうが)、大学でどのように発展させるべきか、具体的に、通常気の付かないところも含めた好事例を紹介する等。

・社会人学生向けの授業の取り組みやリカレント教育

・障害学生 就職 遠隔講義

・高大接続、実際の高校での講義、受験指導の取り組み

(11) 医学部医学科・医学系研究科

日程：令和3年2月10日（水）[小串地区] 13:00～13:30

場所：医学部本館6階第1会議室

講師：霜川 正幸（教育学部附属教育実践総合センター教授）

参加者：38名（アンケート回収 24名）

【★説明内容】

今年度の教育改善FD研修会のテーマは、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」である。その趣旨・目的として、2014年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあり、特に、2020年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であることを挙げている。



そこで、教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えている。

今回は、霜川 正幸 教育学部附属教育実践総合センター教授が講師を務め、高大接続改革の必要性や高大接続で育む「学力の3要素」を解説しながら、変わりつつある高校教育や高校授業の実際について、山口県内の高校の事例を現場教員の声を交えながら紹介した。特に、萩高校の普通科・探究科の教育・学習内容を取り上げ、大学等との連携を強化しながら、探究学習が活発に行われていることが報告された。その中で、教師の教え方の変容や生徒の自主性の向上などが図られつつあり、大学の授業を通して同様に学生に考えさせる豊かな授業が求められる。

後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	20.8%
良かった	18	75.0%
どちらとも言えない	1	4.2%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

Q1 グループワークについては、誰とグループを組みかで違いが出てくるように感じているが、その点について、どのように考慮すべきか。

A1 グループを入れ替えたり、教員が適度に介入したりしながら、学生の主体性を育て上げていく姿勢が大事だと考えている。

Q2 高校での授業が変化しつつある状況は良く理解できたが、アクティブ・ラーニングを通した学修の評価法はどのようになっているのか。

A2 大学教育においても、学生の自己評価・他者評価、さらには、グループ評価と全体評価などを織り交ぜながら、学修を評価しようとしているが、具体的に数値化しようとするのが難しい面があると感じている。



第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別部会

(1) 運動健康科学部会（部会長：国際総合科学部 上田 真寿美）

○部会としてFDは開催しなかったが、コロナ状況下におけるオンライン授業の方法について、部会員間で情報交換をした。

○例年0~1回の部会開催だが、今年度は3回の開催と1回の持ち回り審議を実施した。部会では具体的対応の協議と共に、上述したように、コロナ状況下、安全にかつ教育効果のある授業についての意見・情報交換も行われ、大変勉強になった。

(2) 英語部会（部会長：経済学部 藤村 香予）

4月29日に非常勤講師も含めた英語科目担当教員を対象とした、オンライン授業のためのZoomの講習会をZoomで開催した。既にZoomを使って授業をされていた武本先生に講師をお願いした。できるだけ多くの教員が参加できるように日程調整を行ったが、常勤教員は約4分の3が出席したのに対し、非常勤講師の出席者は日本人教員6名のみであった。2名のネイティブ非常勤講師には、英語による説明が後日行われた。Zoomで初めて授業を行う教員が多かったため、基本的なZoomの使い方とブレイクアウトルームの使用法を参加者全員で共有した。オンライン授業についての資料や情報源についても周知した。急遽オンラインで授業を行わないといけない状況であったため、英語教員が本講習会でZoomの授業について確認し合い、意見交換ができる良い機会となった。参加教員はZoomの使用について不安があったため、オンライン授業への心構えができた有意義な時間となった。

(3) 数学部会（部会長：教育学部 飯寄 信保）

特になし。

(4) 物理学部会（部会長：創成科学研究科（工学） 仙田 康浩）

コロナ禍の中でのオンライン中心の講義が実施された。その中でも、物理学の講義（物理学I, II）の一部でZoomのウェブナー機能を用いたアクティブラーニングによる講義が実施された。従来の受け身の講義スタイルからオンライン環境を有効に利用する試みであり、今後はこの講義スタイルによる学習意欲や成績の変化などを評価していきたい。一方、コロナ禍での自宅学習が中心になる環境下で今年度は授業外学習時間の把握は困難であった。物理学の習得には自習が欠かせないので、今後も引き続き担当教員に学生の授業外学習時間の確保を促していく。

(5) 化学部会（部会長：創成科学研究科（農学） 横山 和平）

①R2年度は、急に遠隔講義に切り替わったため、操作法などについては、十分になれる前に遠隔

講義を実施せざるを得なかった。毎回の授業や、レポート等に基づき、各教員レベルで教育効果を振り返り、逐次、改善されてきたと期待できる。

②化学実験においては、実験室で作業する回数が半減したが、化学の多様な側面に触れてもらうことを意図して、体系化を多少犠牲にしても、できるだけ多くの実験（有機化学、分析化学、物理化学、総合）を履修できるように計画した。

③R3年度からの Chemodraw のライセンス購入に関して、理系学部から共通教育化学部会に、参加・費用負担の打診があり、各世話人を通じて、共通教育科学担当の常勤教員の意見を聞いた。その結果、担当科目間（化学Ⅰか化学Ⅱか）で若干の温度差はあるものの、授業での利用機会がひらけることを期待する声の一部にあったために、化学部会としてもライセンス購入について参画することとし、その旨、この事案を提起された教員に報告した。

④技術補佐職員への対応について、部会長、実験マネージャー、関連教員、および共通教育係で考え方を共有した。

（6）地球科学部会（部会長：創成科学研究科（理学） 坂口 有人）

特になし

（7）日本語部会（部会長：国際総合科学部 山本 冴里）

ともに仕事をする日本語部会メンバーといえども、互いの教育研究を熟知しているとは言えない。そのため、年度後半より、全2回の「研究紹介」を行った。これは、各回1人の教員が、一コマ分弱の時間を用いて、自身の研究について部会メンバーに紹介するという活動である。令和2年度は、11月に宮永愛子教員（大学教育機構）が、2月に仁平千香子教員（国際総合科学部）がこれを担当した。この活動については、今後も継続する予定である。

（8）日本国憲法部会（部会長：経済学部 服部 麻理子）

制度化したFD活動は行っていませんが、コロナ禍における遠隔講義の効果的な実施方法や定期試験の内容などについて、部会所属教員間で適宜相談し、情報の共有に努めました。

第2部 学部・研究科のFD活動

第3章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) ピアレビュー実施形態の変遷

平成24年度以来、人文学部では、FD活動の一環として、ピアレビューの実施形態のあり方を試行錯誤してきた。平成24年度～27年度は、平成28年度の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資すべく、分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として通常の授業を互いに広く参観しあうという形で実施された。しかし、当初予定されていた新コース体制が教職課程との連携に比重を置いたものへと練り直された結果、既存の教育組織に大幅な入れ替えが生じる必要がなくなった。この結果、平成27年度には教員のピアレビューに関する意欲に減退傾向がみられるようになった。平成28年度に新コースカリキュラムが実際に始動したことともあわせ、ピアレビューを実施形態や企画趣旨のレベルから見直す必要が生じた。平成28年度は、新カリキュラムの始動にあわせて改革された基礎セミナーを幅広く公開することにした。これは初年次教育のあり方について議論を深めるとともに、自身が担当する際に授業改善のヒントを得ることを目的としたものであった。しかしながら、ピアレビューに対する意欲の減退を改善するには至らなかった。意欲の減退を招いている一因として、近年の教員の事務作業量の増加や研究・教育の時間の確保の困難さがあることがあげられ、より簡素で効率的なピアレビューのあり方が求められるとの見解で一致した。そこで、平成30年度からは以下の実施方法を取っている。

<平成30年度以降の実施方法>

- ・人文学部の教員の中から5名を選出し、その5名が任意の授業を参観する。「ピアレビュー参加シート」を記入し、提出する。
- ・参観者は、事前にその旨を授業担当の教員に連絡し、同意を得ておく。
- ・授業を公開する教員は、普段とかわらず授業を行う。ただし、参観者を考慮して講義資料などがある場合は多めに印刷しておく。
- ・参観者は授業後「ピアレビュー参加シート」を書き、提出する。
- ・提出してもらった「ピアレビュー参加シート」は、授業担当者にも共有し、授業改善の参考資料とてもらう。

(2) ピアレビュー実施状況

令和2年度も平成30年度からの方式を踏襲する形でピアレビューを実施した。コロナの影響により、オンラインZoom授業の参観が初めて報告された。参加した教員からは、分野を超えた授業を参観する機会が与えられ、参考となる教授上の工夫や学生への対応・配慮など得るものが多かったとの感想が寄せられた。例えば、「学生の立場に立ち、学生自身の考えを学生自身の力で言葉にできるように学生を導いていく授業に、自らの授業をふりかえる良い機会となった」との報告が実際にあった。ピアレビューは、授業提供者が同僚から評価を受けるというよりは、参観者が授業提供者から様々な気づきをもらい、自らの授業や学生との向き合い方を考える良い機会になっていると言える。

ピアレビューが導入された当初、一部教員間にあったある種のネガティブなイメージは、参観する側、される側双方にとって負担の少ない形で継続的に実施することにより、徐々に払拭されてきているように思われる。

【図1】令和元年度ピアレビュー参加シート

ピアレビュー参加シート

提出先：人文学部FD部会

提出者氏名 []

見学した授業科目名 []

授業見学の日時 []

授業担当者 []

見学授業に対する感想・意見

※授業見学後、本シートをご提出ください。FD部会・ピアレビュー担当者（XX）のメールボックスにいらていただくか、メール（XXXX@yamaguchi-u.ac.jp）でも構いません。

※FD部会で集めたいえ、写しを授業担当教員にお渡しします。

※授業担当教員の承認を事前に得た上で見学して下さいますよう、お願いします。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

(1)令和2年度 人文学部教育改善FD研修会

開催日時： 令和2年11月18日（水） 14：30～15：00

開催場所： Webex

講師： 森重 祐二（教職センター客員教授）

参加者： 43名（教員40名，職員3名 アンケート回収 11名）

【研修内容】

最初に、人文学部FDコーディネーター教員から、教育改善FD研修会の主旨説明、および講師の紹介があった。その後、教職センターの森重祐二客員教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・授業改善の実際～」についての講演があった。

まず、研修内容は①高大接続改革について、②実際に高校でどのような取組みがおこなわれているかについて、③変わりつつある現状について高校教員がどのように思っているのかについての情報提供であることが述べられた。

具体的内容としては、①高大接続改革については、高大接続改革の議論、検討の流れが確認され、現在、学校教育は今後の予見困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育むことが求められており、高校教育は「学力の3要素」を育成する場、大学入学者選抜は高校まで身に付けた「学力の3要素」を多面的に評価する場、大学教育は高校までに培った「学力の3要素」をさらに向上・発展させ、社会に送り出す場という人材育成の流れを作ることが重要であると説明された。

つづいて、②実際に高校でどのような取組がおこなわれているかについては、大学の教育改善は高校教育の現状を知ることが重要という視点から山口県の進学校に対して聞き取り調査を行った結果をもとに具体的な報告があった。高校の授業はティーチングからラーニングに変化していること、主体的学びを実現するために選択科目が増え少人数指導や習熟度別指導が導入されていること、授業をとおして大学と連携していることなど、探求的学びの具体的な事例が宇部高校、萩高校を中心に紹介された。現在、県内全ての高校・高校教諭が、宇部や萩高校のように積極的な教育改革を行っているかは確認できないが、山口大学への受験者が多い高校では総じて積極的な傾向にあることが付け加えられた。

次に、③変わりつつある現状について高校教員がどのように思っているのかについては、高校生は小中学校の時に既にグループ学習やプレゼンテーションが多く取り入れられているためアクティブラーニングには慣れていること、教員の側が生徒に活動のねらい、活動のプロセス、到達点を伝えて自覚させることで学習が深まっていることなどの高校教諭の声が紹介された。

最後に、高校において主体的・能動的な活動を経験して入学する学生がほとんどになっていく中で、大学教育においては高校での学びをさらに発展させ、社会で主体的に活動でき柔軟に物事を考えられるような人材を育成することが重要になると説明された。

【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

	人数	割合 (%)
非常に良かった	4	36.4%
良かった	5	45.4%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	2	18.2%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

(2)令和2年度 人文学部アラカルト FD 研修会

「コロナ禍における就職活動」(オンライン)

日時：令和3年3月17日(水) 14:30～15:00

場所：人文学部・理学部大会議室より Webex で配信

講師：平尾元彦先生

参加者：42名(教員39名, 職員3名)(アンケート回収14名)

【研修内容】

アラカルト研修「コロナ禍における就職活動」について、平尾元彦 学生支援センター教授より「いま起きていること」と「これから起こること」そして、「今からやるべきこと」について主に以下のとおり解説があった。

1. いま起きていること ～皆が同じではないの始まり
 - ・コロナ禍により、2021年3月卒業生を対象とした就職活動は急遽WEB化が進んだが、2022年3月卒業生については、当初からWEBにて就職活動を行うことになる。WEBにて就職活動が実施されることにより、交通費、宿泊費が抑えられ、面接日の調整も容易になるメリットがあるが、オンラインでの面接を通して、対面での面接のようなやり取りがしづらい状況があり、納得感が得にくい傾向がある。
 - ・就職・採用活動の極端な早期化・長期化を抑制するため、「2021年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者 に係る就職について(申合せ)」にて、現行の日程と枠組みを維持するように、就職・採用活動スケジュールが示されている。
 - ・近年の社会情勢により、就職・採用活動は大量エントリー・大規模マッチングではなく、採用手法・就活手法が多様化している。
2. これから起こること ～新しい就職活動の幕開け
 - ・売り手市場から買い手市場への変化が起こっており、事前に決めた採用枠に達しなくても、採用要件にあてはまらない人物は採用しない厳選採用へシフトする企業も増えている。
 - ・WEBでの就職・採用活動が進化・深化し、いつでも、どこでも就活やオンラインインタビューが実施できるようになってくる。

- ・マッチングの効率化が求められるため、インターンシップが重要な役割を持ってきている。
- ・多様な就職・採用活動が行われているため、仕組みを理解して、適切に利用することが大事。困ったときは大学への相談も必要。

3. 今からやるべきこと ～ 就職活動は、準備が重要

- ・ネット環境を整備するとともにオンライン化への対応力をつけること
- ・これまでやってきたこと、これからやることを言語化し、意味づけしておくこと
- ・適切な情報源から必要な知識を抽出し、活用できるように情報感度をあげること。
- ・3年生以上には、毎週月曜日学生支援センター／就職NEWSを配信しているので、読むこと。
- 1年生・2年生には、不定期に発信している学生支援センター／キャリアNEWSを読むこと

【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	7	50.0%
良かった	7	50.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

感想の自由記述

- ・働くというのは大変なんだなあと思った。
- ・現在の就活状況が、よくわかりました。わかりやすい説明でした。ただ、配布資料をいただけると、なおよかったです。
- ・新形式の就活型があることを知り、勉強になった。また、コロナに限ったことではなく、世の中がそういう流れにすでにあることも良い指摘をいただいたと思った。
- ・リモートを中心とする就職活動は、費用の面から考えて、コロナ禍が収束した後も継続される可能性があると思っていたが、それが確認でき、学生にもその環境を整えておく必要があると、自信を持って指導できると思われる。
- ・コロナ禍で就職活動がどのように変わってきたか、よくわかりました。普段、なかなか知ることのできない点について情報共有できてよかったですと思います。

希望の研修内容についての自由記述

- ・ためになるような研修。
- ・広い意味での学生指導関する内容。
- ・今回のような就職活動にかんする話題は、毎年変化がありますので、ぜひお聞きしたいと思います。また、コロナ禍における学生のメンタルヘルスについても、ぜひご指導たまわりたいところです。
- ・いくつも研修会がある必要はなく、アラカルト型、学部主催、研究科主催、大喬センター主催、毎年、どれかに絞って、やっても良いのではないかとあるいは、学部毎に、今年アラカルト型とか、後期は毎月毎月FD研修会のような形になり講師の先生方のお話も30分と短くせざるを得ない。しっかりじっくりやり、真の効果を考えたら良い気がする。

- ・異分野が交流する授業の先行事例があれば教えてほしい。
- ・有益な授業改善の方法、知らなかったツールの使い方、など。また学生の相談内容や相談室の利用状況など、統計的にはわかるが、専門家から見た傾向や教員が留意すべき点などについての内容。
- ・学生の就職活動や進路選択などについて、続編を期待しています。

(3)令和2年度 人文学部主催 FD 研修会

「コロナ禍の一年をふりかえる」(オンライン)

日時：令和3年2月17日(水)～3月17日(水)

(令和2年9月7日(月)14:30-15:10を予定していたが、台風により中止になりオンデマンド形式のアンケートに変更)

回答者数：13名

令和2年度は、まさに人文学部教職員が一丸となり、コロナ対応に立ち向かった一年であった。

FD部会では、9月に予定していた対面形式でのFD研修会のために、事前資料として、「令和2年度前期の授業実施アンケート」の自由記述欄の記載を学部内配信したが、台風のため9月の開催が急遽延期となり、実施時期は3月に変更された。上記前期授業アンケートの情報を共有した上で、形式をオンデマンド式のアンケート(自由記述式)に変更し、「コロナ禍の一年をふりかえる」と題し、直面した問題や気づきや発見、新しい技術や教育実践に挑戦したことなどを報告してもらい、そちらの結果を学部内共有した。

例年のFD研修会では、学部職員に意見いただく機会を持ってこなかったが、本年度のコロナ対策には、教職員の協働が必須であったことを鑑み、アンケートには職員の方々にも自由に参加いただける形をとった。

回答数は、13名と思ったよりも回答数は得られなかった。回答数が低かった要因としては、年度末という実施時期があげられるかもしれない。FD部会としては、回答方法の手軽さという点から、googleのアンケート様式を選択し、質問形式も簡単な選択回答から自由記述へという流れを考えたが、回答数へ反映されなかった点は、次年度以降の検討事項として残った。

しかしながら、自由記述のアンケート結果としては、各教員がこの一年、試行錯誤を重ねてながら、教育の質と学生の健全な学生生活の維持のために奔走していたことがうかがえるものであった。また、教員側から事務職員側への感謝の報告が多数あったことも、教職員が一丸となり、コロナ対応に挑んだ一年であったことを物語っている。以下は、報告された声の一部である(下記は原文の要点を編集したものである。)

<令和2年度前期について>

- ・前期授業の開始にあたり、大学、学部の足並みが揃っていなかったことに衝撃を受けた。緊急事態というのはわかるが、感染対策をした対面授業への準備をメール1本で中止とは納得がいかなかった。
- ・共通教育についての取り組みの弱さがコロナによって露呈した形となった。
- ・執行部のリスクコミュニケーションの稚拙さを感じた。(特定のYouTube動画にはコメントを不可にしたり、反発を呼んだとわかるや否や動画を削除したり等)
- ・執行部が対面授業を想定した授業計画に固執しており、貴重な時間と労力を浪費した。結局、オンライン授業を見切り発車で行うことになった。十分な助走期間があれば、オンライン授業に向けシラバスを組み換えたり、機材を整えたりすることができたと思う。

- ・(大学側からの要請は4月からであったが)個人的には通常通りの授業は無理であろうと判断し、3月下旬からオンライン授業の準備を整え始めた。私費でPC周辺機器およびネット環境も整えた。
- ・大学当局からの情報は、この時期一切なく、Zoomの使用すらすぐに結論が出ない対応に呆れた。
- ・4月に急遽授業方法の方針が変わったことにより、機材を揃えたり(私費)、土日も授業の準備に追われた。
- ・次年度以降も使用できるようにと、それなりの質の教材資料を使用した。次年度は原則対面式となり、使用できず残念。
- ・学生の積極的な対応・協力(通信環境調査など)に助けられた。
- ・課題に追われる学生の姿が気の毒だった。実際、鬱に近い精神状態になる指導学生が複数名見られた。それぞれの方法で乗り切っていた。
- ・オンライン試験では、不正を見抜くことは難しい。
- ・教員以上に事務の方の負担が大きかったのではないか。
- ・教員に関しては、基礎セミナーの先生方の負担が大きかったのではないか。
- ・学部で作ったメーリングリストの運用に感謝。特に、熊本大学、鈴木克明氏のPDF資料「無理はしないで同じ形を目指さないこと」が精神面で大きな支えになった。こうしたメッセージや情報、授業技術等が迅速に共有される環境に多くの希望を感じた。
- ・「手探りである」ということが相互に理解されていたので、多少の不備があってもお互い寛容な心で接することができた。
- ・自身の授業への後悔として、Zoomのセキュリティリスクを重く見過ぎた。感染が拡大していた地域の大学の先生方が授業の実践例を公開してくれていたのだが、すでに走り始めてしまっていた授業を変革できず悔しい思いをした。
- ・オンデマンド方式は自身の性格に合っており、疲れたが穏やかで楽しかった。途中から対面に授業も解禁になったが、どちらにするかは個人が決めれば良いのではないかと思った。無闇に足並みを揃える必要はない。
- ・授業ツールを増やすことができたのはポジティブに捉えている。
- ・何でもオンラインで済ませるのは、よくない。オンラインの方が教育効果があったかのごときアンケート結果は、注意が必要。オンライン授業しかできない環境において、オンラインに適した項目だけをピックアップすれば効果があったと感じるのは当然。
- ・オンラインで新しい人間関係(友人)を築くのは大変難しい。特に1年生は今後よりよい大学生活を送れるようにサポートが必要。
- ・教員も心身ともに疲弊した。

<令和2年度後期について>

- ・対面授業が始まり、学生に落ち着きに戻った。
- ・対面と遠隔を組み合わせる授業ができたのは、長所であった。教育実習などで県外に出た学生も、授業に参加することができた。また、1月の感染拡大の際も対応できた。
- ・共通教育を遠隔授業にできたことで、学生(理系)が積極的に授業へ参加してくれ、良い収穫だった。コメントする学生も多く、やりがいがあった。
- ・70分授業は様々なことを削る必要があり、授業の内容が例年より薄くなってしまった感が否めない。
- ・対面の方がオンデマンドより楽。授業が学生と教員との共同作業であることを改めて思い出した。
- ・例年と異なる就活に時間をとられ、卒論の準備が進んでいなかった4年生への指導に例年以上に労力がかかった。

- ・自身の指導方法を見直す良い機会となった。
- ・緊急事態に慣れてきたこともあり、学生側からの授業に対する要求水準が上がってきた印象がある。そうした要求に応えられていたかやや不安。
- ・演習を含め、全てオンライン化して行った。他の先生方がどんどん対面に向かう中で、孤立したような思いがあった。自分がオンライン授業を行うことで他の先生が教室を使用できるのだということと、自分の授業を見つめ直す機会であるということを心の支えとしたが、やはりふりかえってみれば苦しかったのだと思う。
- ・学生に対してややきつい当たり方をしてしまったのではないかと悔いが残っている。特に1年生については、後々のケアが必要。
- ・Zoom や SLACK を使用して授業を行なったが、学生との距離感に苦労した。
- ・全てオンラインで指導したにもかかわらず、4年生は素晴らしい卒論を書いてくれた。
- ・3年生以下の学生に対して、あまりに熱心に細かな指導をしすぎた結果、心のゆとりが双方になくなってしまった。遊びをもたせることは大事だと思った。
- ・個別に話を聞いてみると、学生は本当にやりたかった様々なことを我慢している。「対面授業を増やせば全て解決」的発想ではなく、様々な「制約」をどの程度まで解除していくのか真剣に考えるべき。
- ・遠隔授業に慣れてはきたが、疲労も感じる。対面と遠隔入り混じる不安定な状態はエネルギーの浪費に感じた。試行錯誤の日々であった。急遽オンラインということになり、綱渡りの授業だった。
- ・対面授業ができ良かった。レジュメを工夫してなんとか予定した内容を終えることができた。
- ・70分の対面授業になり、一方通行の講義が主となった。みんながおとなしくよく聞いてくれた。
- ・対面授業の方がテストの点数が明らかに上がることを確認した。
- ・対面になったことは良かったが、換気等で教室が寒かった。

<その他>

- ・学期中の遠隔と対面の切り替えの方針は学生の不安につながる。学期毎に一つの方針の方が良いのではないか。
- ・普段より授業が慌ただしいのにもかかわらず、細かい報告も求められたのは、ストレスだった。
- ・対面授業の良さとオンライン授業の可能性を共に感じることができた一年だった。
- ・当局は全面的な対面授業の再開に前のめりだが、個人的には、今後もオンライン授業を効果的に活用していきたい。
- ・学務係をはじめ、事務職員の業務が倍増していたのではないか。サポートに心から感謝。
- ・学部長、学部執行部の冷静かつ迅速な判断に感謝。

第3節 教育改善に関する活動

(1) 第5回基礎セミナー部会

日時：令和3年2月17日（水）12:00~12:40

場所：人文学部研究棟第1講義室

参加者：FD部会・令和3年度基礎セミナークラス担当教員6名

内容：

人文学部FD部会では例年、FD部会・教務委員および次年度の基礎セミナー担当者を参加者とし、次年度の授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせを行う基礎セミナー部会を開催している。

人文学部では平成28年度から基礎セミナーの改革を実施し、第1クォーターで学生の人間関係構築やアカデミック・スキルの習得に重点を置いたクラス別指導を行い、第2クォーターで各コースにおける履修のあり方などに関する合同のガイダンスを行ってきた。

人文学部FD部会では令和3年度基礎セミナークラス担当教員を主な参加者として第5回基礎セミナー部会を実施し、次年度の基礎セミナー実施に向けて、シラバスの書き方や授業実施に関する情報の共有をはかった。令和3年度については、第1クォーターでの個別授業は、対面形式を基本的とすること、また、第2クォーターの合同授業に関しては、令和2年度の方針を踏襲し、コロナ感染の動向が不安定であり、教室の確保、および、学期中の「対面→オンライン」、「オンライン→対面」の変更の学生への心理的な影響も鑑み、合同授業に関してはオンライン形式での授業実施を行うことを確認した。授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容について下記の通り共有し、令和3年度基礎セミナークラス担当教員に対し、下記に基づいてシラバス作成を依頼した。

人文学部基礎セミナー授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容

【授業概要】

人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生活に馴染み、大学を勉学の場として活用してゆけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。

【一般目標】

- (1) 自らの大学生活の目的について、明確な意識を持つことができる。
- (2) 大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。
- (3) 自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
- (4) 日本語論述にかかわる基礎的知識を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。

【到達目標】

知識・理解の観点：自らの人生の展望を持ち、そのなかでの大学生活の位置づけを理解している。

思考・判断の観点：自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。

関心・意欲の観点：人文学全般に広く関心を持つとともに、特に自身の素質に適い、自らが深く関心を持てる分野に気づいている。

態度の観点：大学生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。

技能・表現の観点：大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

【合同授業の内容】

- (1) ポートフォリオの目的とキャリア教育 第8回に実施予定
「人文学部生のためのキャリア教育」（学生委員・就職支援部・学生支援センターと連携）
- (2) 留学案内 第9回に実施予定 「人文学部生のための留学案内」（国際交流部会と連携）
- (3) 各コースの紹介と履修モデルの解説 第10~14回に実施予定

- 「学際的視野を持つために（各コースの紹介と履修モデル）」（各コースに委託）
（4）総括 第15回に実施予定
「最終レポート課題の確認，夏季休暇中の諸注意」（学務係・FD部会）

基礎セミナー【合同授業】に関して，令和2年度は以下の変更があった。

（i）ポートフォリオの電子化

ポートフォリオの電子化は，ここ数年話題にはなっていたが，実施されるまでには至っていなかった。令和2年度の1年次のポートフォリオは，オンライン授業であったこともあり，これまでの紙媒体から電子媒体（エクセルファイル）へ変更した。その結果も基礎セミナーの各担当教員へ学務係より電子ファイルで引き渡された。基礎セミナー担当教員は，内容を確認したのち，修学および大学生活に何かしらの困難を抱えている気配のある学生に対しては，面談（対面あるいはオンライン）を行い，重篤なケースと判断した場合は，学務係および学生委員への報告を行った。1年次に対するこのような体制を早期に準備できたのは，学務係および教務学生部長・委員の柔軟な対応力があってのことであった。電子化はされたが，学生委員（主）より，学生に対しては，上記【合同授業（1）】において，事前にポートフォリオの意義に関する説明がなされ，その上でのポートフォリオの実施であったことも記しておく。

（ii）学生授業評価の修学支援システムからのオンライン化

学生授業評価は，例年，基礎セミナーの最終授業で実施してきたが，令和2年度は，修学支援システム上でのオンライン実施となったため，最終授業日での実施は削除された。

（2）コロナ対策支援に関するFD活動

令和2年度は，学部FD活動の一環として，以下の活動を追加して行なった。

（i）オンライン授業に向けた修学支援システム利用についての研修会の実施および資料作成

日時：1回目 2020年4月15日（水）研究科教授会後 大講義室
2回目 2020年4月22日（水）15:00～15:40 大講義室

内容：修学支援システムを日頃あまり使用していない教員（希望者）を対象にした修学支援システム利用法のデモンストレーション

（ii）「学生サポートチーム」のサポート

（iii）「授業支援チーム」のサポート

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

（1）令和2年度の状況

・学生授業評価

令和2年度の学生授業評価の実施率は，前期96%，後期93.50%と平成30年度実施率80.5%，令和元年度の76%と比べ飛躍的に伸びた。これまで紙媒体で実施されてきた学生授業アンケートが修学支援システム上での実施となり，コロナ禍での修学支援システムの使用頻度の増加およびシステム利用（操作）の慣れも伴い，学生にとってもアンケート自体へのアクセスが手軽なものとなったことが要因としてあげられるかもしれない。

本来であれば，コロナ前（令和元年度）とまさにコロナの影響を受け，大きく授業形態や大学生活自体が変化した令和2年度の比較を行いたいところであるが，実施率に功を奏した学生授業評価および教員自己評価の修学支援システムへの完全移動に伴い，これまでのIYOCAN2でのデータとの相関

を見ることが現時点ではできなくなり、令和2年度単独での集計結果を記載するに留める。これまでIYOCAN上に蓄積されてきたコロナ前のデータとのリンクやポストコロナ下における調査結果との比較報告は、次年度以降期待する。以下、令和2年度学生授業評価のアンケート前期・後期の結果を報告する。

まず、「出席」に関してみる。人文学部では、令和2年度4月は全面オンライン授業、5月下旬より段階的に対面を再開した。前期13周目には専門科目においては、全体の13%が対面授業を再開した。そのような状況下での令和2年度前期にあっても、人文学部回答者の95%以上が8割以上の出席率を保って授業へ参加していたことが分かる。後期は約学部専門科目の80%の授業が対面授業を再開した。出席に関しては、後期も前期とほぼ同様の結果であった。少なくとも学生授業評価に回答した学生に関しては、コロナ感染防止対策下の限られた修学環境の中にあっても、一定の出席率を保つことができていたと言える。しかしながら、回答していない学生の状況こそ問題が潜んでいる可能性がある。学生授業評価で見えない部分をポートフォリオなどで補い、問題を抱える学生（その予備軍）の早期に発見につなげたいものである。

Q1：出席に関して

項目	令和2年度前期	令和2年度後期
90%以上(14回以上)	80%	86%
80%以上~90%未満(12~13回)	16%	10%
60%以上~80%未満(9~11回)	3%	2%
40%以上~60%未満(6回未満)	1%	1%
40%未満	1%	1%

「授業時間外学習時間」に関しては、前期に比べ後期の方が、若干ではあるが時間外学習に多くの時間を費やしている学生の割合が増えているようである。

Q2：授業時間外学習時間（予習・復習・レポート作成）

項目	令和2年度前期	令和2年度後期
3時間程度またはそれ以上	20%	23%
2時間程度	18%	26%
1時間程度	32%	34%
30~50分程度	18%	12%
30分未満	12%	6%

「授業内容の理解」に関しても、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生は前期、後期共に85%以上であった。

Q3：授業内容の理解

項目	令和2年度前期	令和2年度後期
そう思う	31%	29%
ややそう思う	54%	55%
どちらとも言えない	11%	11%

あまりそう思わない	2%	4%
そう思わない	1%	1%

「シラバスの到達目標に達成したと思うか」という質問に対しては、前期は80%の学生が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。後期は、77%であった。ただし、シラバスの到達目標に達成したと「あまり思わない」「そう思わない」という回答は、前期、後期を通じて、5%以下であり、横這いであった。

Q 4：シラバス記載の到達目標に達成したと思うか

項目	令和2年度前期	令和2年度後期
そう思う	28%	23%
ややそう思う	52%	54%
どちらとも言えない	16%	18%
あまりそう思わない	3%	4%
そう思わない	1%	1%

「学生の授業満足度」に関しては、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生は、前期、後期共に8割以上ではあったが、前期86%、後期は80%と若干下がっている。

Q 5：授業への満足

項目	令和2年度前期	令和2年度後期
そう思う	48%	38%
ややそう思う	38%	42%
どちらとも言えない	10%	14%
あまりそう思わない	3%	5%
そう思わない	1%	1%

「授業で使用した遠隔講義システムの分かりやすさ」に関しては、前期55%に対し、後期は76%の学生が「とても分かりやすかった」「分かりやすかった」と回答した。これは遠隔講義システム自体に学生も慣れ、学期途中での「対面→遠隔」「遠隔→対面」の変更などにもある程度上手く対応できるようになってきたことが要因として考えられるかもしれない。また、教員側の指示の提示方法の工夫なども関連しているかもしれない。

Q 6：授業で使用した遠隔講義システムの分かりやすさ

項目	令和2年度前期	令和2年度後期
とても分かりやすかった	26%	32%
分かりやすかった	29%	44%
どちらとも言えない	11%	19%
分かりにくかった	2%	4%
とても分かりにくかった	1%	1%

・教員授業自己評価

教員授業自己評価の実施率は平成 30 年度の 37.5%から令和元年度は 24.3%とかなり減少したが、令和 2 年度は、前期 52.3%、後期 57.9%と飛躍的に上昇した。要因としては、自己評価アンケートが修学支援システムに紐づけされての実施になったことがあげられるのではないかと推測される。とは言え、学生授業評価に比べると、教員自己評価の実施率は 50%強に過ぎないことから、引き続き教員への周知徹底は今後の課題である。

以下、教員自己評価を実施した全授業における結果を Q6~8 に関して、令和 2 年度前期・後期を比較する。

「学生が授業内容をよく理解できたと思うか」という問いに対しては、前期・後期共に、「そう思う」「ややそう思う」との回答が 86%以上であった。

Q 6 : 学生が授業の内容をよく理解できたと思うか

項目	令和 2 年度前期	令和 2 年度後期
そう思う	19%	15%
ややそう思う	67%	75%
どちらとも言えない	13%	7%
あまりそう思わない	1%	3%
そう思わない	0%	0%

「シラバスの到達目標を達成できたと思うか」という問いに対しては、8割以上が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。遠隔であっただけでなく、授業時間も 70 分授業へと短縮される中ではあったが、事務職員の準備や協力と教員一人一人の工夫とで、予定のシラバスの到達目標を達成できたと思われる。

Q 7 : シラバスの到達目標を達成できたと思うか

項目	令和 2 年度前期	令和 2 年度後期
そう思う	23%	22%
ややそう思う	59%	68%
どちらとも言えない	18%	9%
あまりそう思わない	0%	1%
そう思わない	0%	0%

「学生は授業に満足していると思うか」という問いに対しては、前期は「どちらとも言えない」との回答が 54%いたが、後期は 26%に減少した。後期は、むしろ、「そう思う」「ややそう思う」が 7割以上を占める結果となった。

Q 8 : 学生は授業に満足していると思うか

項目	令和 2 年度前期	令和 2 年度後期
そう思う	13%	14%
ややそう思う	28%	59%
どちらとも言えない	54%	26%
あまりそう思わない	5%	1%
そう思わない	0%	0%

(3) 今後の課題

令和2年度は、コロナによる授業形態の急な変更とその対応に、学生も教職員側も振り回された試験の一年であった。健全な大学生活を維持するべく、限られた環境の中で、学生も教職員も新しい挑戦や工夫を模索し続けた。今後は、その経験の中から得た知識や道具を精査してゆく必要がある。令和2年度は、その良し悪しやその影響を検討する余裕はなかった。オンライン教育の可能性を大いに感じる事ができた反面、オンライン化による学生・教員の心身への影響など、今後、継続的に観察してゆくべきことが多くある。

また、人文学部では平成28年度から新コースカリキュラムが実施され、令和2年度は、コロナ対応と同時進行で、教学部会を中心にカリキュラム上の修正を学部内で議論し、より改善された教育・研究環境整備へ向けての修正の実施を開始した。また、同時に、その修正・変更の是非も今後検証して行かなくてはならない。その検証は、短期的成果だけでなく、長期的な成果も見据えての評価が必要となる。改組後こそが、このような評価法を上手く利用する時であるが、いかにして利用すべきかを理解するものが少ないことも問題である。

第5節 FD実施経費報告書

令和2年度のFD活動において経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

(1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

教員授業自己評価の入力率は、入力先が修学支援システムと紐付けされ、修学支援システムを利用するたびに未回答の有無が明示されるようになり、自己評価シートへのアクセスへのハードルがいきなりに下がり、令和2年度の入力率はこれまでに比べ格段に向上した。来年度は、学期末や年度末という繁忙期による入力忘れを減らすべく、拡大教授会等において、教務委員等からの直接的な周知を意識的に行うことで、さらなる入力率向上は望めると考える。また、このような評価結果を、実際に、どのように教育改善に結びつけることができるのかがわかる実例やアイデアを教員間で共有するようなFD研修会を催すなど、教員自己評価の意義や効果を再確認することで、入力へのモチベーションを上げることも今後の課題と言える。

(2) 授業外学習時間の確保と課題のバランス

例年、授業外学習時間の確保が難しいことが報告されてきたが、令和2年度は授業外学習時間（レポート作成、宿題等を含む）は例年よりも確保されていた。しかしながら、これは新たな問題も生んだ。4月末に、すでに課題に追われ、心身共に疲弊している学生（特に新入生）が増加していると学部内で報告され、問題となった。

1年次学生の声を聞いたところ、オンラインで教員や友人との対面が全くない環境では、学生は自身のやっていることが正しい方向へ進んでいるのか否かが確認できず、不安を募らせていることもわかった。この点に関しては、課したものに対する十分なフィードバックが教員側に要求されることとなるが、近年の様々な付加的な業務（事務作業）に加え、コロナ禍による授業方式の変更・配慮に伴う授業準備の倍増や近年増えている配慮を必要とする学生の増加や学力不足での入学者に対する対応に、莫大な時間を要し、実質的な時間かなりの制限があるのも事実である。このような意味で、業務上簡素化できる部分とより充実させる部分の差別化をはかることも検討すべきと考える。

また、人文学という学問は、自らの中から湧き出る向学心に基づく研究・学びを本質とする。マニュアル化されたものをなぞるような学びに学生を慣れさせてしまうことは、その本質に反する。時間外学習の指示がなければ自らの学習ができないような学生を育てない工夫も大いに必要である。

(4) その他

人文学部では平成 28 年度より新コースカリキュラムが実施され、新コースカリキュラムの一期生はリテラシーなどカリキュラムの目玉といえる授業を受け、令和 2 年 3 月に卒業した。しかしながら、現場の教員側からは深刻な問題点の指摘もあり、第 4 節「今後の課題 (3)」にも記したように、一昨年度より新コースカリキュラムの修正について学部内で議論を重ね、令和 2 年度入学者より修正を開始すべく準備してきた。来年度は、修正計画に従い、本格的な実施となる。

基礎セミナーの内容等に関しても、学生や教員の要望やカリキュラムとしての必要をくみとり、新カリキュラムの成果や課題点をさらに共有することが今後も継続して必要である。

第4章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

教育学部としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

第1回FD研修会

テーマ：附属臨床心理センターの活動と教育相談

講師：押江隆・春日由美・恒吉徹三（教育学部心理学教室）

日時：令和2年7月15日（水）15:00～15:30

参加者：78名

1. 附属臨床心理センターとは、2. カウンセリングの事例、3. 教育相談研修の報告、4. 教員養成への示唆の順に説明があった。

附属臨床心理センターでは、地域の方を対象に心理相談（有料）を行っている。相談の内容は不登校、発達障害、いじめ等であり、2017～2019年の各年の新規申込数は23、37、および17件、延べ相談人数は695、1015、および759人であった。当センターは臨床心理士を目指す大学院生の実習の場でもあり、実際、大学院生は心理相談のケースを担当していることが説明された。その後、いくつかのカウンセリング事例が紹介された。

教育相談研修は、2019年6月から2020年1月の間に計6回、現職教員等を対象（平均46.1名/回、スタッフ含む）に「教師のための教育相談力向上研修 基礎編」が行われた。研修内容は、第1回が「理解の大切さ、教師の自己理解・自己受容の大切さ」、第2回が「非言語的コミュニケーション、共感的理解」、第3回が「こころの整理法、本当の共感的理解・傾聴」、第4回が「関わりにおける自分1(叱る、アサーション)、面談・電話のコツ」、第5回が「関わりにおける自分2(待つ、連携)、ケース理解1(共感的理解)」、第6回が「ケース理解2(多面的理解)」であった。毎回、教師の自己理解・児童生徒保護者理解を中心に、個人や他者とのワークが複数行われたことや、参加者の研修後の自由記述が紹介された。

教員養成への示唆では、まず教育相談と生徒指導の相違点がそれぞれ主に個に焦点を当てるか、主に集団に焦点を当てるかによるところにある（文部科学省）ことが説明された。そして、それらを担う学校教員と臨床心理士が“チーム学校”の実現に向けて共創することの意義について述べられた。

第2回FD研修会

テーマ：「学位プログラム」レベルの教学マネジメントの対応方策

講師：林透（教育・学生支援機構教学マネジメント室 准教授）

日時：令和2年9月16日（水）15:00～15:30

参加者：76名

2020年1月に中央教育審議会大学分科会において「教学マネジメント指針」が策定され、本学では直結した対応した組織を備えるため、組織改組がされ、2020年4月に教学マネジメント室が設置されたこと、およびその役割や機能について、最初に説明があった。その後の説明等は、下記のとおりである。

教学マネジメントとは、大学がその教育目的を達成するために行う管理運営のことであり、各大学が自らの理念を踏まえ、その責任でそれぞれの実情に応じて構築すべきものである。

「教学マネジメント指針」は以下の5章で構成されている。I. 「三つの方針」を通じた学修目標の具体化、II. 授業科目・教育課程の編成・実施、III. 学習成果・教育成果の把握・可視化、IV. 教学マネジメントを支える基盤、V. 情報公表。

この指針の全体的ポイントは、教学マネジメントの対象を「大学全体」、「学位プログラム」、「授業科目」の三つの階層に区分し明確化。大学側の「教育成果」の観点と学習者側の「学修成果」の観点に区分し明確化。その上で、学位プログラムレベルでの三つの方針に基づく質保証を明確化。教学マネジメントを支える基盤としてのFD・SD、教学IRの明確化の4つにまとめられる。この指針には取り組み等が示されているが、大きな方向性を指し示すものであり、「マニュアル」ではないことに注意する必要があることが述べられた。

この指針は、第3期認証評価における領域2（内部質保証の基準）・領域6（教育課程と学習成果に関する基準）と連動していることが述べられた。ただし、認証評価に関しては、従前の機関別評価から、今後は学位プログラム別評価に移行していくため、学位プログラム評価のしくみが必要となってくること、および学位プログラム評価のポイントは、(1)「卒業認定・学位授与の方針」(DP)の妥当性、(2)「教育課程編成・実施の方針」(CP)の妥当性、(3)教育成果・学修成果の妥当性の3つであり、それぞれに対応したエビデンスが必要であることが述べられた。最後に、参考として、学位プログラム評価の枠組み（イメージ）が示された。

第3回FD研修会

テーマ：新時代の大学における授業のあり方について考える ―高等学校における学校・授業改善の実際―

講師：霜川正幸（山口大学教職センター 教授）

日時：令和2年10月21日（水）15:00～15:30

参加者：81名

冒頭に、高大接続改革により高等学校における教育や授業が大きく変わってきていることが述べられた。高大接続改革とは、高校教育、大学入学者選抜、大学教育をひとつながりのものとしてとらえ、高大接続教育を進めようとする一体的改革のことであり、2014年12月に公表された中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」以降、大きな制度変更が行われつつある。また、この改革の必要性について、社会が急速かつ大きく変化しており、今後の予見困難な時代の中で、新たな価値を創造していく力を育てるためであること等が説明された。

高大接続改革では、高校教育、大学教育を通じて「生きる力」を育むことが確認された。また、特に、「確かな学力」では、社会で自立的に活動していくために必要な力（「学力の3要素」：知識・技能の確実な習得、思考力・判断力・表現力の育成、主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度の育成）をバランスよく育むことが必要とされており、大学は、高校までに培ってきた学力の3要素を更に向上・発展させ、社会に送り出す場であることが示された。

高校教育について、改革の柱は、教育課程の見直し、学習・指導方法の改善と教員の指導力向上、多面的な評価の推進である。実際に県内の高校に勤める現職教員からの聞き取り調査によって、ここ数年、教員の意識の変化が見られ、授業改善の取り組みが進んでいることや、県内の高校での探求学習の成果等が紹介された。また、高校の生徒は、以前とは違って、ペア・グループ学習、グループワークやプレゼン等を好み、慣れている。何を求めてさせるのかを明確にすると効果が上がるというコメントの紹介や、実際に高校の現場で行われている生徒参加型手法は意見発表・交換型、理解深化型、課題解決型に分けられることの説明があった。

高大接続改革で高校の教育や授業が大きく変わってきていることから、大学に入学してくる学生の状況、学びのスタイルやニーズ、授業をとおして育む力等をふまえて、大学や大学の授業も変わっていく必要があるのではないかと問題意識から本講習は計画されており、講習の最後には、教育指導の核となる「講義」に、学生参加型を加えながら「学力の3要素」を中心とした人材育成をしましょう。学生のためにも、私たちのためにも、大学や地域のためにも授業の工夫改善を進めましょうと締めくくられた。

第3節 教育改善に関する活動

本学部では、令和2年4月に新規に教員として採用された本学部卒業生とその赴任校の管理職（各21名）に本学部の教員養成カリキュラム（授業、教育実習、卒業論文等）の満足度や有効性あるいは課題、新規採用一年目の教員としての資質・能力として十分に備わっている点と備わっていない点等について聞き取り調査を行った。そして、その結果は分析して報告書にまとめ、今後の教員個々の教育活動や教員養成カリキュラムの改善に役立てられるように全教員に配布した。

令和3年4月時点で確認できたデータによる学生授業評価、教員授業評価の実施率の経年変化を図1に示した。授業評価実施率は、令和元（2019）年度から令和2（2020）年度にかけて学生・教員ともに大きく上昇した。2020年度には新型コロナウイルス感染症の関係で遠隔授業が多く、学生による授業評価は紙媒体から、修学支援システムに変更になった。これらの状況変化が実施率に影響したことが考えられるが、特に学生についてはほぼ100%の実施率であり、来年度以降も実施率を維持できるようにアンケートへの回答について呼びかけを行っていく必要がある。一方、教員については実施率が60%にも達していないことから、来年度には、学部全体の会議において教員授業自己評価の意義を再度確認し、教員への入力への依頼を行うなどによって、実施率をさらに上昇させる必要がある。

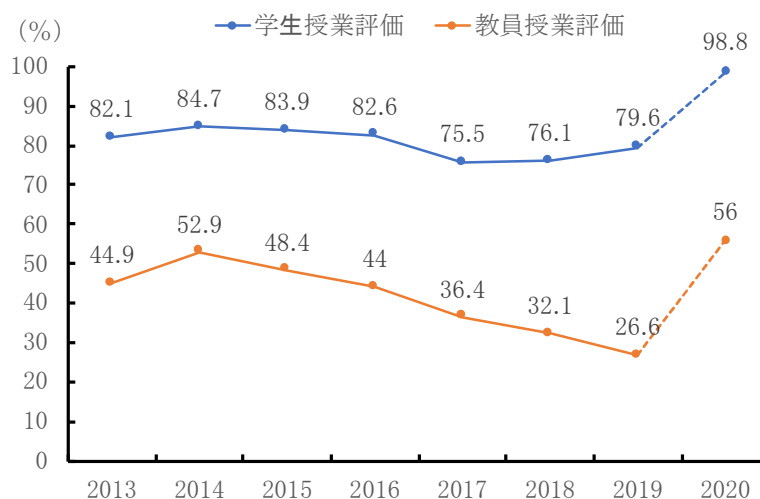


図1 授業評価アンケート実施率の経年変化

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度教育学部FD研修会において経費は使わなかった。

第5節 来年度の課題

令和2年度は、昨年度に引き継いで学部では公開授業を実施しなかったが、教育学研究科専門職学位過程（教職大学院）では、原則すべての授業を公開している。

令和元年度卒業生とその管理職に対して聞き取り調査を行い、その分析結果は報告書にして全教員に配布して周知するようにしたが、その結果が実際、教育活動にどのように役立てられたかは不明である。そのため、その点について調査等して、今後の本活動に活かす必要があると考えられる。

授業評価アンケートの実施率は、学生ではほぼ100%であり、来年度も維持するような働きかけを行っていく。一方、教員では40%強の授業で実施されていないため、授業評価を実施する意義について再確認し、実施を促す必要がある。

授業外学習時間の確保については、上に述べた聞き取り調査を反映したかたちで対応が必要である。調査によれば、山口大学教育学部のちゃぶ台プログラム等で小中学校においてチューターを行っている学生が多い。このような点をふまえ授業外学習時間の確保についてあらためて考えることが必要である。ただし、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、学生は卒業生とは大きく異なった生活を送ることになり、学外での活動はかなり制限された。来年度も引き続き新型コロナウイルス感染症の影響があった場合には、状況に合わせて、授業外学習時間が適切に確保できるような取り組みが必要である。図2は、今年度の教育学部における学生の授業外学習時間である（問い「あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください」）。

成績評価について、教学マネジメント室が公開している「成績分布共有システム」による授業毎の成績分布状況も参考にして、今後、各教員がその方法を再検討し、必要に応じて変更・改善して、より適正に行えるように取り組む必要があると考えられる。

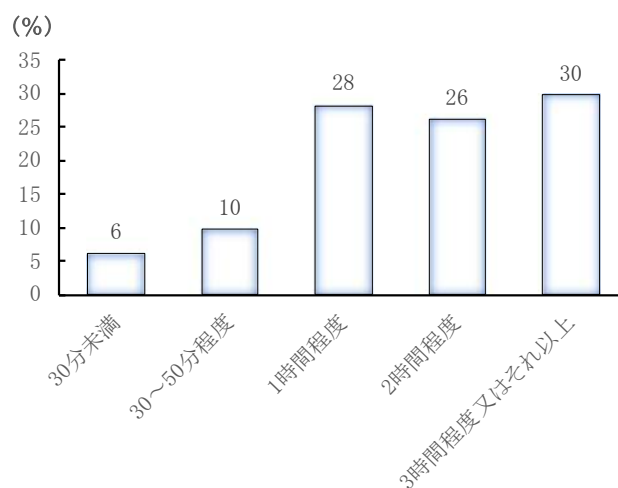


図2 授業外学習時間(教育学部)

第5章 経済学部のFD活動

第1節 授業公開

授業公開に関しては、従来から公開希望者や参加者の減少など形骸化が進んでいたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために対面授業を中止、オンライン授業に切り替えることとしたために授業公開は実施しなかった。しかし、一方で急遽、オンライン授業を実施することになったために、その研修会を開催したり、Moodle上でオンライン授業についての情報交換を行う、授業公開に近い活動を行った。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

2-1 遠隔講義等に関するFD研修会

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために急遽オンラインでの授業実施を行うことになった。多くの教員がオンラインでの授業実施に対して知識や経験が不足しているため「遠隔講義等に関するFD研修会」を4月9日（木）午後2時半から第2大講義室にて全教員を対象に行った。

内容

- ・ Moodleの使用例
- ・ 修学支援システムの利用例
- ・ ZOOMの利用実例
- ・ 意見交換



Moodleを使った動画授業について解説を行う観光政策学科の加藤真也准教授

2-2 科研獲得文化構築のためのFD研修

昨年度に引き続き科研獲得文化構築のためのFD研修会を研究推進室が中心となって行った。

1) 第1回研究推進室会議

4月7日（火）15時10分から16:30分、今年度の取り組みについて話し合う。応募件数を伸ばす取り組み（人事評価制度や昇任審査とのリンク、基金応募時における科研獲得実績の確認徹底化などの可能性）、採択率を伸ばす取り組み（科研審査担当者の講演会を検討）、科研B以上の大型申請などについて話し合う。

2) 4月15日（水）科研獲得者の発表

4月15日（水）教授会の場にて学部長が令和2年度新規科研獲得者3名を発表し、他の教員も後続するように呼び掛ける

3) 7月中心 科研関連図書購入と公開

科研審査担当者の講演会を実施するために調整にあっていたが、当初予定していた方が講演できない事態に陥る。そのために科研関連の図書を11冊購入し、全教員に利用してもらう体制を整備。

4) 第2回研究推進室会議

9月30日(水)10時から12時、大型科研獲得推進について話し合う。科研B以上の大型科研獲得推進のために配分された部局改革マネジメント経費90万の活用について検討。獲得可能性の高い教員に対して個別に配分する方向性を確認

5) 大型・中型科研獲得推進のための部局改革マネジメント経費への応募呼びかけ

10月21日(水)教授会の場にて、大型・中型科研獲得推進にむけての部局改革マネジメント経費への応募を呼び掛ける。

6) 第3回研究推進室会議

11月16日(月)13時より、大型・中型科研獲得推進のための部局改革マネジメント経費への応募状況と再募集について話し合い。

7) 大型・中型科研獲得推進のための部局改革マネジメント経費の再募集

11月18日(水)教授会の場にて大型・中型科研獲得推進のための部局改革マネジメント経費への応募枠がまだ余っているので再募集を呼び掛け

8) 大型・中型科研獲得推進のための部局改革マネジメント経費採択者3名の発表

12月16日(水)教授会の場にて大型・中型科研獲得推進のための部局改革マネジメント経費の採択者3名の発表

2-3 教育改善FD研修会

令和3年1月20日(水)13時30分から14:00まで。第一会議室からのZOOM配信方式により行う。講師は、山口大学教職センター・アドバイザーの森重祐二先生、テーマは「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・教育改善の実際～」。参加者62名(うちZOOM参加60名)。



講師の森重先生



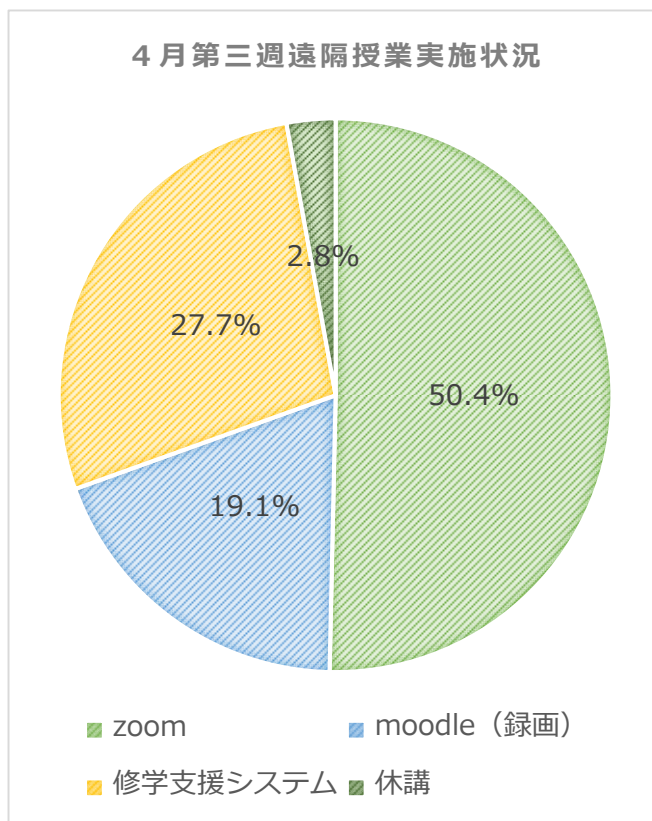
オンライン参加の様子

第3節 教育改善に関する活動

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために急遽オンライン授業を実施することになった。そのため遠隔授業に関する情報や意見交換を通して教育改善に取り組んだ1年であった。

本学部では、Moodle上に「遠隔講義について（COVID-19 対応）」というコースを設け、その中で「ZOOMの利用について」「修学支援システムの利用について」「動画作成について」「学生たちの様子について（ケアになど）」「教員として（フリートーク）」「資料倉庫」の5つのフォルダを設け、情報や意見交換を行うことで教育改善を図った（右図参照）

その効果もあり、遠隔授業の実施は想定以上にスムーズに進んだ。右図で示した通り、遠隔授業体制に入ってからすぐに4月第三週には約50%の授業でZOOMによるライブ配信、約20%の授業でMoodle上に動画を投稿する形式の遠隔授業、30%弱の授業で修学支援システムを用いた遠隔授業を実施しており、休講はわずか2.8%であった。



遠隔授業に対する学生の意見についても調査を行った。以下の表は、ある授業の受講生を対象に前期における遠隔講義を受講する上でのトラブルや困った経験について質問した結果である。ZOOMでのライブ配信において通信が途切れるといった支障が若干発生しているようであったが、特にトラブルや困った経験はないという意見が多かった。

前期の遠隔講義におけるトラブル

Q7 前期で遠隔講義をいろいろと受けたと思いますが、その際に困った経験がありましたら教えてください。なお、その際には、遠隔講義を受けていた場所、遠隔講義のタイプを必ず書いてください。

回答/Answers
特にありませんでした。
特にありません
自宅でzoomでの講義を受けている際、通信が途切れたり、音が消えたりと色々な不具合があったのでmoodleでの配信にできるだけしてほしいと思いました。
特にないです。
特にないです。
自宅でMoodleを用い動画を視聴する形式で講義を受けたが、添付されていた動画の音声がところどころ途切れている箇所があり、聞き取れない部分があった。

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
経済学部	科研獲得文化構築のためのFD研修	関連図書33冊	80	
経済学研究科	教員向け英語研修	講師謝金	59	
	教員向け英語研修	書籍	5	
計			144	

第5節 来年度の課題

来年度は、対面授業と遠隔授業を同時に実施していくハイブリッド型の授業が主体となっていく。ハイブリット型は、対面授業や遠隔授業のみとは異なる授業運営の難しさが想定されるため、一層の情報や意見の交換を通して教育活動の改善をはかっていく必要がある。

また、Society5.0時代到来の中、新型コロナウイルス感染症問題とは関係なくDX教育を推進していく必要があり、より効果的な遠隔授業の方法(例えば、修学支援システムの利用した授業外学習時間の確保、適正な成績評価など)を来年度も検討していきたい。

第6章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1.1 数理科学科のピア・レビュー

実施科目「数理科学発展セミナー」

1) 概要

①日時：令和2年10月26日（月）3・4時限（代数・解析）、11月2日（月）5・6時限（幾何）

②対象学生：数理科学科3年生（約50名）

③授業概要：本授業は、卒業研究の準備として3年次後期（4単位）に設けられており、代数・幾何・解析の3つの系別に分かれて行う系別セミナーと、指導教員毎に分かれて行う個別セミナーの2つのセミナーで構成されている。今回のレビュー対象は系別セミナーである。代数系は、後期前半部分では90分間の試験と、試験問題に関するプレゼンテーションを交互に繰り返すという形で授業を行っており、後期後半部分ではTex講座と個別セミナーで学んだ内容に関する発表会を実施している。今回は試験問題に関するプレゼンテーションを行う回であり、学生は、前回受けた試験の内容について、セミナー形式でプレゼンテーションを行い、それに対し担当教員や受講者から質問を受け、それに答えることによってより理解を深めていくという形式で授業が進められる。幾何系は、幾何に関する資料と演習問題を配布し、その解答を学生が発表し、教員と受講者で質疑・討論を行うという形式である。解析系は、事前に配布された演習問題について、指名された受講者がスライドを用いて発表を行い、その発表に対してすべての受講者に意見が求められるといった形式である。どの系別においても、学生が与えられた課題に関するプレゼンテーションを行い、他の受講者や教員が理解の浅い点や曖昧な点を指摘し議論することで理解を深めることを目的としている。また、プレゼンテーションの方法についても指導を行っている。

④授業担当教員：（代数）南出 真、（幾何）宮澤 康行、（解析）廣澤 史彦

レビュアー：増本 誠、木内 功、中内 伸光、菊政 勲、幡谷 泰史、倉富 要輔、
大関 一秀、只野 誉、塚本 真由

2) レビュー結果

レビューシートの評価欄には、「知識・理解」、「思考・判断」、「関心・意欲」、「技能・表現」、「態度」の観点から適切な指導が行われているかを5段階で評価されており、いずれの系別の担当者に対しても殆どの項目で「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

（優れた点）

【解析系】

- ・ 学生の発表態度や姿勢について指摘がみられ、プレゼンテーション全体において的確な指導がみられた。学習内容についても直接的に指導があり、学生の今後につながるものと考えられる。
- ・ 発表者の理解力・プレゼン力に応じた質疑がなされていた。プレゼン資料の作成やプレゼン能力は個々の学生によって差がある。それぞれの学生に応じて必要なアドバイスが与えられていたように思う。
- ・ テーマだけが与えられていて、その細部は発表者に委ねられている。授業担当教員はもちろんのこと、どの受講生もすべての発表に対して意見を求められ、正に双方向のアクティブラーニングである。担当教員からは、受講生全員に有益な批評が聞かれる。

- ・ 担当教員が観点を分担しているように思われる点がおもしろい。

【幾何系】

- ・ 系別セミナーの時間であったが、配布資料の準備のもと、問題演習の形態で行われていて、発表者には教員が適切な質疑を行い、学生の理解を深める指導がなされていた。発表者以外の学生にも発言を求めているので、常に全員が授業に参加できるように工夫されていて、発表者以外の学生も熱心にノートを取っていた。
- ・ 題材となる内容は「距離空間」についての証明問題であり、難しい内容であったが、教員の指導が行き届いているようで、発表者は、よく準備された発表を行っていた。教員は発表者に、授業内容だけでなく、「背理法」による証明の記号論理の内容を尋ねるなど、幅広い内容の質疑を行っていて、総合的な能力が身につくように工夫されていた。学生たちは、この演習形態の授業で、自習で習得するには難しい経験や能力が身につくものと思われる。
- ・ 教員から発表者への質疑は学生の学力に配慮しつつ段階を踏まえた適切なものであり、発表者の解答から正解へ辿り着くように指導を行うよう工夫されていた。
- ・ また発表者の解答に関して他の受講者にも質疑を投げかけたり、受講者からの積極的な意見も見受けられ、全員が授業に主体的に参加できる取り組みがなされていた。演習問題には難しいものも含まれていたが、普段の講義では時間上の制約により細かな説明がしばらく箇所も懇切丁寧に指導されており、この演習形式の授業で受講者の学力が的確に養われると確信した。

【代数系】

- ・ 授業の冒頭に全般的な注意、解説、講評がなされ、また数学史の話題の披露もあり、アイスブレイクの役割も果たすとともに、勉強にもなっていた。
- ・ ついつい知っているものと思いがちな記号の意味を、きちんと理解しているかを一つ一つ丁寧に確認されていた。
- ・ 発表者の理解が不十分と思われる点を的確に把握し、適切な説明・指導が行われた。同時に、クラス全体にフィードバックされ、各問題ごとに質問やコメントがないか確認されていた。
- ・ 口頭での説明では不十分あるいは理解が難しいような場合に、自ら板書し、例示することにより理解を促していた。
- ・ 群論をテーマにした課題は、三年次後期としては適切なものである。問題の難易度も適切であった。特に、ゼミ配属直後の早い段階で、英語の文献を読むという経験は学生たちにとって貴重なものになると思われる。

担当教員は前週に実施した演習の答えを良く読んで、学生たちの解答の傾向に合わせた解説および助言を行っていた。学生の発表中にも教員によるきめ細かい指示が入っていた。対応する学生は大変だと思うが、この経験を糧に数学およびプレゼンテーション

1.2 物理・情報科学科のピア・レビュー

実施科目「プログラミング演習Ⅰ」（後期）

1) 概要

- ① 日時： 令和2年12月22日（火）16:10-17:40 理学部2号館 計算機実習室
- ② 対象学生： 物理・情報科学科 1年生
- ③ 授業概要： プログラミング技法：Level4 関連の演習課題を受講生に主体的にプログラムを作成し、作成したプログラムを提出させる講義内容である。まず、演習問題の内容及びプログラムを作成する際に注意事項とヒントをプロジェクトに表示しながら説明を行なっている。その後、受講生は講義だけをするのではなく、途中で練習問題を解かせる時間を与え、その後解説も行った。

- ④ 授業担当者： 末竹規哲、韓先花、Adrien Fauré
レビュアー： 内野、浦上、川村、野崎、上田
- ⑤ レビュー方法： 授業に参加し、終了後、問題点や改善点等を担当者に口頭または文章で指摘する。

2) レビュー結果

レビュアーから以下のコメントを頂いた。

- ・ 学生が主体的に取り組めるように演習が工夫されており、良かった。
- ・ ほとんどの学生が積極的に演習課題に取り組んでいるようで全体的に問題無いと思います。
- ・ 積極的にプログラムを学ぼうという学生がいるのは良かったと思います。

3) 検討すべき点

- ・ 互いに教え合っている学生がおりました。一度、分野でどこまで相談して良いかの基準を決めて、学生に通知する必要があると思います。緩くすると、レポートでも写したものを提出してくることにつながります。
例：話をしても良いが、互いのプログラムを見てはいけない。TAや教員以外に聞いてはいけない。他人のプログラムを編集してはいけない。時々書き換えてあげている場合があります。
- ・ 仮想マシンを小さく表示している学生がかなりいました。ブラウザも仮想マシン内のものが使えるので、この中でできることを知らせた方が良いと思います。
- ・ for文の使い方の基礎を理解していない学生もいたので、新しい課題に入る前に簡単に授業の復習をするのも良いかも知れません。

1.3 生物・化学科のピア・レビュー

1.3.1 生物学コースのピア・レビュー

実施科目「生物学実験 I」

1) 概要

- ①日時：令和2年10月16日（金）5～10時限 理学部生物科学学生実験室
- ②対象学生：生物・化学科、生物学コース2年生（42名）
- ③授業の概要：生物学実験 I では、初回の講義で、安全ガイダンスの実施と、シラバスに従って実験内容や授業方針について説明を行い、授業の到達目標を伝えている。今年度は実験を実施するにあたり、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、理学部の授業ガイドラインを遵守し、履修者を半数の少人数にし、内容を短縮して実験を行った。具体的な対策としては、着席位置や間隔について十分に注意を払い、全員が白衣とマスクを着用し、実験室内の換気と実験台・器具のアルコール消毒や手洗いを行った。
- 実験の項目として、塩水に生息する小型エビであるアルテミアを教材に用い、発生段階が途中で停止した休眠卵の最適な孵化条件を検討した。前日から塩濃度と温度が異なる飼育条件において卵を飼育し、当日は発生が進行したノープリウス幼生の個体数を1時間おきに数え、孵化個体の割合とノープリウス幼生の観察・スケッチを行った。また、同じ鰓脚(亜)綱に属する淡水に生息するタマジジンの外部形態の観察とスケッチを行い、雌雄の形態の違いや生殖様式について学習した。
- ④授業担当教員：原田由美子
レビュアー：原 裕貴，岩楯好昭（生物・化学科 生物学分野）

⑤レビューの方法：学生への実験手順説明や結果の解釈の解説などについて聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く

2) レビュー結果

授業に対して、レビューより以下の指摘を頂いた。

レビュー1

- ・学生実験室の実験台という一般的な授業とは違う座席配置の教室での実験授業である。
- ・広い教室を意識してか、黒板に大きな字で板書されており、後部の座席の学生も読みやすかった。
- ・おしゃべりをしている学生も、特に注意することなく、いつの間にか指導説明を注視するようにまく発声等行っていた。指導説明の過程ですぐに学生は注視するようになった。
- ・コロナウイルス感染予防のため、通常時の半分の人工密度で学生が配置している。また、全員が清潔な白衣、マスクを着用していた。核実験台の上には消毒用エタノールも設置されていた。
- ・アルテミアの孵化を実体顕微鏡で観察する実験を行っていたが、学生各自に顕微鏡があり、学生同士が密接しないよう工夫されていた。また、一人ひとり観察できるため、各学生の理解が深く進んでいる様子だった。また、やることなく手持ち無沙汰になってお喋りをするような学生が出ない工夫がなされていた。
- ・もし改善点をあげるとすれば、学生の実験操作にはどうしても個人差があるため、実験を計画通りに遂行する時間が予測しにくいことが考えられた。

レビュー2

- ・学生を4～5人のグループに分け作業が行われた。
- ・昨日の実験からの継続のため、必要な器具は予め各グループに分配されており、学生はすぐに作業に取り掛かれる状況が整備されていた。
- ・まず当日の作業に取り掛かる前に、作業内容の説明を板書と配布資料を見ながら、作業内容の説明がなされた。
- ・実習は、培養する溶液の塩濃度や培養温度（室温、25℃、30℃）の違いにより、休眠卵の孵化率を調べる内容であった。設定された培養時間ごとに、学生各々が実体顕微鏡でサンプルを観察し、スケッチを行う流れであった。
- ・動く（生きている）サンプルに対して、スケッチを描くのに学生がやや難儀していた。取り組む前に、スケッチとして描くポイントの指示（どの構造を明確に書くのかなど）や考察すべき点の指示があると、学生の取り組みやすさが明確になるのかもしれない。
- ・実験作業自体はオープンな環境で進んでおり、学生間で相談しやすい環境が整えられていた。その反面、スケッチを描く作業は個人で完結するので、何かグループの学生間において、共同で作業、共同で考察することがあると、より深い学習に繋がるのかもしれない。
- ・スケッチ後の孵化の様子から考察すべき内容・観点（培養環境）を口頭で学生に伝達していた。その観点を学生が理解できているか、レポートに反映できるかについては、やや不安が残った。考慮する点（培養環境の詳細な違い）を整理する機会があると良いのではないかと。
- ・教員がこまめに各グループの作業進行の様子を見回り、進行状況の把握に努めており、不安な部分は学生が質問する雰囲気を作っていた。

レビューから頂いたコメントを参考に、来年度以降の授業の改善に努めたい。

動きがある生物材料の行動をまず観察した後に、低温や化学固定などの方法により生物の動きを停止した状態で材料の観察とスケッチを行うよう、実験方法の改善をしたい。また、初めて実験材料を見る学生に対して、観察の仕方を順序だてて説明するとともに、観察してほしい体の構造

や器官を具体的に説明するなど、スケッチのポイントを明確に指示するようにしたい。実験操作の個人差への対応として、学生のスケッチの様子をこまめに確認し、個人の観察能力や理解度に応じて的確な指示を行うよう努めたい。

グループでの作業については、班内での実験結果の共有だけでなく、結果の考察を行うグループディスカッションの時間を設けるなどの工夫をしたい。

実験結果から考察すべき内容に関して、口頭での説明だけでなく、板書やプリントを配布するなど記録に残る形で指示を与え、実験後のレポート作成のための手助けとなるように改善を行いたい。

1.3.2 化学コースのピア・レビュー

実施科目「化学ゼミナールⅠ・Ⅱ」

1) 概要

①日時・場所：令和2年12月28日（月）13:00～16:15、オンライン(ZOOM)

②対象学生：大学院創成科学研究科・地球圏生命物質科学系専攻（博士前期）
化学コース M1・M2年生

③授業概要：化学ゼミナールⅠ・Ⅱの履修者が、各自の研究課題に関するプレゼンテーション（発表7分、質疑応答3分：合計10分）、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。

授業の到達目標：

- ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
- ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。

④授業担当教員 本多 謙介（化学分野長）

レビュアー 山崎 鈴子・川俣 純・村藤 俊宏・村上 良子・藤井 寛之・安達 健太・綱島 亮・上條 真・鈴木 康孝・谷 誠治・檜木野 宏

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を議論する

2) レビュー結果

①授業内容

- ・一人当たり約8分間のプレゼンテーションの後、約2分間の質疑応答を行った。
- ・発表件数は、17件であった。

②意見

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 授業内容に対する意見

- ・修士1年間の研究内容をオンライン発表させるという形式であった。
- ・M1以外の学生にも「判りやすいプレゼンとはどのようなものか？」ということを考える場になって良いと思います。
- ・各学生が研究の進捗状況をプレゼンし、指導教員以外の教員からアドバイス等をもたらせることが、この講義の利点と感じた。他の教員から助言をもらうことで、学生の視野も広がると思う。

- ・時間・スケジュール構成とも適切であったと思う。
 - ・修士論文作成に向けて行っている研究の途中経過を口頭発表の形式でプレゼンした。意欲的に、かつ着実に研究を進めることができている学生さんがいる一方、研究結果や考察などが不十分で、一段の努力を要する学生もいるといった感想をプレゼン後に抱いた。それぞれの専門分野で修得が求められている基本的な内容を充分マスターしたうえで修士論文の作成に望まれることを期待したい。現時点で精力的に研究に取り組まれている学生さんに関しては、今後も引き続き研究に打ち込まれること、また、これからの時代において求められるであろうスキルとそれに対応できる知識を得て、社会において指導的立場に立てるよう期待したい。
2. 改善を要する点
- ・質疑応答が教員からのものが多く、学生間の議論に繋がっていない。座長（司会）を学生が担当するなど、学生から積極的に質問する環境を作る必要がある。評点を付けた方が良いのではないかと感じる。
 - ・今回の発表は、コロナウイルス感染対策のために初めてオンラインで行ったが、やはり対面の方が緊張感があり、質疑応答も活発になるため良いと感じた。例えば、教員と発表者のみ対面で行い、その他の学生はオンラインでそれを視聴するといった方法も考えられる。
 - ・オンラインで行った。この程度のコじんまりとしたオンライン発表会(人数、内容)であれば、運営面においても、スムーズに問題なく進めることができた。この点は評価できる。発表者の交代なども、対面の場合と比較し、より短時間で行え、その時間を発表そのものや質疑応答に割り振ることができ、よいと感じた。ただし、質疑応答は活発さを欠いていたように感じる(これは、オンライン形式に限らず、対面形式でもありえることですが)。また、オンライン形式の場合、一般的に同時に1人しか話すことができないので、複数人での討論の形にはなりにくく、よりよいアドバイスをもらう機会は少なくなる恐れがあるように感じた。このような企画をオンライン形式で行うとすると、特に運営にかかわる人員をさく必要があることと、システム面での工夫が必要であると思われる。座長、発表時間の管理、質問等の処理などを1人(1台のPC)が担当するのは、無理があると思います。発表会にあたっての準備(運営の説明書や、やり方の説明)が必須であると感じました。

1.4 地球圏システム科学科のピア・レビュー

実施科目「地球科学実験 IIA」

1) 概要

①日時：令和2年10月2日（金） 12:50～16:00 学生実験室

②対象学生：地球圏システム科学科2年生（2年生必修：4単位）

③授業の概要

「地球科学実験 IIA」は後期の実験であり、4名の教員で担当している。前半後半に分けて、前半では平面測量や野外でのスケッチ、ボーリングコア観察などを習得し、後半では野外での地質調査の基本について習得することを目的としている。本ピア・レビューは初回のガイダンスおよび平面測量のおさらいが実施された。

④授業担当教員：川村喜一郎、岩谷北斗

レビュアー：大和田、志村、坂口、太田

⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート（無記名）とレビュアーによるコメント（授業観察カード記載）、授業研究会の開催

2) レビュー結果

① 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、野外教材・案内資料の利用）

資料などがよく設計されている、また、声がよく通っているようではあるが、学生目線としての話の速度についてが意見があった。また、専門用語についても解説が必要との意見があった。

② 授業内容・授業構成に関して（難易度・過不足など）

1学期に基本的に達成されているべきものなので、難易度を上げてよいのではないかと、走向板の使用や法面の使用についての意見があった。

③ 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して

2年生1学期までに習得されているはずなのに、身につけていない学生が多い。基本的なことは繰り返しやる必要があると感じた。習得がメインなので面白さに欠くが、三角測量では工夫されているようであった。

④ 学習活動、学生の参加どに関して（学生の質問など）

クリノメータの使い方を理解していない学生がいる。そもそも自分の立ち位置での方位（東西南北）すら理解できていない。ただし、学生は積極的に参加しているようであった。

⑤ 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

クリノメータの使い方などの基本的な事項については、前期で実施することが望ましい。2名で担当するので有効に対応することができるように工夫すべきである。また、実習目的を理解してもらうために、事前レクがあるが、実習前に具体的なイメージが持ちにくく、実習中は野外で声だけで説明することが難しい。繰り返しの説明が重要である。安全教育として、サンダルで参加している学生がいる。学内ではあるが安全意識が重要である。

⑥ 学生の授業アンケートについて

「自分自身が考えるこの授業の学習達成度」は、多くの学生が70%以上であった。また、「この実習の内容に興味をもてましたか」は、多くの学生が「もてた」、「非常にもてた」と答えたが、「もてなかった」と回答した学生も若干いた。話し方や教え方に関しては概ね良い回答であった。自由回答では、クリノメータの使い方に関するおさらいができてよかった、という意見が多い一方で、当日マスク着用であったこともあり、暑かった、という回答も目立った。

3) 授業研究会

日時：令和2年11月18日（水） 9:30～10:00

出席者：大和田、志村、坂口、阿部、川村、永嶋、大橋、辻、岩谷

研究会概要：

学生アンケートと授業観察者によるコメント（授業観察カード）をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。授業内容については、野外教育におけるやり方について、初年次、2年次において、どのような順番で実施すればよいかについて主として話し合われた。特に、振り返り学習の重要性について共通認識できたことは、今後の野外教育に活かされる事項であった。すなわち、重要な事柄は、複数回、時期を変えて実施するべきである、という認識である。そのほか、今後も継続的に改善の努力が必要である意見が出されるなど、多くの指摘と議論があり、次年度につながる有意義な場となった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

教育改善FD研修会（理学部・創成科学研究科（理学系））

日程：令和2年12月9日(水) 15:00～15:30

場所：理学部 22 番教室

講師：松岡敬興（山口大学教職センター）

参加者： 55 名（アンケート回収 46 名）

【研修内容】

最初、理学部西井淳教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター松岡敬興准教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」について説明があった。

まず高大接続改革について、高校教育、大学入試選抜、大学教育をひとつながりのものとしてとらえる。高大接続改革で、高校教育や高校の授業が大きく変わってきている。このため、大学の授業内容も「工夫と改善」に取り組み、変えて行く必要がある主旨であった。

まず、高大接続改革の説明があり、高大接続改革の必要性は、様々な社会の急速かつ大きな変化に応じて、高校教育、大学教育を通じて「生きる力」を育む事であり、特に「確かな学力」では学力の3要素をバランス良く育む事が必要であることが説明された。その後山口県内の高校教育・授業についての具体的に説明があった。さらに大学入試改革も行われることから一部の高校では普通の中に総合的な探究の時間を設け、理数科を探究科に改組し探究活動を充実している所もある。さらに大学・地域との連携し活動を高めていることについての具体的な説明があった。高校教育改革の結果、生徒の自主性が育ったことが表れてきている事、高大接続改革により現職高校教諭も授業の取組の意識に変化が生じ、高校の授業の変化が出てきている。さらに大学の授業を通して人を育て、人を育成する事になる。また山口大学に進学する生徒は基礎学力、読解力、地道に学習しようとする姿勢は身につけているとの高校から評価されている。学生は学びの要求、希望、願いを持って入学して来ているので、先生方は大学での授業について高大接続改革に沿った一層の授業作り及び授業改善に取り組むことで、大学在学中に学生がもっと成長すると考えられる。



【質疑応答・意見交換】

Q1: これまで約10年間の教育改革はどう評価されているのか？少子化のため学力が伴わない学生が入学することについての高大接続改革でもあった気がする。

A1: 教育改革に関わる評価については、再度、ご指摘の内容を確認のうえ、ご意見を拝聴させて頂きたい。

高大接続改革について、小学校、中学校では協働しながら授業が行われてるが、これまで高校ではこの部分はまだまだ十分ではなかった。一方大学では、既にこれまでこうした授業改善が進められてきた。今回の改革により高校においても協働で学ぶ視点が指摘されたことで、改善が進んでいる。

Q2: 高校でのアクティブラーニングの取り組みについて、理科とか数学の科目の中でするのか？それともアクティブラーニングのための授業するのか？

A2: 授業のプロセスの一部で行うものでもよい。一コマを通してアクティブラーニングをしているわけではない。アクティブラーニングは生徒一人一人が学びを深めるためのツールである。そこで授業の進め方が重要になる。学習の流れとして、1. まずは自分で考える時間を保障する 2. 次に協働によるグループ活動を通して話し合う 3. 話し合いで出た意見や考えを踏まえながら、自分の考えを再構築することによって学習が深まる。

Q3: グループ活動をしてるのですが、高校ではこんなにアクティブラーニングをしているのに大学生が話し合い（ディスカッション）に参加してくれない。大学生が参加しないのは理由があるのか？大学の授業の工夫が必要なのか。アクティブラーニングを進める方法について何か良い方法があるのか？

A3: 私見ではあるが、授業の進め方に問題があると考えます。指導者は、参加しようとしないう学生を見逃してグループ活動を始めると、育みたい資質・能力が身につかないし、参加もしない。例えば、学生にきちんと考える時間を設けず、すぐにグループ活動をさせると、学生は話し合いに参加してこない。グループ活動が機能するかどうかは、学生に対してガイダンスを通し授業の方針をきちんと説明し、学生が活動の目的を理解したうえで進められるのか否かに掛かっている。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	6.5%
良かった	22	47.8%
どちらとも言えない	12	26.1%
あまり良くなかった	6	13.0%
良くなかった	3	6.5%
無回答	0	0.0%
合計	46	100.0%

第3節 教育改善に関する活動

3.1 理学部の改組

理学部は数理科学科，物理・情報科学科，生物・化学科，地球圏システム科学科の4学科体制であるが，令和3年4月より生物・化学科が生物学科と化学科となり，5学科体制となる。また，令和3年度入学者より全学科でデータサイエンス教育の強化を図るようカリキュラム改正を行うことになった。今年度はこの改組およびカリキュラム改正に伴い，全学科のグラジュエーション・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，カリキュラム・マップの見直しを行った。

3.2 e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

理学部ではe-ラーニングの活用を2010年頃より積極的に取り組んできた。以下，学科単位での取り組み状況を報告する。

1) 数理科学科におけるe-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の科目でe-ラーニングを活用した。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科1年生（約55名）

活用方法：この授業では授業外学習時間の増加を狙ってe-ラーニングの活用を行っている。内容は高校レベルの数学の復習ができる内容の宿題を一定回数課すという形式である。成績の1割をe-ラーニングのテストの成績で評価している。多くの受講生は意欲的に取り組んでいて、自学自習をする上で有効であったと考えられる。その一方で、少数の受講生はe-ラーニングによる学習に手が付かなかったとの報告も受けている。そのような学生の意識を高めることが今後の課題である。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科2年生（約55名）

活用方法：この授業では、学生の自学自習の定着を促すためe-ラーニングを活用している。内容は1次年次の復習及び、2年次の専門科目で履修をしている微分積分学や線型代数学の内容の問題を2週間に1回解答させるというものである。成績の1割をe-ラーニングのテストの成績で評価しており、多くの受講生がe-ラーニングを積極的に活用し、自習に役立てている。一方で、1年次の数理科学入門セミナーと比べると意識の低い学生が若干多いように思われる。意識の低い受講生への対応が今後の課題として挙げられる。

2) 物理・情報科学科におけるe-ラーニングの活用事例

これまで物理・情報科学科では数学関連科目を中心とする以下の科目でe-learningシステムを活用してきた。

- ・「物理と情報のための基礎数学 I」
- ・「物理と情報のための基礎数学 II」
- ・「物理と情報のための応用数学 II」
- ・「ロジカルシンキング II」

- ・「計算モデル論 I」
- ・「計算モデル論演習 I」
- ・「計算モデル論 II」
- ・「計算モデル論演習 II」
- ・「数値解析」
- ・「プログラミング演習 I」
- ・「バイオインフォマティクス」
- ・「確率論」
- ・「情報ネットワーク」

これらの科目については今年度も宿題や自習のための小テスト配信，講義資料配布，出席管理，レポートの相互採点等を行うために必要な教材の改訂およびコンテンツの追加を行った。「物理と情報のための基礎数学 I、II」、「ロジカルシンキング」では講義時間の不足を補うため，e-learning システム上にビデオ講義を用意し，これを見ることを理解度確認のための小テストとともに宿題とする取り組みを継続している。また例年学生へのアンケート結果から授業で理解できなかった内容を e-learning を通して理解している学生も多く，また，e-learning の問題を解くことが授業の理解につながっていると回答する学生も多い。

これに加えて，R2 年度はコロナウィルスに対応するため，これまで e-learning を活用していなかった複数の科目でリモート教材が整備された。「電磁気学」「連続体物理学」「統計力学 I」「相対論」など多くの座学系講義において，配信した講義の動画や，あらかじめ作成したビデオ教材を復習用として繰り返し視聴可能としたことから，学生の反復学習が促進できた。また従来対面で行なっていた小テストや演習の回答を Moodle 経由で実施したことで，学生の取り組み方がより可視化され，例年以上に積極的な参加が促された。また課題提出や採点に関する学生-教員間，教員-TA 間の情報伝達もよりスムーズに行うことができた。さらに従来行なっている授業アンケートとは別に，学生側からより密に内容に関するフィードバックが得られたため，講義内容の改善につながる取り組みでもあった。

上記のような座学系講義に加えて，「物理学実験 II」などの学生実験においても，一回あたりの実験参加学生を減らす必要性が生じたことから，e-learning 上で実験進行にそって段階を分けた課題を与えることで学生あたりの実験時間の減少を補う取り組みを行なった。これらの個別課題の内容は最終的な実験レポートに必要な記述とリンクさせてあり，例年よりも細やかな指導と円滑なレポート作成につながったと言える。

さらに，本学科ではプログラミング課題のダウンロード，プログラムの作成・実行，課題提出，プログラムの自動採点を行える e-learning システムを構築してきた。今年度はこのシステムを利用した Python および機械学習の学習教材開発を行い，演習科目で活用した。

各種ビデオ教材の作成は大きな労力を伴うものであったが，教員側の e-learning 整備に関する技術が大きく向上し，今後の講義においても継続して活用できる教材が整備できた。今後はこれを活用して教員側の教育コストの抑制を図りつつ，適宜教材の保守/改訂を行なっていく予定である。

3.3 学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科では，「低年次導入教育の改革」の取り組みとして，平成 23 年度に 4 つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて，平成 24 年度には，1 年生，2 年生の 5 つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。その後，学力別クラス編成の改編を行い，平成 27 年度以降は，「物理と情報のための基礎数学 I、II、III」，および「力学 I」において，学生の学力に応じた授業を行っている。ただし，いずれの授業においても，学力別クラスに関係なく期末試験には同じ問

題を使用し、単位修得の基準も統一することで、評価に不公平はない。今年度も引き続き学力別クラス編成により授業を行った。このように、学力別クラス編成が定着している。今後も学生の習熟度を確認しながら、引き続き、改善を行っていく予定である。

3.4 学生授業評価

2020年度に理学部で開設している専門科目237科目のうち、学生授業評価対象科目は156科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは148科目で、実施率は94.8%であった。

下図は2020年度までの過去5年間における学生授業評価アンケートの年度推移である。図1は学生の授業外学習時間の年度推移、図2は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図3は学生の授業理解度についての年度推移、図4は学生の授業満足度に関する年度推移、図5は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。分野間で若干の差があるものの、学部全体としては、いずれの項目も高い数値で安定して推移している。ただし、2020年度前期はコロナ感染症対応のために講義がオンライン形式となったことが、授業外学習時間(図1)の増加および、理解度(図3)と満足度(図4)の低減の理由と考えられる。

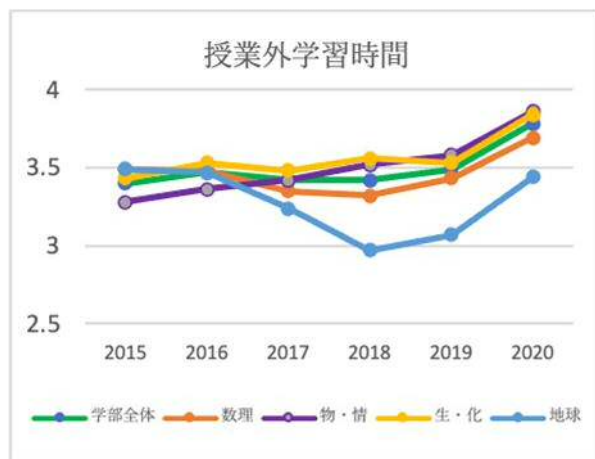


図1

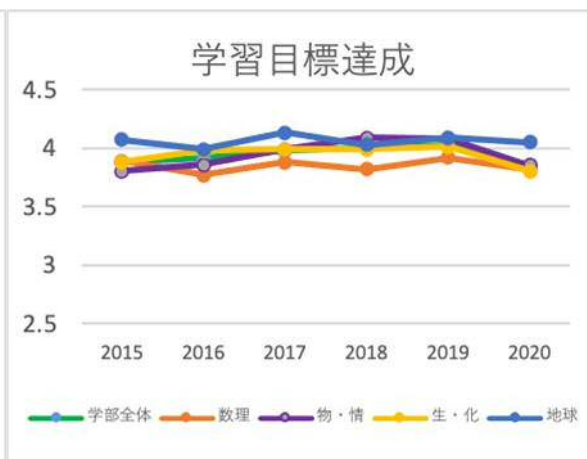


図2

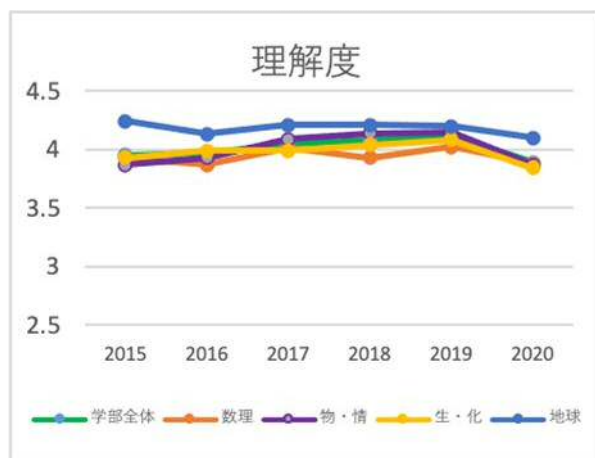


図3

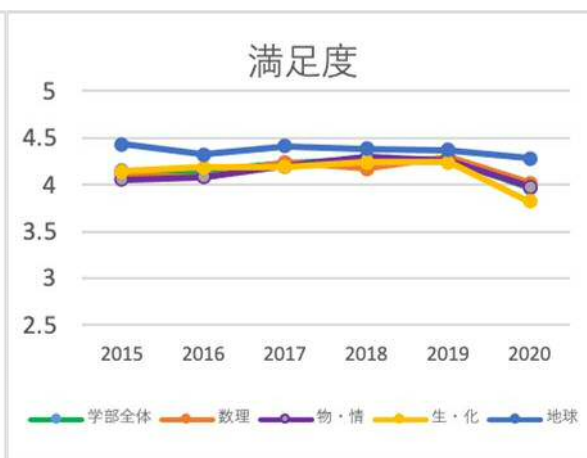


図4



図5

第4節 FD実施経費報告書

今年度は理学部ではFD実施経費を使用していない。

第5節 来年度の課題

理学部ではe-learning教材の開発を10年ほど前から行ってきた。今年度はコロナ禍により世界的規模でオンライン対応が必要となったが、これまでに蓄積してきたノウハウを共有することで、比較的早い時期にオンライン対応が可能であったように思われる。学生からのアンケートによるとオンライン対応を肯定的に受け止める意見も比較的多かった。ただし、オンライン化が講義内容の習得度や単位習得状況に及ぼす影響については来年度以降も調査を行うことで、オンライン化の利点と欠点を把握していくことが必要である。

また、この1年間で様々な講義や演習に関するオンライン教材が蓄積された。今後は従来型の講義に加えて蓄積した教材を活用することで、より効果的なハイブリッド型の教育方法を開発していくことも今後の重要な課題である。

第7章 医学部のFD活動

第1節 授業公開

1.医学科

実施なし

2.保健学科

開催日時：令和2年11月20日（金）14：30～15：40

開催場所：医明館 S2.3 教室

科目および対象学年：特別講義 看護学専攻3年

担当教員：看護学専攻 矢田浩紀講師

参加教員：28名

内容：「セルフケア理論に基づいた精神科看護の展開方法」



ドロセア・オレムのセルフケア理論を精神科看護分野で活用して構築されたオレム－アンダーウッド理論に基づき、看護過程の展開方法を講義していただいた。看護過程は、看護のどの分野でも展開しており、専門分野の特徴が際立つ内容となる。そのため、看護学専攻の教員参加者にとっては、大変関心の高い講義であった。Covid-19への対応から、密を避けるため、看護学生3年生は、教室を2つに分けて実施していることから、教員の参加はzoomとした。講師の矢田先生には、事前のリハーサルで、パソコンの配置や動画の活用による2つの教室とzoomでの音声確認など、zoomで参加する教員に対する配慮もしていただいた。意見や感想が例年より多く寄せられ、FDのテーマおよびコロナ禍のzoomでの参加に対しても関心が高かったものと考えられる。

アンケート結果（回収数22）

1. 所属

看護学専攻（16） 検査技術科学専攻（6）

2. 職名

教授（7） 准教授（5） 講師（5） 助教（3） 助手（2）

3. 講演内容

5. とても有意義だった（10） 4.（6） 3.（5） 2.（1）

感想・評価

- ・動画の使用は著作権などについて問題ないのか気になりました
- ・参考にさせていただく点が多くあり、自分の講義を振り返る良い機会となりました。
- ・精神看護学の看護過程ではあるが、基礎看護学をおさえながらされていたと思う。質問にもあったが、講義の位置づけが少しわかりにくかった。科目責任者である教授にぜひコメントいただきたかったので、残念でした。
- ・2年生から3年生の看護過程のステップを学ぶことができた。
- ・看護理論はそれぞれの領域で使用していく中で、精神看護学領域での活用や学生の積み重ねによる学習を知ることができた。講義・演習・実習の連動が大切なことを再認識しました。
- ・他分野の講義を拝聴することで、自分の分野との関連性や位置づけを考える機会となりました。動画など学生が理解しやすいコンテンツを取り入れていて、講義内容も先生自身の経験を踏ま

えて説明されており、簡潔でとてもわかりやすかったです。

- ・動画を取り入れるなど工夫がみられた。

4. 理解しやすさ

5. とても理解しやすかった (9) 4. (8) 3. (3) 2. (2)

意見

- ・講師の声がよく通るので、とても聞きやすかった。学生の理解度を確認しながら進められているのが良かったです。
- ・動画の選択と使うタイミングが良かった。学生目線に立った講義で、非常に参考になりました。スライドがシンプルでわかりやすく、話を集中して聞くことができました。

5. 講義時間

適切だった (22) 短かった (1) どちらともいえない (1)

意見

- ・70分授業としては充実した内容でしたが、本来であれば90分で学生通しのディスカッションもでき、振り返りができたのではないかと、思いました。私の授業でもいつも感じております。

6. 開催時期

適切だった (22)

7. 開催時間帯

適切だった (22)

8. zoomでの参加について

適切だった (17) どちらともいえない (5)

意見

- ・急な都合が入り学外から参加しましたが、このような場合でもzoomであれば参加しやすいので良かったです。本日はありがとうございました。
- ・カメラなので仕方ないが、学生の反応が判り難かった。しかしながら、設定いただいた委員の皆様、講義を担当された矢田先生、本当にありがとうございました。
- ・zoomは、時間の調整をして参加しやすいです。
- ・音声少し聞き辛い感じがしました。サブスライドは出さない方が、メインスライドが大きくとれて良いと思います。
- ・メモを取りながら落ち着いて聞くことができた。スライドをPCで見ることができたので、わかりやすかったです。
- ・対面とzoomのハイブリッドのため、途中トラブルがあり、大変だったと思います。パソコンのせいか声が聞き辛いところがありました。学生の様子があまり見えず残念でした。矢田先生、係の先生、お疲れ様でした。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 医学科

医学科主導FD研修会

(1) CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ

- 1) テーマ：CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ
- 2) 開催日時：令和2年4月10日

- 3) 実施時間/回数： 合計 3.00 時間 3.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：32 人
- 8) 講演 1： CBT 作問について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 3.00 時間
- 11) 主な内容： CBT 作問ブラッシュアップに関する説明とワークショップ

(2) 臨床実習入門実施担当者講習会

- 1) テーマ： 臨床実習入門実施についての説明会
- 2) 開催日時： 令和2年 7月 21日 18:00~19:00
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：28 人
- 8) 講演 1： 臨床実習入門について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 1.00 時間
- 11) 主な内容： 臨床実習入門ユニットの実施について

(3) プレ臨床実習テュートリアルチューター講習会

- 1) テーマ： プレ臨床実習テュートリアル実施についての説明会
- 2) 開催日時： 令和2年 11月 10日 18:00~
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：20 人
- 8) 講演 1： プレ臨床実習テュートリアルの実施について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 2.00 時間
- 11) 主な内容： 臨床実習入門ユニットの実施方法について

(4) シラバス講習会

- 1) テーマ： 医学科 シラバス説明会
- 2) 開催日時： 令和2年 12月 15日 17:00~18:00
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内

- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 教員 50人
- 8) 講演1：シラバスの更新について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：1.00時間
- 11) 主な内容：医学部シラバス(e-YUME)の更新について
ユニット責任者及びシラバス担当者への講習会

(5) CBT 試験問題作成講習会

- 1) テーマ：CBT 試験問題の作問
- 2) 開催日時：令和3年3月5日
- 3) 実施時間/回数：合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：38人
- 8) 講演1：CBT 作問について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：2.00時間
- 11) 主な内容：CBT 作問に関する説明

令和2年度 教育改善FD研修会（医学科）

日程：令和3年2月10日(水) 13:00～13:40

場所：医学部本館6F第1会議室

講師：霜川 正幸（教育学部附属教育実践総合センター教授）

参加者：38名（アンケート回収 24名）

【研修内容】

今年度の教育改善FD研修会のテーマは、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」である。その趣旨・目的として、2014年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあり、特に、2020年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であることを挙げている。



そこで、教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えている。

今回は、霜川 正幸 教育学部附属教育実践総合センター教授が講師を務め、高大接続改

革の必要性や高大接続で育む「学力の3要素」を解説しながら、変わりつつある高校教育や高校授業の実際について、山口県内の高校の事例を現場教員の声を交えながら紹介した。特に、萩高校の普通科・探究科の教育・学習内容を取り上げ、大学等との連携を強化しながら、探究学習が活発に行われていることが報告された。その中で、教師の教え方の変容や生徒の自主性の向上などが図られつつあり、大学の授業を通して同様に学生に考えさせる豊かな授業が求められる。

後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	20.8%
良かった	18	75.0%
どちらとも言えない	1	4.2%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

Q1 グループワークについては、誰とグループを組みかで違いが出てくるように感じているが、その点について、どのように考慮すべきか。

A1 グループを入れ替えたり、教員が適度に介入したりしながら、学生の主体性を育て上げていく姿勢が大事だと考えている。

Q2 高校での授業が変化しつつある状況は良く理解できたが、アクティブ・ラーニングを通じた学修の評価法はどのようになっているのか。

A2 大学教育においても、学生の自己評価・他者評価、さらには、グループ評価と全体評価などを織り交ぜながら、学修を評価しようとしているが、具体的に数値化しようとするのが難しい面があると感じている。



2. 保健学科

保健学科主導 FD 研修会

令和2年度 教育改善 FD 研修会 (医学部保健学科)

指定研修：教育改善 FD

開催日程：令和2年12月2日(水) [小串地区] 13:00~13:30

場所：医学部本館6階第1会議室

講師：生寫 亜樹子 (教育学部附属教育実践総合センター准教授)

参加者：27名 (アンケート回収 26名)

【研修内容】

今年度の教育改善 FD 研修会のテーマは、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」である。その趣旨・目的として、2014年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあり、特に、2020年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であることを挙げている。

そこで、教育改善 FD 研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年

次教育・専門教育の充実について考えている。

今回は、生寫 亜樹子 教育学部附属教育実践総合センター准教授が講師を務め、高大接続改革の必要性や高大接続で育む「学力の3要素」を解説しながら、変わりつつある高校教育や高校授業の実際について、山口県内の高校の事例を現場教員の声を交えながら紹介した。特に、萩高校の普通科・探究科の教育・学習内容を取り上げ、大学等との連携を強化しながら、探究学習が活発に行われていることが報告された。その中で、教師の教え方の変容や生徒の自主性の向上などが図られつつあり、大学の授業を通して同様に学生に考えさせる豊かな授業が求められる。

後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

Q1 高校教育でのアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の割合はどの程度なのか。

A1 総合的な探究の時間が導入されたほか、多くの教科においてアクティブ・ラーニングが浸透しつつある。

Q2 高校教育における生徒のアクティブ・ラーニングの満足度はどのような状況なのか

A2 具体的な情報を持ち合わせていないが、一定の満足度が得られていると考えたい。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	9	34.6%
良かった	15	57.7%
どちらとも言えない	2	7.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

Q3 保健学科の学生を見ていると、入学当初の1年生の時期には発言力が素晴らしいが、2年生以降にやや内向きになる傾向があるように感じている。この状況について、どのように考えたらよいか。

A3 教育学部では、出来る限り、学生に授業に深く関与するような授業を工夫しており、学年が上がるに従い、授業中の学生参画について更に意識した授業設計が必要なように感じる。

第1回保健学科 FD 研修会

開催日時：令和3年2月19日（金） 15:00～16:00

開催場所：医修館 第2講義室

講師：保健学専攻長、学科長 野垣宏教授

参加教員：23名

テーマ：「サービス、兼業、利益・責務相反、およびハラスメントについて」

近年、特に大学で勤務する教員としてサービス規程、兼業や利益相反に関する規定を遵守することが求められている。さらに様々なハラスメントについての問題が顕在化しており、大学教員としての倫理的問題に関する課題として重要な内容である。特に兼業については意識していないところで行われている事例があり、とても興味深い内容であった。また担当課の職員も同席され、兼業や利益相反に関する内容について質疑応答がなされた。



アンケート結果（回収数 23）

1. 所属

看護学専攻（12） 検査技術科学専攻（11）

2. 職名

教授 (6) 准教授 (4) 講師 (3) 助教 (8) 助手 (2)

3. 講演内容

5. とても有意義だった (16) 4. (5) 3. (2)

感想・評価

- ・兼業について把握しておくべきと感じた。ハラスメントに関しては学生に対してもっと気を配るべきかと感じた。
- ・学会の評議員や査読のことは兼業扱いになることを知らなかったため。
- ・兼業は、予想以上に範囲が広いことがわかり、それを教員で共有できて良かった。また、ハラスメント防止については、野垣先生から当大学の現状を聞くことで、よりリアルに感じ有意義だった。
- ・兼業についてあまり理解していなかったので勉強になりました。
- ・詳しく聞く機会のない内容で、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・裁量労働であっても守らなければならない規定があることがわかった。査読はボランティアで行ってきたが、兼業として扱われ時間の制限があるからと断ることも難しい。
- ・ハラスメントについては、今後意識を高める必要性を感じている。
- ・野垣先生が、受講者側の目線になり、共感しながら話して下さったので、とても理解しやすかったです。

4. 理解しやすさ

5. とても理解しやすかった (15) 4. (7) 3. (1)

意見

- ・兼業についてファジーな部分があるので、事務から系統立てた説明が定期的にあると良いと感じました。
- ・全体を通してとても理解しやすかったです。
ただし、私はやっとおおまかな年間の大学のカリキュラムや業務の流れが理解できたところであり、本務以外のお仕事である兼業については未知の世界です。そのため、大変理解しやすい講義ではあったのですが、兼業に関してしっかりとイメージができませんでした。すみません。
兼業は『報酬がある本務以外のお仕事』というイメージでしたが、今日の講義を聞いて色々な兼業があることが分かったので、今後『これは本務以外のお仕事かもしれない・・・』と頭をよぎった時には、職員係に相談させていただこうと思います。

5. 講義時間

適切だった (20) 短かった (1) 長かった (0) どちらともいえない (2)

意見

- ・集中力が途切れない丁度いい時間だった。

6. 開催時期

適切だった (20) どちらとも言えない (3) 不適切だった (0)

意見

- ・年度初めがいいのかもしれないです。

7. 開催時間帯

適切だった (21) どちらとも言えない (2) 不適切であった (0)

第3節 教育改善に関する活動

1. 医学科

(1) 学生授業評価・教員授業自己評価

医学科では、平成 30 年 4 月より、学生が eYUME を使用して入力した診療科（部）ごとの臨床実習評価結果を、即時に該当診療科に所属する全ての教員が閲覧可能とし、診療科の教員は、次のクールでの臨床実習の参考にし、より質の高い臨床実習の実施に活用しているところである。

更に、平成 31 年 4 月より、ユニット毎に設定した山口大学独自の“到達目標”により、学生はユニット終了後に、“到達目標”をどの程度身に付けることができたかを eYUME 上で自己評価する取り組みを開始した（紙媒体のユニット学生振り返り評価票は廃止）。ユニット責任者及びシラバス責任者はその結果を閲覧することができ、形成的評価を行うと同時に、次回のユニットの向上に活用することが可能となる。ユニットの 1 つである「医療概論・倫理序説」の到達目標は以下のとおり（図 1）。

目標
1.主題
1.医学・医療の倫理問題全般を理解する。 2.医学・医療の各領域の倫理問題に対する現在の考え方や解決のあり方について理解する。 3.医療概論全般について理解する。
2.到達目標
1.医療倫理の歴史的な流れを概説できる。 2.臨床倫理の歴史的な流れを概説できる。 3.患者の基本的権利を概説できる。 4.患者の自己決定権を概説できる。 5.臨床諸領域における代表的な倫理問題を概説できる。 6.倫理問題に対する解決法を4分割表を用いて概説できる。 7.キャリア形成のあり方について概説できる。

図 1 「医療概論・倫理序説」の到達目標

(2) 医学教育分野別評価の受審

令和元年 10 月 28 日～11 月 1 日に、日本医学教育評価機構による評価を受審し、令和 2 年 8 月から国際基準教育校として認定された。今後は 7 年後の再受審に向けて様々な教育改善に関する活動を実施していく予定であり、その準備を開始した。

(3) 学修成果基盤型教育の推進

平成 27 年度の医学科カリキュラム・ポリシー作成より、学修成果基盤型教育を推進してきた。令和 2 年度は「医学教育モデル・コア・コンピテンシーに基づくカリキュラム強化策」により、学修成果基盤型教育を更に推進している。

(4) マイルストーンとしての到達目標の充実

平成 31 年 4 月より、学修成果基盤型教育の充実と学修成果の確認のため、医学専門群別にマイルストーン（図 2）として到達目標を設定し、その周知や強化を行ってきた。

	医学専門 I 群	医学専門 II 群	医学専門 III 群	医学専門 IV 群・V 群
群の特徴	医学・医療の基礎となる基礎医学を、臓器・系統別に編成された「コース・ユニット制」に基づく少人数グループで学修する。講義・実習、少人数グループ学修等により、医学・医療の基礎となる基礎医学知識を身に付ける。	基礎医学から臨床医学への発展段階として、社会医学や臨床医学総論を含めた知識の水平的統合を行う。また研究活動を通じて科学的探求力と自己開発力の涵養を行う。	臓器・疾患別に編成されたユニット講義により臨床医学各論を体系的に学ぶとともに、医療法学、医療安全、多職種連携、基本的臨床技能を学修し、臨床実習前段階としての基本的能力を身につける。	医学部附属病院、教育関連病院や地域の医療機関での診療参加型臨床実習を通じて、知識・技能・態度など医師として求められる能力の涵養と発展を図る。
	基礎	基礎	発展	応用
DP1: 医療基盤力	生命現象の基本、人体の基本的構造と機能、分子細胞生理学等の基礎医学知識や、診療の基礎となる臨床病理学知識を有し、実習を通じて問題解決に応用することができる。	基礎医学知識の学修を進めるとともに、基礎医学コースの最終段階として統合医学「リファル」等の演習を通じて知識の水平的統合を行い、問題解決に応用できる。	基礎医学と社会医学の知識を基盤として、臨床医学を系統的に学修することで、疾病について総合的に理解し、病態や疾病の理解や臨床推論に応用することができる。	診療参加型臨床実習を通じ、学修した基礎医学・臨床医学知識を応用し、臨床推論法・基本的診療技能などを実践できる。
DP2: 地域・国際対応力	地域の健康・医療・福祉・介護に関する社会医学知識を身に付けている。	高度自己学修コースや社会医学活動を通じて、地域の保健医療を理解・実践できる。社会・自然科学と関連する医学知識を広く学び、社会の変化や国際化に対応する能力を身に付けている。	疾病に関する疫学・予防・医療体制等、地域医療や国際医療に関する知識を有し、地域保健活動を実践することができる。	地域医療実習や学外実習を通じ、地域医療・地域保健活動やプライマリケアを実践できる。
DP3: 医療プロフェッショナリズム	医療倫理に関する基本的な知識を修得するとともに、医療人としての自覚をもった対応ができる。自律した学修姿勢を育み、解剖・生理等の実習を謙虚と畏敬の念を持って取り組むことができる。	研究活動や社会医学活動を通じて、教養を高めるとともに、研究倫理やセルフマネジメントなど医師としての高い倫理性を身に付けている。	医療に関する法学や医療安全・臨床倫理に関する知識と考え方を身につけ、模擬患者や事例検討、シミュレーション学修において医師としての対応を実践することができる。	医師としての職業を自覚し、患者・家族および医療スタッフ等と良好な関係を築くことができる。医療安全を心がけて実習を行うことができる。キャリア教育や指導医とのディスカッションを通じて、自身の目標と将来像を表現できる。
DP4: チーム医療とコミュニケーション能力	実習やグループ学修において、周囲と連携して役割分担と情報共有を行い、協調・共働するチーム力を身に付けている。	研究活動や社会医学活動を通じて、研究者や医療従事者、社会と深く関わり、円滑なコミュニケーションと共働ができる。機会があれば学外や海外での活動にも参加できる。	医療安全・行動医学・多職種連携に関連するユニットで、医師としての責務を自覚し周囲と共働することができる。少グループで共働して事例検討やシミュレーション教育に取り組むことができる。	指導に関わる医師や看護スタッフ等の多職種医療職との連携の中で、医師としての対応やコミュニケーション、チーム医療を実践できる。
DP5: 自己開発力	医学・社会の変化をにらみながら、積極的に最新の情報を収集・分析し、基礎医学を中心として医学の修得に積極的に取り組むことができる。	研究活動の中で、自分自身の知識、技術や態度を客観的に評価し、その向上に向けた努力をする能力を身に付けている。	医療を取り巻く変化を踏まえ、最新情報を収集・分析し、臨床医学を中心とした医学の修得に積極的に取り組むことができる。	臨床実習を通じて医学の修得に積極的に取り組むとともに、臨床医学・生命科学の先端分野に触れ、継続的に学術的視野の拡大に努めることができる。
DP6: 科学的探究力	自然科学への探究心と論理的思考力を持ち、基礎医学知識の修得と実習手技を実践できる。	人々の健康と疾病の問題に対して幅広い学術的視野を持ち、批判的な研究活動や社会活動を行うことができる。その成果を論理的に理解し、論文にまとめるとともに、口頭発表できる。	基礎医学と臨床医学を高度統合して課題に取り組むことができる。臨床推論を体験し、問題点の発見と考察、解決のプロセスを学修する。また成果をまとめ、発表できる。	臨床情報を臨床医学・基礎医学・社会医学等の知識をもとに論理的に考察し解決に導くことができる力を養う。成果をレポートにまとめ、口頭発表できる。
DP7: 総合的診療能力	将来の医師としてのコミュニケーション能力を有し、医療・介護に関する見学実習や保健活動を安全に実践できる。	実践的診療の基礎となる基礎医学知識を応用しつつ、患者安全と全人的視点をもって実習や社会活動を行うことができる。	少人数グループで課題解決型学修、実技実習、シミュレーション実習を行い、臨床実習前段階としての医学知識の統合と臨床推論の演習、基本的診療技能の修得を行う。	診療チームの一員として、自ら医療面接や身体診察、基本的検査によって情報を収集し、統合された知識と技能に基づいて問題点を抽出し、解決に向けて診断や治療の計画を立案・実行することができる。

図 2 医学専門群別マイルストーン

(5) eYUME 機能の周知と活用の促進

平成 30 年度より、eYUME に簡単に HP の編集を行うことができる CMS（content management system）を搭載した。各講義を担当する教員が自身の ID とパスワードで学内からログインし、授業内容詳細等を適宜更新することで、学生が自己学修を行うための情報を常に最新にすることが可能となった。3 年目となる令和 2 年度も eYUME 機能の周知と更なる活用を促した。

*eYUME の定義：山口大学医学教育総合電子システム（electronic system of Yamaguchi University Medical Education）の頭文字によるネーミングであり、山口大学医学部医学科で行われる全ての授業内容を電子化したシラバスで、平成 13 年より Web サイト上に公開している。

(6) 臨床実習におけるマイルストーン評価の解析

平成 31 年 1 月、学生に eYUME 上で、“臨床実習で医学生として信頼され任される役割（EPA）”、“基本的臨床手技”、“臨床推論（実習で経験した症例や臨床推論を学んだ疾患名を記録）”を自己評価させることで、各学生が最終的な到達点の中でどの程度修得しているかを把握させる臨床実習マイルストーンの評価を本格的に開始した。令和 2 年度も引き続き、電子化された臨床実習マイルストーンデータを解析し、学生が経験しにくい技能や臨床推論を把握・分析し、各診療科へフィードバックした。（コロナ禍の為に完全なデータ収集とはならなかった）

(7) YU CoB CuS の実質化

医学科では、学修成果基盤型教育を更に推進するため、大学全体の開始より1年早く、令和元年度より、DPに基づく人材育成の達成度を定量的に可視化する YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) を導入した。学修プロセスを可視化することにより、学生自身の振り返りを促進するとともに、教員による学修プロセスの把握を通じた学修指導を可能とし、教育・学修の質的転換に繋げている。具体的には、ユニット毎に DP への貢献度を数値化 (1 単位あたりの合計値を 100 とする) し、成績によって係数を掛け (秀: $\times 1.4$ 、優: $\times 1.2$ 、良: $\times 1.0$ 、可: $\times 0.8$)、学生毎にレーダーチャート化 (図3) することで、学生は成績表とともに、目標が十分に達成できている DP、不十分な DP が一目瞭然に把握できるようにしている。令和2年度も引き続き、2年生～4年生に適用し、オリエンテーション等を通じ学生に周知を行っている。

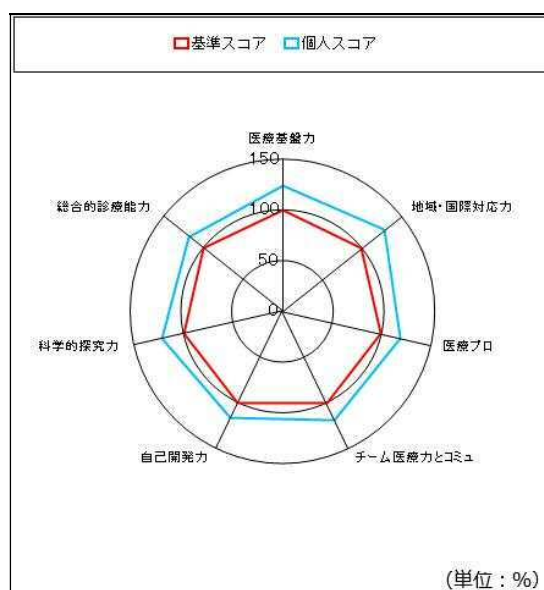


図3 学生毎のレーダーチャート (一例)

* YU CoB CuS の定義: 山口大学能力基盤型カリキュラムシステム (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) の略。ディプロマ・ポリシーとして設定した卒業時に修得しているべき能力に基づき、その各々の能力をどの程度修得しているかを定量的に示すもの。カリキュラムマップに基づき算定する。

(8) 学生・教職員教育改善委員会の設置

令和元年10月に受審した医学教育分野別評価実地調査で、“学生に関する諸事項を審議する委員会に学生が参画し、適切に議論に加わるべき”との講評をいただいた。

当講評を受け、毎年定期的に行われている“学生自治会との懇談会”を、規則上に位置付けられた正式な委員会 (図4) とし、令和2年度も学生・教職員教育改善委員会において協議された学生からの意見・要望等を議事要旨にまとめ医学科会議に報告し、組織的に医学教育の改善に取り組んだ。

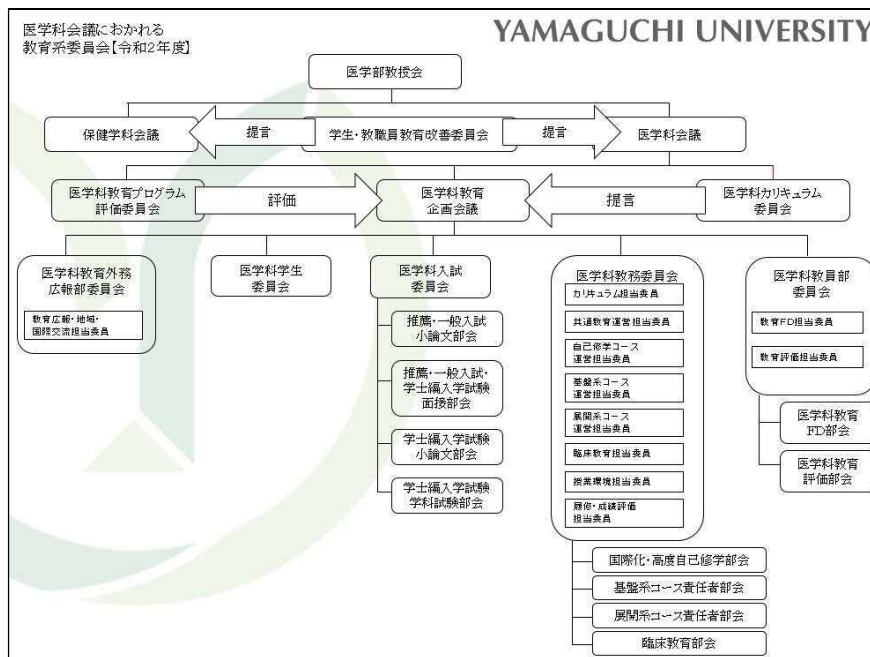


図4 医学科会議における教育系委員会

(9) FD 出席の義務化

令和元年10月に受審した医学教育分野別評価実地調査で、“新任教員を含め、教員に対する研修を充実すべき”との講評をいただいた。

当講評を受け、医学科教育FD部会で、“FD参加を年度に1回義務づける”、“参加についてはeYUMEのFD動画を見るeラーニング形式でも「可」とする”ことを協議した。令和2年度より実施予定であり、出席確認機能等を搭載したeyumeの改修を行ったが、コロナ禍の為にFD講習会そのものの開催が有意義に出来なかった。

(10) 担任制の実質化（ポートフォリオシステムの開発）

医学科では、平成29年度より担任制を導入しており、令和2年度時点で、2年生～5年生の全学生を39講座で分担し、面談等を実施することとしている。また、修学支援システムの“レポート機能”を使用して、年度初めに学生にポートフォリオ・シートを記入させている。

この2つを効率的に行うため、令和元年度学長戦略経費で、eYUMEにポートフォリオ機能を搭載した。令和2年度から、担任講座の教員が、eYUME上で学生が記入したポートフォリオ・シートを確認し、学生の面談等を行うことを開始した。

(11) オンライン（web）講義の実施

新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン（web）講義を余儀なくされる場面が多岐にわたった。このため、LMSとして本学で整備された遠隔講義ポータル（zoom、webex、eYUM、SLeYUSDL、動画配信サイト、Moodle2）を使用することとなり、円滑な講義の実施のため、教員および学生を対象とした講義および受講のマニュアルを作成し、周知した。

実際にオンライン上での学生発表や、挙手・チャットシステムによる質問募集を行い、対面講義に劣らない自発的なプレゼンテーションや積極的な質疑応答を確保することができた。

2. 保健学科

学生へは教務委員が、担任、科目担当教員、学生委員と連携して学習活動や履修に関する学生の相談に応じている。進路や、学習状況についてもアンケートを実施し、さらに年1回程度は面談を行っている。

医学科・保健学科ともに国家試験の合格率で学部教育の充実が評価されるため、医学科においては国家試験対応後援会を開催し、保健学科看護学専攻では国家試験対策委員とゼミ担当教員が連携して模試結果をもとに4年生の個別指導を行った。保健学科検査技術科学専攻では、国家試験対策講義を実施した。

保健学科検査技術学専攻・助教の天津山賢一郎は授業科目：物理学実験 Bにおいて令和2年度 AL ベストティーチャー賞を表彰された。

第4節 FD実施経費報告書

今年度はコロナ禍のため学外からの講師を呼ぶことが出来なかったため実施経費はなかった。

第5節 来年度の課題

1. 医学科

(1) 医学教育分野別評価の受審講評に基づいた改善

令和元年10月28日～11月1日に医学教育分野別評価を受審した。実地調査で改善すべき、あるいは改善が望ましいと講評・指摘を受けた領域については、実現可能なところから実施改善していく。

(2) 教務委員会と入試委員会および IR 部門の協働による受験生・入学生の質確保

令和2年度入試から実施された地域枠の入学定員の増員が、今後どのような影響をもたらすのか等、医学教育センターIR部門とも協働調査していく。また、引き続き教務委員会と入試委員会の協働による受験生・入学生の質確保の細やかなフォローを行う。それと同時に入学定員減についての対応も本格的に開始していく。さらに、大学入試制度の変革に対応するための検討を引き続き行う。

(3) 学生委員会による担任制導入など学生支援の充実化

平成29年度より開始された担任制も4年目となる。令和2年度から実施された eYUME でのポートフォリオシステムの運用を通じて、担任制の充実化・実質化をさらに進めていく。

(4) 教育主任制度の更なる充実によるカリキュラム改革の普及

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する各講座教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的としている。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗ったものと思われる。令和3年度は、今まで以上にこの制度の更なる活用により、より充実した内容の教育を目指していく。また、令和元年度は臨床実習後 OSCE が開始された。臨床実習前 OSCE と併せ教員の負担は大きくなるばかりであるが、学生教育の必要性・重要性の理解を深めても

らい、医学教育への参加をこれまで以上に促していく。

(5) 学外での地域医療実習の更なる充実

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきている。そこで、6年生を対象に山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心とした診療参加型地域医療臨床実習を、平成25年度より導入している。引き続き、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図る。

(6) 成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充

個別試験で成績不良であった4年生と卒業留年学生が対象であり、個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論をさらに加速させる。今後の検討課題として、低学年時の成績不振者に対する個別指導体制の構築についても検討していく。

(7) 臨床実習の充実化、mini-CEXの普及、臨床実習後OSCE

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの一部をeYUME上で行えるように改訂を行っており、運用等の問題点を整理する。また、mini-CEXも5年目になり、主要な診療科での実施をさらに進めるとともに、問題点などについても整理していく。

また、卒業時の技能・態度の評価として、臨床実習後OSCEが令和2年度から全国正式実施となった。これに伴う人員や設備の運用を的確に行い、円滑な試験の実施に取り組んでいく。

(8) eYUMEの改定とe-learningの普及

eYUMEの機能強化を引き続行っていく。またeYUMEを用いた動画配信等により、学生・教員が自由な時間に学習を行うことができるe-learningのシステムを整備していく。

2. 保健学科

保健学科では、適正な授業評価を心がけながら、医療の変化や国際化に対応でき、医療チームの一員として活躍できるとともに地域医療の向上に貢献できる人材の育成を教育目標としており、この視点から現在の教育を更に充実させる予定である。看護学専攻ではカリキュラム改正の作業を開始予定もあり、2021年度は教育改善の観点からとくに重要な位置づけとなる年となる。国家試験については、今後とも高い合格率を維持するとともに、キャリア教育等の充実により進路への意識を高め、学生がスムーズに社会人として医療人として活躍できる環境を整えていきたい。加えて、大学院への進学者の増加についても取り組んでいきたい。

(1) 授業外学習時間の確保および適正な成績評価

保健学科ではFD研修で学んだシラバスの充実を推進し、授業外学習時間の確保に務めたい。また授業評価については、学科内シラバスにおいて、成績入力により学生成績がヒストグラム化され瞬時に見えるため、教官は自分の行った試験の分布がすぐに把握でき、適正な評価を行う上で役に立っている。今後もこのシステムの利用を続けていきたい。

(2) 国際化

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通し、より国際的な人材育成のための努力を行っていきたい。2021年度は、山口大学が APHAL のホスト校になることが決定しており、学生に対する英会話能力等の向上を促す取り組みを充実させる必要がある。

(3) 国家試験対策

看護師・臨床検査技師ともに 100%近い国家試験の合格率を継続して達成している。本学において、講義・実習・卒業研究をはじめとする多くの研究活動をこなしながら、高い合格率を達成していることを内外に強くアピールする必要がある。さらに高い合格率を維持していくために常に教育内容のブラッシュアップをはかっていく必要がある。

(4) 大学院教育

在学生の研究マインドを高め大学院への進学を促すとともに、広く社会に向けて医学系研究科保健学専攻の魅力を伝えることが必要である。この具体策については、現在検討中である。

第8章 工学部のFD活動

第1節 学部・研究科主催FD研修会

1. 教育改善FD研修会

以下の要領で教育改善FD研修会を実施した。

日 程：令和2年11月11日(水) 14:10～14:40

場 所：オンライン（Webex 使用）

講 師：和泉研二教授（教育学部教職センター）

参加者：74名

【研修内容】

最初に、工学部 三上真人教授から教育改善FD研修会の主旨説明および講師の紹介があった。その後、教育学部教職センター副センター長 和泉研二教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・授業改善の実際～」について説明があった。

具体的な内容としては、まず、高大接続改革における大学の問題について説明があった。高大接続改革で高等学校の教育や授業が大きく変化しつつあり、学生たちの学びのスタイルやニーズが変わってきているため、大学側は高等学校がどのような教育改革を行っているのか理解することは、学生理解や人材育成の面から重要であること、また、入学者の期待や学生の変化にマッチするような教育改善が必要であることが説明された。

つづいて、高大接続改革の議論、検討の流れが確認され、現在、学校教育は今後の予見困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育むことが求められており、高校教育は「学力の3要素」を育成する場、大学入学者選抜は高校まで身に付けた「学力の3要素」を多面的に評価する場、大学教育は高校までに培った「学力の3要素」をさらに向上・発展させ、社会に送り出す場という人材育成の流れを作ることが重要であると説明された。

その後、大学の教育改善は高校教育の現状を知ることが重要という視点から、教職センターの霜川教授が中心に山口県の進学校に対して聞き取り調査を実施した結果について具体的な報告があった。

「学力の3要素」の育成のために、高等学校は授業改善と教員の指導力向上が進められていること、授業は主体的・能動的な学びが求められティーチングからラーニングに変化してきていること、主体的学びを実現するために選択科目が増え、少人数指導や習熟度別指導が導入されていること、授業をとおして大学と連携していることなど、探求的学びの具体的な事例が宇部高校、萩高校を中心に紹介された。

聞き取り調査の結果、現在の高校生はアクティブラーニングには慣れていること、教員の側が生徒に活動のねらい、活動のプロセス、到達点を伝えて自覚させることで学習が深まっていくこと、探求的学びの教員研修が始まっているが学校全体や教員個人の意識や取組みには大きな差があること、ただしこの度聞き取り調査を行った山口県の進学校においては意識が高まっていることの説明があった。最後に、高校において主体的・能動的な活動をしてきたにもかかわらず、大学に入学して授業に対する意識や意欲が乏しく見える学生が少なからずいるため、今後、大学教育において高校での学びをさらに発展させることが大学の使命であることが説明された。

説明終了後、「主体的・能動的学びの素地をもって入学する学生をどのように受けるのか、受け入れた後の教育体制をどのように整えるのか、具体的な案があればお聞きしたい」という質問があった。これに対し、今回の教育改革をふまえて、大学での学びのスタートを全学共通でどのようにとらえていくのかという点をもう一度、大学全体で議論していく必要があることが述べられた。

【アンケート結果】

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

	人数	割合 (%)
非常に良かった	6	22.2%
良かった	12	44.4%
どちらとも言えない	5	18.5%
あまり良くなかった	3	11.1%
良くなかった	1	3.7%
無回答	0	0.0%
合計	27	100.0%

2. 講師派遣型アラカルト FD 研修会

「講師派遣型アラカルト FD 研修会」について、大学教育センターに講師派遣を依頼したが、講師の都合と工学部の都合とが合わず、開催を見合わせた。

3. 自主的 FD 研修会

新型コロナウイルスへの対応により、工学部では令和元年5月からオンライン講義が開始された。従来の対面講義と同等以上の講義をオンラインで提供するため、工学部教員有志によりオンライン講義勉強会が以下のとおり開催された。

各勉強会はオンラインでライブ配信され、双方向に質疑応答が活発になされるとともに、Moodleに工学系教職員がユーザー登録されたオンライン講義勉強会のページを設け、そこに勉強会資料および動画が掲載され、オンデマンド視聴も可能としている。

第1回 Zoom 勉強会

日時：令和2年4月10日（金）17時から

場所：C11講義室, Zoom 配信

講師：中正和久准教授（知能情報工学科）

内容：・競合システムとの比較

- ・利用方法
- ・機能説明
- ・設定
- ・システム構成例
- ・運用例

・課題

第2回 オンデマンド勉強会

日時：令和2年4月15日（水）13時10分から

場所：C11講義室, Zoom 配信

講師：鳴海孝之准教授（工学基礎教育）

内容：・オンライン講義の概要

・同時双方向型とオンデマンド型の比較

・オンライン教材の紹介 ①無観客講義の撮影

②スライドショーを動画として保存

③手書きノートの撮影

④ナレーションのみの録音

第3回 オンライン講義勉強会

日時：令和2年4月27日（月）13時00分から

場所：C11講義室, Zoom 配信

講師：鳴海孝之准教授（工学基礎教育）：オンデマンド講義準備のノウハウ

内容：・構成・動画作成前に意識しておくべきこと

容量と画質

動画配信のためのサービス

作成する動画の目安

・PowerPoint での教材作成

準備と録画

画質調整

講師：中正和久准教授（知能情報工学科）：双方向講義用の WebEx の使い方

内容：・製品構成

・機能比較

・機能説明

・特別支援プログラム

第2節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

① Yu CoB CuS の導入

令和元年度（2019年度）から、一部の学科において YU CoB CuS を導入し、学習成果を可視化できるようにした。

② 工学部サロン

平成18年度（2006年度）から、吉田キャンパスの研究1号館の1階に「工学部サロン」を開設している。「工学部サロン」では工学部1年生のいろいろな相談にいつでも対応できるように、工学部教員のOBが待機している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになっている。令和2年度には新型コロナウイルス感染症への対応により、オ

オンラインで実施した。

③ 工学教育研究センター

先駆的な教育実践活動について情報を収集・分析して新しい企画を提案し、教育実践活動をとりまとめ、学内外に公表するための工学部付属のセンターである。

平成 25 年度（2013 年度）から常盤キャンパスに「グローバル技術者養成センター」が設置され、工学部と理工学研究科（平成 28 年度より創成科学研究科）のグローバル化教育プログラムの開発や、教職員に対する SD 研修プログラムの開発とその実施が行われ、工学部のグローバル教育力の向上のための体制を整備する取り組みが推し進められた。同センターは、平成 29 年度（2017 年度）から、工学教育研究センター内に組織変更され、引き続き学生の海外留学の支援を実施している。

④ ステップアップノートの配布

平成 23 年度（2011 年度）から、工学部の新 1 年生に対して「ステップアップノート」の配布を行っており、工学部学生のポートフォリオとして利用している。

第 3 節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。優秀授業の選考は、「学生授業評価表彰実施要綱」（平成 19 年制定、平成 25 年、平成 29 年、令和 2 年改正）に従って実施しており、その概要は以下の通りである。

まず、学生授業評価の質問項目の中から下記の 3 項目の合計点（Y 値）を出す。

- 項目 2：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？**
項目 9：あなたは授業の内容を理解しましたか？
（実習・演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？）
項目 10：この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

次に、授業評価アンケート回答数と合計点（Y 値）の相関を考慮した補正式から補正合計点（Z 値）を算出する。この補正合計点（Z 値）を評点とし、これにより学部では全開講科目数の 10%、大学院では 20%を「優秀授業」としている。ただし、授業評価アンケート回答数が 10 未満の授業は正確な評価が期待できないとして「優秀授業」の対象から除いている。

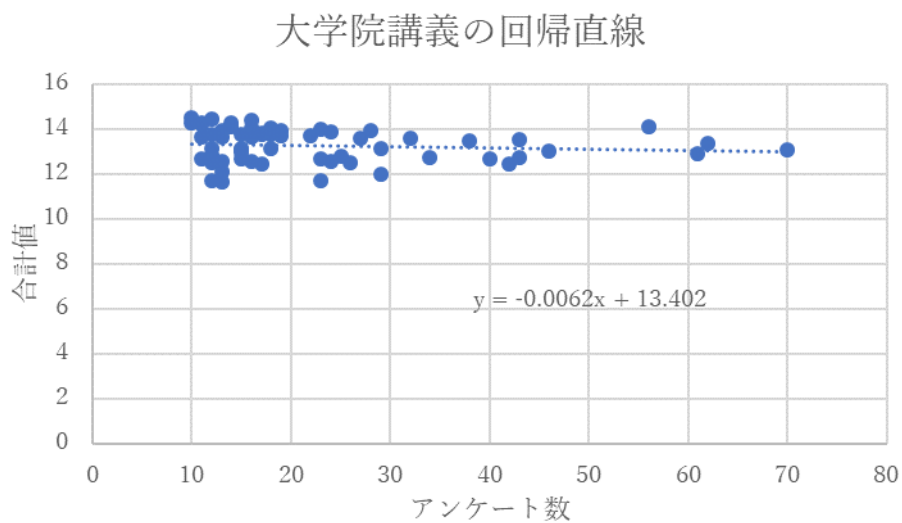
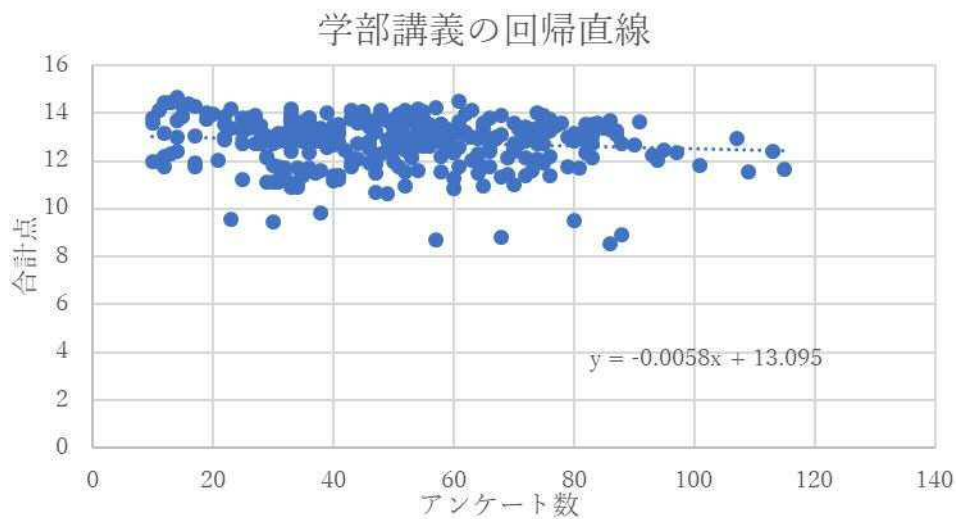
学部の「優秀授業」に関しては、昨年度、「学生授業評価表彰実施要綱」を一部改正し、学科間のバランスを考慮し、「各学科の補正合計点の上位 3 授業」とそれら以外の「学部全体での補正合計点の上位授業」を「優秀授業」とするように選考方法を変更した。また、大学院に関しては、これまでと同様、研究科全体での補正合計点の上位 20%の授業を「優秀授業」としている。

また、学部では学部全体と各学科の補正合計点（Z 値）の最高点の授業を、大学院では各専攻の補正合計点の最高点の授業を「最優秀授業」として、これらの授業の担当教員を表彰している。

令和元年度（2019 年度）開講の工学部と大学院博士前期課程（工学系）の授業について、上記 3 項目の合計点（Y 値）と授業評価アンケート回答数の相関（授業評価アンケート回答数が 10 未満を除く）を以下に示す。全開講授業数は、学部は 372 科目、大学院は 93 科目である。授業評価アンケート回答数が 10 未満を除く授業数は、学部は 348 科目、大学院は 61 科目である。回帰直線の傾きの絶

対値 α を用い、 Z 値 $=Y$ 値 $+\alpha\times$ アンケート回答数、として補正合計点 (Z 値) を各講義に対して求めた。

以下に令和元年度の学部および大学院の優秀授業の一覧を記載する。



令和元年度優秀授業一覧表（学部）				
開設科目名	担当教員名	学科	評点	
テクニカルコミュニケーションⅠ	貞光 宮城	機械工学科	14.732	機械最優秀
応用解析Ⅰ	堀田 一敬	機械工学科	14.563	機械 2
ものづくり創成実習Ⅱ	MACADRE ARNAUD PAUL ALAIN、岩谷 健治 前川 昇司、上田 政洋 宮崎 清孝、伊藤 望美	機械工学科	14.424	機械 3
流体工学Ⅱ	望月 信介	機械工学科	14.392	
流体工学Ⅰ	望月 信介	機械工学科	14.353	
ものづくり創成実習Ⅱ	新銀 秀徳、岩谷 健治 前川 昇司、上田 政洋 宮崎 清孝、伊藤 望美	機械工学科	14.305	
国際建設技術演習Ⅱ	森 啓年 MD. AZIZUL MOQSUD	社会建設工学科	14.393	社建最優秀
線形代数及び解析統論	堀田 一敬	社会建設工学科	14.341	社建 2
土質力学Ⅱ	原 弘行	社会建設工学科	14.228	社建 3
エンジニアリングコミュニケーション基礎Ⅱ	植村 隆 森 啓年、山田知沙	社会建設工学科	14.173	
テクニカルコミュニケーションα	ROBERTSON ZACHARY THOMAS	応用化学科	14.536	応化最優秀
テクニカルコミュニケーションω	ROBERTSON ZACHARY THOMAS	応用化学科	14.111	応化 2
応用化学実験Ⅲ	山吹 一大、鬼村 謙二郎 岡本 浩明、西形 孝司 川本 拓治、大和 志帆 外崎 剛、森田 由紀	応用化学科	14.065	応化 3
半導体工学Ⅰ	山田 陽一	電気電子工学科	14.469	電々最優秀
光・マイクロ波工学	久保 洋	電気電子工学科	14.389	電々 2
超伝導工学	原田 直幸	電気電子工学科	14.382	電々 3
電気回路Ⅱ	山田 陽一	電気電子工学科	14.339	
統計力学	鳴海 孝之	電気電子工学科	14.310	
応用物理学	浅田 裕法	電気電子工学科	14.193	
応用解析Ⅱ	西山 高弘	電気電子工学科	14.182	
電気電子工学基礎	原田 直幸	電気電子工学科	14.165	
確率統計	栗山 憲	電気電子工学科	14.164	
プログラミング演習Ⅰ（実習を含む。）	瀧本 浩一	知能情報工学科	14.857	知能最優秀
線形代数及び演習	池田 敏春	知能情報工学科	14.536	知能 2
情報技術概論	佐村 俊和、長 篤志 水上 嘉樹	知能情報工学科	14.453	知能 3
プログラミングⅠ	瀧本 浩一	知能情報工学科	14.308	
デザイン表現実習	久澤 謙二郎	感性デザイン工学科	14.408	感性最優秀
常微分方程式及び演習	堀田 一敬	感性デザイン工学科	14.391	感性 2
西洋建築史	富田 英夫	感性デザイン工学科	14.196	感性 3
環境物理化学Ⅰ	遠藤 宣隆	循環環境工学科	14.476	循環最優秀
移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	14.343	循環 2
環境概論	新苗 正和、小淵 茂寿 佐伯 隆、鈴木 祐麻	循環環境工学科	14.343	循環 3
東アジア文化論	今井 剛 西浦 みどり	循環環境工学科	14.278	
国際コミュニケーション	長井 正彦	循環環境工学科	14.228	
環境プロセス論及び演習	佐伯 隆 貝出 絢	循環環境工学科	14.142	
テクニカルコミュニケーションⅡ	貞光 宮城	工学部	14.490	
テクニカルコミュニケーションⅠ	ROBERTSON ZACHARY THOMAS	工学部	14.474	
* 講義総数372、そのうちアンケート総数10以上の講義数348				
* 講義総数372の10%として37件を表彰				

令和元年度優秀授業一覧表（大学院）

開設科目名	担当教員名	専攻	評点	
溶液化学特論	藤井 健太	化学系専攻	14.562	最優秀
都市代謝工学特論	今井 剛	建設環境系専攻	14.485	最優秀
化学分析特論	吉本 信子	化学系専攻	14.479	
基礎数理解析学特論Ⅱ	堀田 一敬	基盤科学系専攻	14.448	最優秀
ソフトウェア開発技法特論	山口 真悟 瀧本 浩一 中正 和久	電気電子情報系専攻	14.348	最優秀
物質化学英語	中山 雅晴 笠谷 和男	化学系専攻	14.337	
建築設計学特論	岡松 道雄 宋 俊煥	建設環境系専攻	14.302	
多体動力学特論	齊藤 俊	機械工学系専攻	14.248	最優秀
施設工学特論	進士 正人 吉武 勇	建設環境系専攻	14.197	
高分子化学特論	鬼村 謙二郎 山吹 一大	化学系専攻	14.162	
電磁気学特論	大原 渡 小柳 剛 山本 節夫 山田 陽一 原田 直幸	電気電子情報系専攻	14.133	
公共政策学	榊原 弘之	建設環境系専攻	14.109	
災害対応におけるリモートセンシングと地理情報システム	長井 正彦	建設環境系専攻	14.074	
科学・技術英語特論	植村 隆	創成科学研究科	14.048	
先端知能情報メディア工学特論Ⅱ	福士 将、平野 靖 藤田 悠介、間普 真吾 水上 嘉樹、守田 了 長 篤志	電気電子情報系専攻	14.009	
応用数学特論Ⅱ	柳下 剛広	基盤科学系専攻	14.001	
光機能材料工学特論	岡本 浩明	化学系専攻	13.916	
科学計測特論	比嘉 充、遠藤 宣隆 山本 豪紀、隅本 倫徳 小淵 茂寿、佐伯 隆 通阪 栄一、田中 一宏 熊切 泉、前田 修一 石井 治之	化学系専攻	13.876	
化学工業の新展開	隅本 倫徳、安川 政宏 遠藤 宣隆、山本 豪紀 小淵 茂寿、佐伯 隆 通阪 栄一、田中 一宏 熊切 泉、前田 修一 石井 治之、比嘉 充	化学系専攻	13.852	
* 講義総数93、そのうちアンケート総数10以上の講義数61				
* 講義総数93の20%として19件を表彰				

第9章 農学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 生物機能科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物機能科学科では、「生物機能科学科セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員どうしの意見交換が活発に行われた。以下に、本年度に実施した公開授業（6件）を示す。

- (1) 植物香り成分多様性創出機構の解明と代謝工学への展開
日時：2020年6月11日（木）17:00～ 肥塚 崇男 准教授
- (2) 植物の活性酸素シグナル伝達メカニズム—活性カルボニル種の関与
日時：2020年7月14日（火）17:00～ 真野 純一 教授
- (3) 酢酸菌の代謝：細胞表層代謝 vs 細胞内代謝
日時：2020年10月30日（金）17:00～ 薬師 寿治 教授
- (4) コケの話
日時：2020年11月17日（火）17:00～ 松井 健二 教授
- (5) フラボン・スチルベンを基質とするグルコシルトランスフェラーとO—メチルトランスフェラーゼについての話
日時：2020年12月22日（火）17:00～ 小崎 紳一 教授
- (6) 昆虫を用いた老化抑制と寿命延長をめざした研究
日時：2021年2月1日（月）16:00～ 井内 良仁 准教授

2. 生物資源環境科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物資源環境科学科では、本年度は、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施した。以下に、本年度に実施した公開授業（1件）を示す。

- (1) 山口大学教員免許状更新講習
 - ・小麦栽培からパンづくりまで 高橋肇 教授
 - ・山口県のコムギ栽培 荒木英樹 教授日時：2020年8月21日（金）9:00～16:00

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 令和元年度 アラカルト FD 研修会「著作権法 35 条改正と学校教育」（農学部 FD 研修会）

日程：2021年2月17日（水）〔吉田地区〕13:30～14:10

場所：農学部大会議室

講師：小川 明子（知的財産センター長・国際総合科学部教授）

参加者：28名（アンケート回収 22名）

【研修内容】

アラカルト研修「授業の過程における著作物利用ルール変更の対応」について、小川明子 知的財産センター長・国際総合科学部教授が講師を務め、著作権法 35 条改正の要点と教育場面での注意点について分かりやすく解説された。

著作権法 35 条が改正され、公衆送信に係る補償金の支払が発生することとなったが、令和 2 年度においては、コロナ禍の特別措置として無償となったが、令和 3 年度以降は、補償金の支払義務が実際に発生することになる。また、著作権法 35 条の規定を詳細に見ながら、対象となる「教育機関」「授業」の範囲、「複製」「公衆送信」「公の伝達」の意味や注意点について説明があった。さらには、著作権者の利益を不当に害することとなる場合の例示に沿って説明があった。

コロナ禍において、大学教育でのデジタル活用の場面が急激に増える中で、大変有意義な研修会となり、後半の質疑応答でも活発な意見交換がなされた。



後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

Q1 Moodle へのコンテンツ掲載は公衆送信に当たるのか。

A1 公衆送信に当たる。著作権者の利益を不当に害することがないように注意すべきである。

Q2 地上波のTV録画を活用することは問題ないのか。

A2 私的複製は認められているが、例えば、ドラマを丸ごと見せることがないようにしないとイケない。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	14	63.6%
良かった	8	36.4%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

Q3 YouTube に掲載されているコンテンツ等については、どうか。

A3 YouTube については、アップロードしたコンテンツの活用権限が YouTube 側に委ねるため、気をつけないといけない点がある。

Q4 教員が作成したファイルの学生への共有については問題ないのか。

A4 教員の方で、出所表示を行い、適切な引用の範囲内であれば、問題がない。



2. 令和元年度 教育改善 FD 研修会「新時代の大学における授業のあり方について考える」（農学部）

日 程：2020年11月25日（水）13：30～14：00

場 所：農学部大会議室

講 師：美作健悟（教育学部准教授）

参加者：25人（アンケート回収23人）

【研修内容】

はじめに宮田学部長より開会宣言があった。その後、司会の荒木教授より本 FD 研修会の趣旨説明および本日講師の美作准教授の紹介があり、講演が開始した。

教育学部の美作准教授による講演タイトルは「新時代の大学における授業のあり方について考える」であった。講演内容の概要は以下である。

8年前の「高大接続改革」より高校の授業は大きく変化しつつある。そうした高校卒業生が大学生となっている現在、学生のニーズは変化しているものと考えらるべきであり、高校の授業の変化を知ることが大学教育の改善につながるものと思われる。「高大接続改革」とは高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一つのパッケージとしてとらえる一体的な改革のことである。これからの生徒や学生は予見できない社会の中で自らの道を切り拓き、新しい社会を作っていくことになることから、「学力3要素（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③主体性・協働して学ぶ態度）」が特に求められているとされている。つまり「高大接続改革」は「学力3要素」の育成で串刺しながら、高校教育では学力3要素を育成し、大学入学者選抜ではそれを多面的に評価し、そして大学教育にてそれらをさらに向上、発展させ社会に送り出すという、人材育成の流れを作ることと思われる。これからの大学教育の発展を目的として、現在の県内の高校教育の状況を知るとともに、高校教員に対して変化に関する印象などのインタビューを行った。

山口大学に多くの生徒送り込む高校は教育改革や授業改善に熱心に取り組んでおり、これらに意欲的な教員が多い傾向にあるように思われた。現在高校では、新学習指導要領の年次進行に伴いながら、教育課程の見直しが進められている。これにより「公共」、「プログラミング」、「〇〇総合」、「探求学習科目」が入ってきている。教員による指導方法も「ティーチング」から「ラーニング」へと大きく変化しているようである。多面的な評価の推



進として、様々な評価テストの導入などがされており、評価の観点も「学力3要素」に準じた3観点へと変化してきている。大学と連携して（大学での専門知識を用いて）授業を進めている高校も増えつつある。ある高校では中学教員や生徒に対して大学入試の変化状況説明を踏まえながら、学校の特徴紹介を行っているそうである。ある学校では普通科でも総合的な探求の時間を設け、地域課題解決に向けた実践的な学びが行われている。インタビューでは、様々な教育手法の導入により生徒同士が教え合うことで学びが進化している、という声が聞けた。以前の高校では少なかった校内研修も積極的に行われているようである。学校間では取り組みや成果に差異はあるだろうが、少なくとも聞き取りを行った進学校では、「組織的改編、皆で授業改善」という声が多く得られた。討論をはじめとした新たな教育場面での生徒の非常に表情は良いように思われる。「学習における本質的な部分で戦わせる群れ」、「ガチでぶつかる場面」を教育の現場にて創造する必要があるように思われる。インタビューでは、教え込むだけではなく、「生徒を動かす」、「頭を使わず」、「考えざるを得ない学習を入れる」ことも必要であるとのことであった。この概念は大学教育に取り入れても良いだろう。

大学での講義に対して不真面目な学生がいることを話したところ、山口大学生は与えられたことはきちんとこなすがそれ以上のことを表現するのに億劫がる学生が多いかもしれない、しかし国立大学に進学するような生徒は道徳心が高い傾向にあるからしっかりと指導すれば必ず伝わる、というアドバイスをもらうことができた。またグループ学習などの学びの動きにそうした学生を巻き込んでいくと実力を発揮するかもしれない、自身のロードマップを設定、自覚すれば、その学生はなすべきことがきちんと分かるのではないだろうか、という意見ももらうことができた。

学生と一緒に授業をつくるという思いで大学の授業改善（授業づくり）を進めれば、学生のやる気は奮起し、豊かな自己実現につながるのではないかと、そしてそれは大学の教育や研究の発展につながるのではないだろうかと感じている。

【質疑応答・意見交換】

- Q1 山口県のすべてがコミュニティスクールとなっている、とはどういう意味か。
- A1 山口県内のすべての公立小中高校が、地域住民を含めた学校運営協議会を持つなど法にて規定された要件を満たした学校となっている、という意味である。
- Q2 学校間の温度差、普通科卒業や探求科卒業の違いなど、学生間の温度差は大きいよう思われる。大学として今後どのように対応していくべきかと考えておられるか。
- A2 新学習指導要領の実施に伴い、能動的な学びを積んできた学生が増えてくると考えている。基本的にはこうした学生に焦点をあてて、これまでの詰め込み型学習をしてきた学生には能動的学習の必要性を伝えながら、教育を進めていくことが望ましいと考える。
- Q3 「深い学び」とはどのような風にとらえれば良いだろうか。
- A3 断片的な知識の貯蓄ではなく、様々な知識が連結、連動した構成的な知識となっていること、技能は単にできるではなく、知識と連動したうえでできること、他の場面で得た知識

や技能が他の場面で活用できること、知識の価値をとらえ活用していこうとすることなどが研究結果として示されている。

Q4 高校の教科書の内容が非常に濃くなっているように感じている。一方で自分たちが高校で学んだ知識に対する正答率が下がってきている。このことは高校生が教科書を未消化のまま大学に進学しているのではないだろうかという危惧につながっている。知識の享受に関しては現在の高校教育はどのようなになっているのだろうか。

A4 教科書にはQRコードを添付するなど、自身が興味を持ったものに対しては自宅にて自ら学ぶようなシステムが取り入れられている。また文字よりも写真や資料といった情報が増え、自ら取り組みやすい環境となっている。

【アンケートによる満足度】

設問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数 (人)	割合 (%)
非常に良かった	6	26.1
良かった	11	47.8
どちらとも言えない	6	26.1
あまり良くなかった	0	—
良くなかった	0	—
無回答	0	—
合計	23	100.0

3. 「外部資金獲得方法について」(農学部)

日程：2020年10月21日(水) 13:30～14:00

場所：農学部大会議室

講師：山本晴彦(創成科学研究科農学系分野 教授)

参加者：25名

【研修内容】

はじめに宮田学部長より、本研修を設けた趣旨が説明された。宮田学部長から、安定した学部運営には外部資金の獲得が必須であり、これまで科学研究助成金を含む大型助成金を獲得されてこられた山本氏を講師に向け研修会を設けた旨の説明があった。

山本氏からは、自身が獲得してきた助成金に対して、いかに準備してきたかなどの事例を踏まえて、農学部全体での外部資金獲得数拡大に向けた意見が披露された。

4. 「科学技術振興機構(JST)事業の特徴について研修会」(農学部)

日程：2020年11月25日(水) 13:30～14:00

場所：農学部大会議室

講師：實近 健一(大学研究推進機構 産学公連携・研究推進センター URA)

参加者：25名

【研修内容】

はじめに宮田学部長より、本研修を設けた趣旨が説明された。宮田学部長から、安定した学部運営には外部資金の獲得が必須であり、JSTが提供する研究助成金も本学部では活用可能であることから、JSTで助成金業務にあたられたことがある實近氏を講師に向え研修会を設けた旨の説明があった。

實近氏からは、PPTによる配布資料に基づいて、JSTの事業概要とその特徴、戦略研究推進事業、未来社会創造事業、研究成果展開事業、国際科学技術共同研究推進事業、創発的研究支援事業、ムーンショット型研究開発事業、山口大学のJST事業参画状況などについて説明があった。JSTの助成事業が広範囲にわたって膨大な数があるため、限られた時間では個々の事業の特徴に踏み込む時間は十分にはなかったが、本学では大学研究推進機構 産学公連携・研究推進センターやURAの制度を拡充しており、個々の教員が助成金に申請するときには、個別に対応できることが説明された。

5. 「フィールド教育研修会」(農学部)

「フィールド教育研修費」として実施経費を受け、他学で実践されるフィールド系科目などを視察できるようにした。2020年度は、カンショ(サツマイモ)の生産体制(育苗～加工)をテーマに先進的な取り組みを進める島根大学生物資源科学部附属生物資源教育研究センター(門脇正行准教授)や鹿児島大学農学部(下田代智英准教授。連携農家の視察も含む)を視察して、本学の実習にフィードバックできる課題要素を抽出した。



図 島根大学生物資源科学部附属生物資源教育研究センターにおけるサツマイモ収穫風景(左)および鹿児島県指宿市のイモ生産農家における育苗施設(右)についての視察。

6. 「本学受験生の動向に関する調査結果についての研修会」(農学部)

日程：2021年3月26日(金) 13:00～15:15

場所：農学部大会議室

講師：フロムページ・マーケティング部門責任者、営業部門責任者 計3名
参加者：23名

【研修内容】

高校生への入試情報および入試企画を提供する株式会社フロムページに、本学農学部に関心を持つ高校生および入試志願者の動向を解析してもらい、その結果の報告を農学部教員有志で聴講した。本学部の入試に関心を持つ学生が3年生の秋以降で多いこと、本学部の情報発信が乏しいことなど、今後の広報や入試対応に有用な情報が共有できた。

第3節 教育改善に関する活動

4月には新型コロナウイルスの感染拡大およびそれに伴う緊急事態宣言の発令により対面授業が休止されたが、翌日から一部の教員でオンライン授業が開講された。こうした経験談やオンライン授業に関する情報交換を進めた結果、2週間後には概ねすべての授業が開講できた。

カリキュラムに関しては、いずれの学科でも2021年度以降の入学生からデータサイエンスに関連する科目を追加するなどした。生物資源環境科学科では、習熟度に応じて1年次から専門科目を受けられるようにするために、「農学入門Ⅰ・Ⅱ」などの科目を新設するとともに、既存科目の開講時期を見直し、「履修の手引き」を改訂した。カリキュラムポリシーにより即するために、講義科目の再検討を行ない、新入生に対する理系基礎の補習授業科目を開講した。

前年度に引き続きシラバスに予習、復習の学習時間の目安を明記するなど学生の学習を促す工夫を施した。

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
農学部	フィールド教育研修費	研修旅費のべ2名	80	サツマイモを実習課題とするための視察および講習(島根大学、鹿児島県)

第5節 来年度の課題

1. ピアレビュー

生物資源環境科学科におけるピアレビュー数が少なかった。次年度は、これまで一度もピアレビューに関わったことがない教員に対してピアレビューへの参加を勧めるとともに、ピアレビュー実施数を多くしたい。また、他の教員の授業を参観できるようなシステムについても再検討したい。

2. コロナウイルス感染に対する適切な対応

2021年度は、本学の方針に基づき農学部でも対面授業を基礎として実施する。農学部では、実験科目や実習科目に割かれる時間が多いことから、これらの授業における感染防止策を徹底することになっている。また、新2年生や1年生に関しては、大学に不慣れなうちにコロナ禍に遭遇していることから、これらの学年の修学状況をチェックするしくみを確認するとともに、修学指導教員が中心となって、修学に伴う不安を取り除くようなケアを行うことにしている。

学生の中で難聴者がいることから、授業担当者に対しては、安全に説明や会話できる距離を取るなどの対策を講じるよう指導する。

第10章 共同獣医学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 共同獣医学部の授業公開（ピアレビュー）

令和2年度に公開した授業は以下の通りである。

11月17日	獣医解剖学A	鹿児島大：松元先生
1月5日	獣医内分泌・代謝学	水野先生
1月8日	獣医発生学	加納先生
12月15日	獣医内分泌・代謝学	水野先生
1月14日	獣医微生物学ⅡA	早坂先生
1月18日	獣医病理学A	森本先生
11月30日	化学Ⅱ	森本先生
12月17日	動物衛生学	岩田先生
11月25日	食品衛生学	豊福先生
12月23日	食品衛生学	豊福先生
12月11日	キャリア形成論	高野先生
1月4日	獣医病理学A	森本先生
1月26日	食品衛生学	豊福先生
12月1日	生化学Ⅰ	島田先生
12月8日	獣医呼吸器・循環器病学	鹿児島大：三浦先生
1月14日	獣医腎泌尿器病学	上林先生
1月22日	獣医予防管理学	角川先生
12月11日	獣医予防管理学	鹿児島大：安藤先生
1月12日	獣医解剖学B	日下部先生
1月12日	獣医解剖学B	日下部先生

2. 獣医学セミナー、獣医学特別セミナー開催

本学部では教員間のピア・レビューとして教員が持ち回りで講師を務める“獣医学セミナー”を開催している。教員が教員・学生を対象として各教員の研究内容を伝えるセミナーを定期的に行い、学部の研究力・教育力の向上を図ることを目的としている。本年度は3名の本学部教員が講師として開催し、岡山大学の加来田先生が獣医学特別セミナーの講師として開催した。

(1) 第78回 獣医学セミナー :

第4期中期目標期間に向けた共同獣医学部の将来ビジョン

佐藤晃一先生 (獣医薬理学)

2020年 12月16日(水) 17:00-18:00 獣医学研究科棟4階 大講義室

国立大学法人となってから17年が経過し、2022年度からは第4期目となる中期目標期間が始まる。近年、文部科学省や財務省からは大学法人の改革が強く求められており、大学は国民というステークホルダーに対して何を約束し、どのように実施したかを明らかにしなければならない。そのため大学執行部から各部局に対しても、第4期に向けた明確な将来ビジョンが求められている。共同獣医学部(大学院、動物医療センター含む)は、これまで国際水準の獣医学教育実践を目的に獣医学教育の改善を行うと共に、研究力の強化、海外連携の推進を行ってきた。今回のセミナーでは、第4期に向けた共同獣医学部のビジョンについてお話したい。

(2) 第79回 獣医学セミナー :

タンパク質のメチル化が制御するリン酸化シグナル

大浜 剛 先生 (獣医薬理学)

2021年 1月20日(水) 16:00-17:00 獣医学研究科棟4階 大講義室

タンパク質の翻訳後修飾は、あらゆる生命現象において決定的な役割を果たします。リン酸化は主要な翻訳後修飾の一つであり、リン酸化酵素キナーゼと脱リン酸化酵素ホスファターゼによって可逆的に制御されています。Protein phosphatase 2A (PP2A) は、様々な基質を脱リン酸化する重要ながん抑制因子です。PP2A自身も翻訳後修飾を受けることが知られており、特にメチル化はPP2Aの活性を大きく変化させます。タンパク質のメチル化は、特にヒストンタンパク質の修飾を介したエピジェネティクスの分野での重要性が認知されていますが、この翻訳後修飾の役割はそれだけにとどまりません。本セミナーでは、PP2Aメチル化レベルの制御機構や、PP2Aメチル化によって変化するリン酸化シグナルが生体に及ぼす影響についてご紹介します。

(3) 第80回 獣医学セミナー :

獣医療における経カテーテル的動脈内治療～肝動脈塞栓術を中心に～

谷 健二 先生 (獣医外科学)

2021年 2月17日(水) 16:00-17:00 獣医学研究科棟4階 大講義室

肝動脈塞栓療法 (Transcatheter arterial embolization; TAE) とはカテーテルを用いた血管内治療のひとつであり、ヒト医学では肝細胞癌に対する標準的な治療です。これまでに正常犬におけるTAEの影響は軽微であり、超選択的に目的肝動脈に薬剤注入でき得ることを確認しました。また手術適応外ならびにTAE施術の要望があった肝細胞癌患犬に対して、TAEを実施したところ、腫瘍容積の減少が認められています。人医学では2014年から薬剤溶出性ビーズ (drug eluting bead, DEB) が利用可能になり、この薬剤溶出性ビーズを用いた肝動脈塞栓化学療法 (TACE) の利用が可能になっています。これはDrug-eluting bead transarterial chemoembolization (DEB-TACE) と呼ばれ、腫瘍内の薬剤濃度

を高めるとともに正常な肝実質や脾臓への影響がより軽減されると期待されています。今回、獣医療における経カテーテル的動脈内治療の可能性について、肝動脈塞栓術を中心に紹介します。

(4) 第50回 獣医学特別セミナー：

核内受容体レチノイドX受容体(RXR)を標的とした低分子創薬研究

加来田博貴先生(岡山大学大学院医歯薬学研究科合成医薬品開発学)

2020年12月22日(火) 16:00-17:15 獣医学研究科棟4階 大講義室

「アカデミア創薬」とはアカデミアの研究成果をもとに、大学の研究者が自ら医薬品候補物にまで磨き上げ、製薬企業に導出することにより新薬創出を目指す取り組みとされる。しかし、アカデミア創薬における臨床開発段階での成功率(上市に至る確率)は企業主体に比べ有意に低いとされる。その背景を紹介し、その対処策について紹介させていただく。また低分子創薬の実情を紹介させていただいたのち、演者らが取り組んできたレチノイドX受容体(RXR)を標的とした低分子創薬について紹介させていただく。RXRに結合し活性化することを作用機序とする医薬品として、皮膚浸潤性T細胞リンパ腫(CTCL)治療薬であるbexarotene(Targretin®)が知られる。本薬は、様々な疾患モデル動物を用いたドラッグリポジショニング研究がなされており、2型糖尿病、パーキンソン病に対する治療効果が報告されている。しかしながら、本薬には顕著な脂質異常症が見られること、また抗がん薬として開発された経緯から、その毒性のため上記疾患等への適応拡大には至っていない。演者は、bexaroteneに見られる副作用を軽減した新たなRXR活性化薬を見出すべく、研究を行ってきた。そのアプローチの1つは、RXRを過度に活性化しないパーシャルアゴニストの創出である。セミナーではその分子設計戦略、PETイメージングによる薬物動態研究、更にこれに基づく対象疾患の選択とその薬効などを紹介する。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 2020年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会報告書

(1) はじめに

2020年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会を2020年9月11日(金)に行った。スケジュールは以下の通りである。

- 1) 10:00-10:10 開会挨拶 山口大学 佐藤学部長：山大 icover101・鹿大 R302 講義室
- 2) 10:10-11:40 基調講演 山口大学医学研究科 浅井先生「データサイエンス教育について」：山大・icover101・鹿大 R302 講義室
- 3) 13:20-14:20 教育ワークショップ
基礎：進行 山大日下部先生、鹿大白石先生：山大2番教室・鹿大組織学実習室
病態予防：進行 山大清水先生、鹿大安藤先生：山大4番教室・鹿大 R303 講義室
伴侶動物臨床：進行 山大水野先生、鹿大三浦先生：山大5番教室・鹿大 R302 講義室

産業動物臨床：進行 山大佐々木先生、鹿大畠添先生：山大動物医療センター・鹿大 R301 講義室
4) 14:30-教育ワークショップ分科会からの報告：山大 icover101・鹿大 R302 講義室
5) 閉会挨拶（鹿児島大学三好先生）：山大 icover101・鹿大 R302 講義室
以下に、本年度実施された合同 FD 研修会の詳細について報告する。

(2) 基調講演

場所：山口大学 iCOVER 101、鹿児島大学 R302 講義室
講演者：山口大学医学部医学科 システムバイオインフォマティクス講座
浅井 義之 先生
参加者：山口大学 教員 31 名

1) AI とシステムバイオロジー

AI とシステムバイオロジーを組み合わせることで、基礎研究の発展、新規医療技術の開発、データサイエンティストの人材育成を目指す。
AI は大量のデータを構造化することで未知の知識の発見を行い、病気の早期発見を目的とする。システムバイオロジーはマクロな視点でネットワークのメカニズムの理解を行い、病態の深い理解を目的とする。

2) AI の発展と実用

AI のパーセプトロン→ネオコグニトロン→ディープラーニングの順で発展した。
CAD (computer-aided diagnosis) には様々な種類が開発されており、脳卒中、アルツハイマー病など認証を経て販売に至っているものが数多くある。

3) AI の学習と予測

AI の学習には教師あり学習（小脳モデル）、教師無し学習（大脳皮質モデル）、強化学習（大脳基底核モデル）の 3 種類存在する。
この中で重要なのは、教師無し学習であり、データレベルでの分類が可能であることが利点である。また、学習段階で医師が答えを出しているため医師を超えることがない、という教師あり学習においての問題点を解決できる。

4) AI の問題点

AI は視覚的には見えないデータ上のノイズを拾ってしまうことが問題になっている。
前提知識として何をどこまで教えるかという問題も存在する（フレーム問題）。

(3) 教育ワークショップ（基礎系）

場所：山口大学 2 番教室、鹿児島大学 組織学実習室
テーマ：講義・実習において改善すべきこと
参加者：山口大学 教員 9 名

1) 講義・実習に関する問題点について

- ・ カリキュラムにおける授業内容の重複改善について検討した。科目担当者間の連携の重要性が示

された。臓器別のカリキュラムの導入により、重複の多くは改善される可能性が提案された。臨床系の科目を含めた重複の検討をすべきとの指摘があった。

- 学生の技能の評価と実習へのフィードバックについて検討した。一部の実技について、学生の習得度のレベルの低さが指摘されている例を挙げた。評価ワーキングやカリキュラム委員会での事例の収集と検証の必要性について議論した。
- 講義録画の自宅での視聴について議論した。COVID-19に対するオンライン授業適用のため2020年度の著作権は無償化されており、また特例措置が終了しても、現在では改正著作権法により緩和傾向にある。アクセス用サーバーは山口大学のものが利用可である（鹿児島の学生も利用可能）。録画視聴による教育効果を検証し、利用範囲の拡充の可能性を探ることが提案された。

2) COVID-19対応授業に関する問題点について

- Glexaのバージョンアップについて紹介があった。
- 実習コンテンツの拡充と開発について議論した。山口大学より、今年度前期で利用・作成した組織学実習、生理学実習、薬理学実習のオンラインコンテンツに関して紹介があった。
- オンライン授業への移行による学生負担について議論した。出欠確認代わりに小テスト、全体のレポート数の増加などを原因とした学生の疲弊に関して検討した。オンライン試験については、山口大学では今年度後期での適用は中止する方向性（成績の公平性を保てない）であることの紹介があった。

3) 実習で利用する動物数削減に関して議論した

- 山口大学より、ゼロプロジェクトの紹介と実習動物の利用実績について報告された。学生の実技習得のため、生きた動物に接する必要性に関する紹介があった。
- 鹿児島大学より、動物数削減の方針および努力内容について紹介があった。山口大学のゼロプロジェクトおよび方針に対して質疑応答があった。

（４）教育ワークショップ（病態予防）

場所：山口大学 4 番教室、鹿児島大学 R303 講義室

参加者：山口大学 教員 9 名

1) 緊急事態（コロナ等）における外部実習について

a. 現状の把握

山口：外部実習は中止（公衆衛生）：缶詰実習、山口県周東食肉センター、食肉検査学実習（熊本）

環境保健センターは講師を呼んで代替

食品加工→未定

鹿児島：食肉衛生検査学実習→中止

魚関連→実施見送り

市内施設→移動手段を工夫して実施

動物感染症総合実習→家保は中止、撮影ビデオで

b. 代替授業について

山口：未定。ビデオ撮影案は教材化に対する懸念（今後の実習を断られる口実となる）

鹿児島：動物感染症総合実習→家保は中止、撮影ビデオで

食肉衛生検査→動画撮影済み、講義と合わせて配信
ビデオ撮影教材は今後も利用可能か（予習等）

c. ビデオ教材の共有について

先方の許可、映っている学生への確認・許可が必要か

動画撮影はあらかじめ教育目的で作ることが重要（長さ、質、使いやすさ、公開のしやすさ等）
執行部に教材の共有を議論してもらいたい。

2) 外部実習の維持について。大学側ができること。

山口：学生の態度の指摘。

学部機関のメリットはなにかという疑問

就職の勧誘がメリット→あまり就職していない（広島市）

と畜場（山口、広島）からの依頼で病理検査を受けることは可能

HACCP 支援（豊福先生）

学生への事前教育が重要（モチベーション含め）

鹿児島：と畜場から相談、アドバイスする形で応える

鹿児島県としては就職先として考えてもらえればメリットに

県職員への助言、サポートを含めて常に大学側から提供できる

病理関連の依頼も受け入れることは可能

3) アフターコロナの講義のあり方。録画講義を自由に家から見ることは可能か？

賛成意見：汎用性の高いコンテンツは別枠にして自由に視聴できるようにする

学年を跨いで過去の動画も見れた方が利便性が高い

対面授業、出席を前提とした予備資料として家でも見れるように

サーチ機能を導入しないと学生が検索できない。

反対意見：学生が授業に集中しなくなる。

視聴期間を限定した方が良いのではないか（実習期間のみ、とか）

スキルラボ（図書室）では今も自由に視聴できる

著作権含めて講義内容の自由度が下がる懸念

来年度からの著作権関連については不透明

著作権の関係でコンテンツを作り直す必要がある

実習は対面実施を重視した方が良い

共同獣医は録画講義の視聴方法で学生の感染管理とストレス解消などに成功している

4) 実習における生体の利用について

a. 状況の把握

山口：動物総合感染症でマウスを使用（マラリア感染）

徐々に使用数を減らしており、ゼロにすることも可能（内容を変更する）

ただし学生のマウスを取り扱う技術の低下を実感、懸念あり（

鹿児島：病態予防関連で生体使用はなし

b. 今後

目標の設置が重要（必要以上の削減は不要なのではないか）

山口大学のゼロプロジェクトの問題

低学年時の基礎実習と高学年の実習の連携、調整が必要

(5) 教育ワークショップ (伴侶動物臨床)

場所：山口大学 5 番教室、鹿児島大学 R302 講義室

参加者：山口大学 教員 12 名

1) 教育 (授業、実習体制)

コロナ禍での授業対応など

- 学生側としては、録画視聴の方が教育的効果、時間の使い方からいい、という意見が一部ある (鹿児島でもアンケートをとっている)
- 後期について、鹿児島ではハイブリッドで実施するという方向性 (学生を大学に来させることも一つの目的)
- 録画視聴は、著作権の問題が大きいので、一定期間で消す必要がある (鹿児島大はとくに厳格なので、今の状況はあくまでもコロナに対する緊急的措置という位置づけ)
- ICT 委員 (とくに鹿児島) の負担が大きい→山口発信の授業は山口側で録画できるようにすることが先

実習における生体利用について

- 鹿児島の診断治療学実習では全く使用していない：シミュレーターの使用とシェルター動物を用いた実習を行なっているが、それで十分ではない
- 山口では、実験動物委員会に届け出た上で、供血犬を用いて伴侶動物診断治療学実習を実施

Dayone で求められる不妊手術の実習について：獣医師法の牴触、獣医事審議会の水準 3 の問題

- 鹿児島ではシェルターメディシンで実施しているが、厳密には上記の問題はあり。EAEVE 視察では学生が自分でやっているということを伝えているが、書類上は学生が実施しているという明確な文言は削除している。またシェルターでの本実習は、県からの依頼ということになっているが、締結したところの文言では、学生がしないことになっている (教員が主、機械だしは学生)。
- ただし鹿児島はあくまでもシェルターメディシン、山口は地域猫。所有者が異なるとも考えられる。
- 全国で水準の見直しをするべきかについて、4 大学で話し合うべきこと？前回の水準を作った時からすでに 10 年以上過ぎているため、見直しもあり。
- 山口では、地域猫不妊措置の実習の在り方について外部より学部に意見があった

コロナ禍でのポリクリについて

- 両大学とも緊急事態宣言下ではポリクリは中止したが、現在は再開。
 - ◇ 山口大では、診察室の大きさが小さいこともあり、通常 8 人/班を半分の人数で実施。人数を制限して問診を行なっている。
 - ◇ 鹿児島は、もともと 12 班 (3-4 人) x 4 クールなので、変更なし。ただし飼い主の問診はとらせていない
 - ◇ シェルターは完全にストップ。入院の面会ストップ
- 夜間実習：鹿児島はコロナのために現在中止中であるため、夜間診療も 22:30 まで => ただし今後は元に戻していく予定
- 鹿児島の臨床病理の実習は、zoom を用いた演習を毎日行なった

- 実施できていない実習の単位をどうするか？ → レポートなどで適宜対応

2) 臨床業務

コロナ感染者がでた場合に病院はどのように対応するか？

- 両大学とも基本的には、保健所および大学の指示に従う
- 鹿児島では接触アプリの使用を推奨している＝濃厚接触者の特定をやすくするため ⇒ 山口はもともと病院が狭いため、あまり意味がない？

(6) 教育ワークショップ (産業動物臨床)

場所：山口大学 動物医療センター、鹿児島大学 R301 講義室

テーマ：産業動物臨床における情報交換両大学における現状の問題点の共有

参加者：山口大学 教員 3名

1) 講義科目 (牛診療学Ⅰ、牛診療学Ⅱ、馬診療学、豚診療学、獣医繁殖学) について現状報告と問題点について協議がなされた。両大学とも4月以降は遠隔録画配信で講義を実施したが、試験成績などを鑑みるに習熟度について影響は無いものと考えられた。

2) 前臨床実習科目 (産業動物診断治療学実習、獣医繁殖学実習) については、両大学ともに5月まで対面実習が中止され、録画教材の受講が代替として行われた。6月以降、人数制限や野外での実施などコロナ対策を講じながら対面での実習を実施した。特に、鹿大ではOSCE項目についてはしっかりと実習を行い、豚の項目については、モデルを用いた実習を実施した。山大では人数を制限して、4班にわけて4回の実習を実施した。また、山大では社会人学び直し講座では独自に開発した模型・屠体などの教材を利用してオンラインでHands-on実習を開催した。

3) ポリクリ [学外実習 (NOSAI、豚、鶏)、牛診療、馬診療、豚獣医療、その他] では、鹿大では4月からは十分なポリクリが実施できておらず、9月以降5年生において再開する予定にしている。NOSAI実習についても2021年春からの再開に向けて調整を行っている。山大では、6月より人数制限 (最大乗車人数の半分)、換気、検温、消毒を実施しながら、往診型のポリクリを再開した。産業動物臨床では、大動物の触れ方、扱い方といった基本事項について、生体を用いる必要があり、今後も対面での実習の重要性を確認した。

2. 令和2年度 共同獣医学部教育改善FD研修会

日程：令和3年1月13日(水) 14:30~15:00

場所：獣医学研究科棟4F 大会議室

講師：静屋 智 (山口大学教職センター)

参加者：37名 (アンケート回収 21名)

【研修内容】

最初、共同獣医学部島田緑教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター静屋智教授より「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の

動向を踏まえながら～」についての講演があった。高大接続改革は高校教育、大学入試選抜、大学教育をひとつながりのものとして捉えるということ。高大接続改革で、高校教育や高校の授業が大きく変わってきている。高校（特に山口大学に進学する高校を中心として）の授業がどの様に変化しているかを本研修で情報共有し、高校教育改革に沿って大学の授業の改善に役立てて欲しいとの主旨であった。まず、高大接続改革の流れが説明され、高大接続改革の必要性は、様々な社会の急速かつ大きな変化に応じて、高校教育、大学教育を通じて「生きる力」を育む事が確認され、特に「確かな学力」では学力の3要素をバランス良く育む事が必要であることが説明された。その後山口県内の高校教育・授業についての具体的に説明があった。さらに大学入試改革も行われることから一部の高校では普通の中に総合的な探究の時間を設け、理数科を探究科に改組し探究活動を充実している所もある。さらに大学・地域との連携し活動を高めていることについての具体的な説明があった。高校教育改革の結果、生徒の自主性が育ったことが表れてきている事、改革により現職高校教諭も授業の取組の意識に変化が生じ、高校の授業の変化が出てきている。また高校から山口大学に進学する生徒は基礎学力、読解力、地道に学習しようとする姿勢は身につけているとの評価されている。さらに大学の授業を通して人を育成する事になる。学生は学びの要求、希望、願いを持って入学して来ているので、大学の授業について高大接続改革に沿った一層の授業作り及び授業改善に取り組むことで、大学在学中に学生がもっと成長すると考えられる。

【質疑応答・意見交換】

Q1：山口大学に入学する学生は与えられた課題はこなすが、自分から積極的に学習し考えようとなしな
い。大学としても学習カリキュラムを充実して学習を高めようとしてしまう。この点を改善するには
はどうしたらよいか。

A1：与えられた課題だけを行う傾向は小学校、中学校、高校に進学するほどその傾向が強い。
従って、はやい小学校の時期から、求められている学習が何かを考える力をつけることが大事だと思
う。教える方が準備をしすぎる事は良くなく、思考ができる方向に持って行く事が必要。学習カリ
キュラムについて、この学習目的が何を考えさせた後に、学生に学習させるようにすることが必要
だと思う。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	9.5%
良かった	10	47.6%
どちらとも言えない	6	28.6%
あまり良くなかった	2	9.5%
良くなかった	1	4.8%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%

第3節 教育改善に関する活動

1. 学生授業評価アンケート 2020年度 講義

【講義】出席率 (439)	1 90%以上 (14回以上)	2 80%以上～90%未満 (12～13回)	3 60%以上～80%未満 (9～11回)	4 40%以上～60%未満 (6～8回)	5 40%未満 (6回未満)
	412	24	2	1	0
【講義】授業時間外学習 (439)	1 3時間程度又はそれ以上	2 2時間程度	3 1時間程度	4 30～50分程度	5 30分未満
	132	118	134	49	6
【講義】理解度 (439)	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらとも言えない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
	179	191	43	16	10
【講義】目標到達率 (439)	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらとも言えない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
	169	185	64	14	7
【講義】満足度 (439)	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらとも言えない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
	244	129	34	15	17

2. 学生授業評価アンケート 2020年度 実習

【実験・実習】出席率 (143)	1 90%以上 (14回以上)	2 80%以上～90%未満 (12～13回)	3 60%以上～80%未満 (9～11回)	4 40%以上～60%未満 (6～8回)	5 40%未満 (6回未満)
	140	2	1	0	0
【実験・実習】授業時間外学習 (143)	1 3時間程度又はそれ以上	2 2時間程度	3 1時間程度	4 30～50分程度	5 30分未満
	27	19	58	20	19
【実験・実習】理解度 (143)	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらとも言えない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
	68	63	7	5	0
【実験・実習】目標到達率 (143)	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらとも言えない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
	67	56	18	2	0
【講義】満足度 (143)	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらとも言えない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
	91	43	4	4	1

シミュレーターを用いた基本的なトレーニングを行えるよう臨床・スキルラボを整備し、録画講義の閲覧や学生の自主的な学習ができるよう環境を整えたため、学習時間の増加が期待される。

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
共同獣医学部	第50回獣医学特別セミナーでの講演等	旅費謝金 1名	48	阻害剤の合成に関する新たな知見を得ることができた
計			48	

第5節 来年度の課題

共同獣医学部は、昨年度、欧州獣医学教育認証機構 (EAEVE) による認証を取得することができた。持続的に世界標準の教育を担保するため、教育改善を行うとともに、教員の教育力向上のため、鹿児島大学共同獣医学部と合同FD研修会を双方向遠隔講義システムを利用して開催した。学生授業

評価及び教員授業自己評価では、それらの結果を教育改善に繋げていく。教員授業自己評価の入力率向上のため、FD担当教員による未入力者への督促等を行い、入力率の向上に取り組む。授業外学習時間の確保については、クリニカル・スキルスラボを整備したことにより、学生の学習内容・学習環境が改善され、主体的な学習が期待される。本年度の授業参観は全教員の1/3程度であったため、来年度以降は全教員が参観を行い相互の授業の質を向上できるように、教員に積極的に働きかけを行う必要がある。

第 11 章 国際総合科学部の F D 活動

第 1 節 授業公開

1. はじめに

令和 2 年度は、日本のみならず世界にとってきわめて異例の、いまだかつてなく困難な 1 年となった。この困難は令和 3 年度に入って以降も続いている。

それはいうまでもなく新型コロナウイルス (COVID-19) の流行によるものである。このウィルスの出現は、それまでの社会のありかたを無効化し、大きく変容させるものとなった。

日本社会においてもその影響は甚大であり、7 月に予定されていた東京オリンピックが翌年まで開催延期に追い込まれたことは、その甚大さを容易にうかがわせる象徴的な出来事であろう。

とりわけ、前年度末からの保・幼・小・中・高の各機関に対する政府からの一斉休業要請は、日本国内における社会の現状が「授業どころではない」ことを公言するものとなった。以降、山口大学をはじめ全国のすべての教育機関は、そうしたなか教育の機会と質を確保するために奔走し、さまざまな局面で想定外の困難に直面しながら、その都度、過去の自身を否定するような迅速かつ柔軟な対応をもってことにあたることを強いられた。

そうした状況において、あらかじめ予定され、企画化された FD は考慮する暇もほとんどなくなった一方で、いまそこに忽然と出現したある困難にいかに取り組み、解消すべきか、その方向性や手法を探るうえでは、むしろ積極的に機能すべきものとなった。

このように、令和 2 年度は、山口大学国際総合科学部の FD 活動にとっても、おそらくきわめて例外的な 1 年間であった。そうした事情から、以下に、まずは教育の観点から国際総合科学部が対処した経緯について記載する。

2. 留学の中止

中国・武漢から広まったといわれる新型コロナウイルスが、豪華客船の乗客における集中的な感染 (クラスター) 発生事例を端緒として日本国内でも全国的に流行しはじめ、感染予防と拡大抑制の観点から、すでに令和元年度 2 月末には小・中・高の各学校には全国一斉の臨時休校措置が要請され、実施されていた。各国立大学については、この時期には春季休暇に入っていたことから授業自体はなかったものの、卒業式が中止されるなど影響は深刻化しつつあった。

とりわけ、基本的に 2 年後期から 3 年前期までの 1 年間で海外留学での修学期間としている国際総合科学部では、新型コロナウイルスの蔓延し都市機能が完全に停止していた中国・武漢に留学していた学生が、2 月の段階で政府によるチャーター機によって現地から緊迫のなか無事に脱出・帰国したのを皮切りに、世界各地への感染拡大を受け、感染状況が悪化したスペインやフランスなどヨーロッパ各国から順に留学の中断と帰国指示を与え、新年度を迎えるころには、留学していた全学生がこれにしたがい、帰国する運びとなった。

その過程で、それぞれの留学先であった各国や各大学の対応はさまざまであり、感染状況の急激な悪化もあいまって、留学していた学生たちをめぐる事情は猫の眼のように目まぐるしく変化していた。そのうちもっとも深刻な問題として、具体的には日本へ帰国するための飛行機がなくなることの懸念があった。現地から日本への直行便の減便による座席数の減少や運行休止による空席の消失はもちろん、途中で乗り換えを介在させる必要がある地域からの帰国は、なお困難の度合いを高め、学生たちは留学先で不安を募らせることとなった。

政府によるチャーター便の運行などを含め、とにかく結果的には国際総合科学部の学生全員が留学先から無事に帰国でき、彼らについては幸いにして全員が PCR 検査で陰性反応となった。

その後は海外からの渡航者らに対する公共交通機関を使用した移動の禁止と2週間の外出禁止による宿泊施設での滞在の義務化といった政府の方針にそって、羽田空港や関西空港などに教員が迎えに赴き、レンタカー等によって成田など各地の受け入れ宿泊施設に送り届けた。こうして、比較的安全だった台湾から帰国してきた最後の学生たちを迎え、彼らが宿泊施設に入ったところに、令和2年度の授業は開始された。

3. 対面授業の停止

しかし4月7日には東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が発出され、4月16日にはその対象が全国に拡大されることになった。

これを踏まえ、山口大学でも授業開始の初日のみ登校による対面授業を実施したものの、翌日からは全学生に対してキャンパスへの入構禁止措置がとられ、授業については休講や延期も考慮に入れた深刻な態勢がとられた。

国際総合科学部では、令和元年度末の段階から、対面授業からオンライン授業への切り替え実施のためのオンライン会議システム「Zoom」の使用を提案し、承認を求めていたが、緊急事態宣言の発出対象の全国拡大をきっかけにその全学的な導入が決定され、これ以降、前期の授業についてはオンラインのみによる実施となった。

こうしたなかで、それまでオンライン授業の実施実績もノウハウもない国際総合科学部が、事案発生の早期段階から教務委員会を中心に「Zoom」を使用したオンライン授業を提案したのは、留学を中断して帰国し、各地の宿泊施設に留まっている学生たちの学習機会を保障するするためでもあった。彼らのうち最終盤に帰国してきた学生たちについては、授業開始のタイミングでなお外出が禁止された状態にあり、実際、各授業の担当教員が全学的な承認にもとづくアカウント取得を待たず個人で取得したアカウントで「Zoom」の使用によるオンライン授業を開始したころには、該当学生たちは宿泊施設からネット接続し、授業に参加していた。

どのような困難であれ、またどれほどの困難であれ、とにかく学生たちが授業を受ける機会を設けることを優先し、あらゆる手段を考慮したこの時期に、ひとまず「Zoom」の使用によって最低限の目的は達成できることが国際総合科学部では確認された。

そしてそれを可能にしたのは、教学委員長を中心として学部が早期から問題意識を明確化し、これを学部所属教員が共有していたからであろう。年度当初に唯一、対面授業が実施された授業日初日には、すでに学生に対して担当教員により授業内で「Zoom」の利用方法が説明された。とはいえ、国際総合科学部ではそれまでオンライン授業の実施実績もノウハウもなかったことから、令和2年度の最初のFDはまさに「オンライン授業の導入（Zoomの使用）について」のものとなったが、これについては後述する。

4. 公開授業

(1) 「Zoomを用いた公開パイロット授業」

実施日時：4月20日（月）14:30～16:00

実施場所：オンライン（「Zoom」利用）

授業実施者：川崎勝（令和2年度 国際総合科学部 教務委員会委員長）

実施日令和2年度の最初のFDの開催からほどなく、4月20日には公開授業として「Zoomを用いた公開パイロット授業」が実施された。「Zoom」を利用した授業を開始したばかりでその内容の充実どころかシステムの利用方法についてもままならない状況にあった教員のために、まずはオンライン授業に慣れることもひとつの目的として、令和2年度の国際総合科学部の川崎勝・教務委員長が、担当講義の「Zoom」利用によるオンライン実施授業を学部所属の全教職員にも公開したものである。

一種のパイロット的な授業として公開されたこの授業は、さらに「Zoom」の録画機能を使用して記録され、オンライン授業の別のあり方の提案として、事後的に「Moodle」上でもオンデマンド式に公開することも想定されていた。また、当日の授業資料は、その前日までに「Moodle」上にアップロードされるなど、オンライン授業を機能させるためのツールや方法の有機的な組み合わせが模索された。

対面授業を前提とした従来の授業公開における FD として想定されるものとは目的も機能も効果も異なるが、しかし今回のものほど切実に切迫した公開授業は、おそらくこれまでなかっただろう。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. オンライン授業に関するFD研修会

(1) 「オンライン授業の導入(Zoomの利用)について」

実施日時：4月15日(水) 15:30~17:00

実施場所：オンライン(「Zoom」利用)

講師：杉井学(令和2年度 国際総合科学部 コロナ対策チーム(教務))

授業開始にあたり、国際総合科学部所属教員全員を対象として「Zoom」を利用したオンライン授業の導入についてのFDが実施された。ここではまず、現状ではオンライン授業がもっとも可能な学生への学習機会の保障となることが説明されるとともに、特に簡便で伝達音声の質がよくインターネットの先の聴講者にも講師の話が聞き取りやすい「Zoom」の利用が、国際総合科学部におけるリアルタイムでのオンライン授業の配信にあたって標準となることが共有された。

これを前提に、講師の杉井学教員により、「Zoom」の基本的な使用方法が説明された。

そこでは単なる操作方法の説明のみならず、実際のオンライン授業の実施にあたって「Zoom」の使用について注意すべきことや、逆に授業を実施するために有益な機能の紹介など、これ以降このツールを使用して滑らかな授業運営に資するのみならず、教育的効果を高めるための有機的な要素が具体的に提示された。

また、参加教員からは多くの質疑も提示されたほか、研修会の終了後も「Moodle」に場を移し、授業実施者にとって有益なさまざまな情報が多くの教員によって書き込まれるなど、国際総合科学部が直面した困難を乗り越えるために、インターネットの利点が研修会でも活かされた。

単に不慣れなひとつのツールの使用マニュアルとなるのではなく、その使用をとおして教育のために教員ができることはなにか、教員各自が自問し、解決に向けて模索し、きわめて制約された状況のもとで教育の質を最大限に高めるべく、誰もが積極的に関与しようとしていることがうかがえる有意義な研修会となった。

(2) 「Moodle 基本操作と自動出欠確認機能について_1」

実施日時：5月1日(月) 16:30~17:30

実施場所：オンライン(「Zoom」利用)

講師：杉井学(令和2年度 国際総合科学部 コロナ対策チーム(教務))

オンライン授業の実施にあたっては、対面授業と比較してさまざまなメリット・デメリットがある。そのうち、デメリットのひとつに、対面授業では学生証による確認システムを用いるなど容

易に確認できた学生の授業への出欠が、特に大人数の授業については正確な把握の難しいことが挙げられる。

オンライン授業における「Moodle」のもっとも基本的な使用方法として、たとえば講義資料の学生への配布や、学生からの課題レポートの提出など、デジタル化されたファイルのやりとりをきわめて簡便で有効なツールである。そうした使用方法があらためて説明されたうえで、煩雑にはなるものの、「Zoom」と併用しながらこれを学生の出欠確認のツールとして使用するための手順が解説された。

(3) 「Moodle 基本操作と自動出欠確認機能について_2」

実施日時：5月15日(月) 16:30~17:30

実施場所：オンライン(「Zoom」利用)

講師：杉井学(令和2年度 国際総合科学部 コロナ対策チーム(教務))

上記FD研修会の開催にあたって参加できなかった教員対象に、同内容のFD研修会をあらためて実施。新型コロナウイルスの全国における感染状況が徐々に落ち着き、また「Zoom」でのオンライン授業の実施にも慣れつつあった段階で、参加した教員の側にも「Moodle」の可能性を見積もるいくぶんかの余裕が生じた。

2. カリキュラムに関するFD研修会

(1) 「改定カリキュラムにおける留学のあり方について」

実施日時：11月11日(月) 14:30~16:00

実施場所：国際総合科学部棟4F

講師：小川仁志(令和2年度 国際総合科学部 国際交流委員会委員長)

新型コロナウイルスによる感染状況が収束しないまま、一定程度の安定期にあったところに、国際総合科学部所属全教員を対象とした、新型コロナ禍以降の学部における留学の位置づけやその意義の再定義について、国際交流委員会においてまとめられた今後の方針について説明し、全教員によって協議するFD研修会が開催された。

令和2年度の3年生が留学期間を半年残して留学を中止し、全員が帰国したほか、3Qより留学予定だった2年生についても出国を足止めされ、結果的には留学できないまま留学年次を過ぎてしまうことが懸念されている。さらに、彼らとの交換留学生として国際総合科学部を訪れていた海外からの学生たちも早期に出国し、また新たには入国できないなど、単に山口県内や日本国内のみならず、世界各地の感染状況により、当面は留学自体が不可能となっている。

このことは、1年間の留学を含む4年間での大学卒業を可能とした学部の修学カリキュラムについて、これを国際総合科学部が最大のセールス・ポイントに掲げ、さらにそこに魅力を感じて受験した学生が多く入学してきている現実を鑑みれば、学部にとって根本的な、存立に関わる危機である。

また、2年生後期から3年生前期までの学生のほとんどが留学することから、履修カリキュラムも、この期間は留学先で取得してきた単位を学部の開講科目に読み替えることを前提に組まれている。したがって、留学が中止となりこれらの学生がこの期間も学部の授業を履修しようとする場合、彼らが履修できる授業が大きく不足する事態が予期された。

教務委員会では年度当初からこれを見越して、従来は読み替え専用だった科目を令和2年度には急遽授業として実施し、また留学しなかった学生のための少教授業の定員枠を増やすなどして対応した。

しかし新型コロナウイルスの影響はその後むしろ強まる傾向にあるように、単年度限りの対応では対処しきれないものとして、国際交流委員会を中心に、新型コロナ禍以後の国際総合科学部に

における留学のあり方について、2年生後期から3年生前期までの学生のほとんどが留学することを前提とした従来の方針を大きく転換し、この期間も必ずしも留学する必要はないものとして、留学およびこの期間のカリキュラムについて変更する旨をまとめた。

この研修会では、2年生後期から3年生前期の1年間を「グローバル・イヤー」と位置づけ、従来は学部ではほぼ必須のものとしてきたこの1年間の留学について、希望者にはそれを可能なものとしつつ、2年後期や3年前期といった半年の留学や、あるいは留学しないことの積極的な選択も可能とし、そのぶん、この期間に履修可能な、グローバルをトピックとしたさまざまな授業を開講するものとしたことが述べられた。

これに対する質疑応答のうえで、方向性としては了承されるとともに、学生の利益のためにより入念な検討を重ねてカリキュラムの改定に向かうこととなった。

3. 教育改善に関するFD研修会

(1) 「新時代の大学における授業のあり方について」

実施日時：12月16日（水）13:30～14:00

講師：熊井将太（教育学部准教授）

8年前の「高大接続改革」によって高校の授業は大きく変化しつつあるが、これ以降に高校を卒業した大学生がすでに在籍している現在、学生のニーズはそれ以前のものとは異なるものと思われる。このため、高校の授業の変化を知ることは大学教育の改善につながるものと考えられる。高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一連の包括的事象ととらえたうえで改革すべきとする「高大接続改革」は、先の予見できない社会状況において、生徒や学生の「生きる力」の育成を求めている。

「学力3要素（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③主体性・協働して学ぶ態度）」を軸に、高校教育ではそれを育成し、大学入学者選抜ではこれを多面的に評価し、そして大学教育にてそれらをさらに向上、発展させたうえで社会に送り出すような人材育成の流れが、そこでの前提となっている。

現在、山口県下の高校では、教員が話すだけの学習ではなく、探求科の設置など課題解決能力向上のための授業を行ったり、そのための教員の指導力を向上させる取り組みを行っている。山口大学に多くの生徒を入学させている高校では、教育改革や授業改善に熱心で、これに意欲的な教員が多い傾向にあるという。学力の育成に関して大学との接続を意識した高校もいくつかあるようだ。

高校のみならず、小・中学校でもアクティブ型の授業が設定されており、高校もその流れを受けている。現在ではグループ学習やプレゼンテーションを好む生徒が増えているともいい、少なくともそうした授業形式に対する抵抗感は減ってきているようである。

大学の授業においても、すでにそうした授業の実施形態に慣れている学生の多いことに気づく。アクティブ型の授業では、学生に話すことを強いたところで授業は進まず、問いかけや役割分担など、教員側の授業設計が重要となる。知識の教授のみならず、自ら考えることや他者と協働することの意義をどのように伝え、そのために授業をどのように組み立てていくかがポイントとなるようである。

こうしたあたりは、山口大学のような地方国立大学に進学しようとしている真面目な生徒の苦手とするところのようで、彼らを授業に巻き込んでいく仕掛けが必要となるかもしれない。

国際総合科学部では、すでにいくつかのプロジェクトのなかで県内の高校と連携しており、それにあたってさまざまな問題も現場では生じていることが、レクチャー後の質疑応答のなかで明らかとなった。

第3節 教育改善に関する活動

ここまで述べてきたように、令和2年度は新型コロナウイルスによって例年ではありえない多くの重大な困難が大学教育の現場に発生した1年となった。

したがって、教育改善といった観点からは、ここではやはり、圧倒的な不可抗力によるきわめて制約的な状況のもと、いかに学生に対する教育の機会を保障し、その効果を最大限に高めるのか、そのために、従来の硬直的なシステムのなかでいかに迅速かつ柔軟に対応できるか、そうした動向のうちに認められるべきだろう。

国際総合科学部では、「Zoom」の早期導入の提案とともに早急にコロナ対策チームが結成され、対面授業が禁止されるという従来の教育のあり方からの根本的な変化に対して、可能な限り迅速に対応してきた。

また、留学期間を途中で切り上げて残念ながら途中で帰国せざるをえなかった学生たちにも学習機会を保障し、また卒業のための単位取得スケジュールにも無理を生じさせないよう、読み替え用に逃えられていたにすぎない授業を新規に多数開講し、彼らに履修上の不利益が生じない策を講じてきた。

そのうえで、1年間の留学を含む4年間での大学卒業を可能とした学部の修学カリキュラムについて、これを国際総合科学部が最大のセールス・ポイントに掲げ、さらにそこに魅力を感じて受験した学生が多く入学してきている現実を鑑みれば、当面は留学自体が不可能となっている現状は、学部にとって根本的な、存立に関わる危機である。

この点をめぐって、既述のように国際総合科学部は従来の方針を大きく変更する決断をした。2年生後期から3年生前期の1年間の「グローバル・イヤー」と位置づけ、従来は学部ではほぼ必須のものとしてきたこの1年間の留学について、希望者にはそれを可能なものとしつつ、2年後期や3年前期といった半年の留学や、あるいは留学しないことの積極的な選択も可能とし、そのぶん、この期間に履修可能な、グローバルをトピックとしたさまざまな授業を開講するものとした。

そしてこれにともなう開講科目の調整が、いまなお進行しているところである。

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度 各学部・研究科FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
国際総合学部	オンライン授業の導入(Zoomの利用)について		0	Zoomの基本的な使用法が理解できた
	Zoomを用いた公開/パイロット授業		0	Zoomによるオンライン授業本体の実施手順が共有された
	Moodle基本操作と自動出欠確認機能について ¹		0	オンライン授業を成立させる管理支援ツールの利点が共有された
	Moodle基本操作と自動出欠確認機能について ²		0	オンライン授業を成立させる管理支援ツールの使用法が理解できた
	改定カリキュラムにおける留学のあり方について		0	グローバル・イヤーについて考え方の共有ができた
	新時代の大学における授業のあり方について		0	高次接続への理解が深まった
		計	0	

第5節 来年度の課題

既述のように、令和2年度の国際総合科学部は、根本からその存在意義を揺さぶるような困難に直面し、いまなおその脅威と懸念は払拭されていない。そうしたなか、いつになるのかわからない新型コロナウイルス禍の終息を手をこまねいて待つのではなく、学部の根幹にまで自ら手を入れ、困難に対処しこれを乗り越えるべく変化しようとしている渦中にある。

まずは「グローバル・イヤー」のなかであらためて位置づけられた留学の多様化が、在学生や受験生にどのように受け入れられ、どのように機能するのかを見極めつつ、それと同時に、どうすればそれが彼らに適切に受け入れられ、うまく機能するのかについて、カリキュラムの全体を組み立てなおす作業を進めている。

おそらくは来年度についても、これが国際総合科学部の FD の最優先の課題であり、もしくはこれこそが国際総合科学部の FD それ自体となるだろう。

第12章 人文科学研究科のFD活動

第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

第2節 研究科主催FD研修会

(1) 人文科学研究科（人文学部）FD部会主催による研修会

研修名：「院生指導を考える2」（令和元年度からの継続テーマ）

日時：令和3年2月12日

場所：人文学部第3講義室

報告者：FD部会

参加者：17名

内容：

本研修会は、例年、結論や解決を目指すのではなく、各教員の経験談や悩みを「共有する」ことを第一の目的として行われている。時間の許す限り、参加者より積極的に発言があり、短時間であったが、様々な意見・体験談を共有することができた。留学生指導における問題（日本語能力、文化の違いによる諸問題、修学意識の問題）、コロナ禍での研究指導、様々な専門分野の学生が集まる授業における専門性維持の問題、指示待ち（素直すぎる）院生問題など。特に、本年度は、留学生に関わる指導や人間関係構築の悩みが多く報告された。

本年度、取り上げられたどの問題にも、その根底には、指導教員が学生としっかり向き合い研究指導を全うするために奔走している姿が伺えた。院生教育の本質という点においては、手取り足取りの教育指導になることは健全であり、本質的には、そうありたい、あるべきとの発言もあった。

教員同士が情報共有でき、同僚からの助言が気軽に受けられることで、個人対応になりがちな院生指導の中で、教員側も救われるという報告があった。

今回の研修会で共有された項目は、FD部会によってまとめられ、今後の研究科運営改善のため、学部・研究科教学部長を中心とする組織で精査し、必要な点はさらに議論される予定である。次節の学生アンケートの結果も同様に検討され、毎年、学生からの要望に対しても、可能な限り対応している。

第3節 教育改善に関する活動

(1) 学生アンケート

人文科学研究科では、1授業あたりの受講学生数が少ないことから、修学支援システムを利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。令和2年度もこれを踏襲した。

アンケート実施時期と回収率については、平成30年度の回収率が50%と低かったことをうけ、令和元年度は、主指導教員に各自院生へのアンケート用紙を配付を依頼する方法を試みた。実施期間を10日間ほど設け（令和2年1月末日～2月10日まで）、院生室に回収袋を用意した。アンケート提出者は、8名で、回収率は80%と改善された。さらに、令和2年度は、同時期に、指導教員を介さず、FD座長より直接院生個別にメールでのアンケートの配布・回収を試みた。アンケート提出率は88%

で、令和元年度の提出率をわずかではあるが、上回る結果となった。

アンケートの質問項目と回答は以下の通りである。

Q1：人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、お教えてください。

- ・先生方と一対一で行われることが多いため、先生方とのコミュニケーションが図りやすく、自分の意見や疑問などが容易に伝えることができる。教員との距離が近い。
- ・どの先生方も、各自の専門の研究時間に対して大いに配慮していただき、自身の専門分野とは直接関係しない授業によって、自身の専門研究に支障が出るといったことはあまりなかった。
- ・修士課程として、研究をする上での留意点の指導もあり、ありがたかった。
- ・研究に必要な書籍を購入して貰える機会にも恵まれていた。大変ありがたかった。近隣の図書館になかったり、あるいは禁退出で借り出して使用できないといった支障が大幅に軽減され、ありがたかった。
- ・大学院生になると、学生証を利用して人文書庫をどの時間帯でも利用できるようになった点も研究上、大変ありがたかった。可能であれば、学部性の頃から、各研究室への所属が決定次第、学生証を利用して人文書庫を使えるようになれば良い。
- ・少人数で質問しやすい雰囲気と、一方的に講義を聞くというより先生との会話をしながら授業を受けられるという点が良かった。
- ・教員が授業に熱心また優しい。
- ・少人数の授業で、いつも質問を丁寧に教えてくれることはありがたかった。
- ・授業で、先生方にしっかり指導していただき、非常に良かった。
- ・演習で、個別に充実した指導を受けることができる点。
- ・学生の意思を最大限尊重してくださる点。

Q2：人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、お教えてください。

- ・教員の研究室で授業が行われる場合は、ちゃんとした（きれいな）席と環境を整えてほしい。
- ・共通で履修する講義はあまり必要ないと感じる。それぞれの専門分野に関する知識や能力を身に付けてたくて大学院に進学している人が大半だと思う。
- ・「人文科学総論」では、専門外の分野で、課題が続くと大変だった。
- ・ゼミでやはりいろいろなアドバイス、意見が聞けたら一番いいと思います。ですから、人文科学研究科の授業で、他の分野の方とお互いに勉強ができたらいいいと思います。
- ・院生がもっと増えたら良い。切磋琢磨しあえる仲間がもっといたらと常々思う。

Q3：研究環境（例えば、大学院生用研究室など）についてご要望があれば、お教えてください。

- ・研究室を清潔に保つために、掃除用具（掃除機やモップ）などを配備してほしい。
- ・現在のPCは正規のMicrosoft Officeのソフトが入っておらず、中国語のものになっているので困っている。
- ・新しいプリンターが大変嬉しかった。ありがとうございました。
- ・大学院生用研究室に丈夫なホッチキスを用意していただければありがたい。
- ・研究室の机がやや低い。

Q4：その他、ご意見ご要望ご感想があれば、お教えてください。

- ・コロナ禍において、オンライン授業という今まで経験したことがない形体での授業であったが、大きな支障はなく学びたいことが学べているため、とても満足している。

- ・コロナ禍でのオンライン授業については、コロナ禍以前のように、大学と自宅の間を行き来するロスタイムを削減でき、浮いた時間を、自身の研究や課題に集中的に取り組める時間として充てることができ、個人的にはよかった。
- ・いろいろお世話になり誠にありがとうございました。
- ・修士の院生が学部生や博士課程の学生、あるいは研究生の方々ともっと交流できたら良いと思う。
- ・また、オンラインになったおかげで、いろいろな学会で勉強できて良かったです。
- ・新しいプリンターが導入されたことで、院生全体の院生室の利用頻度が上がった。
- ・プリンター助かりました。
- ・オンライン授業へのご対応ありがとうございました。オンライン授業に関して、特に改善点はない。

(2) 教員自己評価

教員自己評価アンケートの実施率を見ると、平成30年度の実施率24%、令和元年度は16.7%で実施率は極めて低い上、減少傾向にあったが、令和2年度は、前期60.90%、後期65.00%と飛躍的に実施率が上がった。これは、教員自己評価の入力が修学支援システムに直結する形で取り込まれたことにより、アンケート本体への接触が簡易になった点があげられるかもしれない。また、コロナ禍の中で、教員側が修学支援システムの活用に慣れてきた点も要因として考えられる。

第4節 FD実施経費報告書

人文科学研究科で実施したFD活動にともなう経費執行はない。

第5節 来年度の課題

令和2年度度のFD研修会での収穫として、高い専門性を保ち、少人数個別指導が徹底されている本研究科体制の中で、コロナ禍の変則的な環境の中にあっても、指導学生との密接な人間関係、きめ細やかな指導による贅沢な研究体制は維持することができたことが、院生アンケートの結果からも伺えた。その反面、留学生指導に関する問題は年々深刻になってきていることが、研究科主催FD研修会での意見交換で浮き彫りにされた。研究機関としての質の維持、すなわち、志の高い学生（日本人および一部留学生）に対する責務を全うし、学術的に充分に応えられる研究科を目指す必要がある。本研究科は教育職員専修免許状（英語・国語・社会・地理歴史・公民）および専門社会調査士資格の取得が可能な研究科としても位置づけられている。高度な専門知識を有した有能な教員・社会調査士を地域社会に送り出す責任を担っていることを忘れてはならない。単に異文化体験や文化交流を目的に留学を志す学生に対しては、意識変革を求めざるを得ないのは、本研究科には、研究活動を基盤として養われた観察力、分析力、忍耐力、創造力を用いて、現代社会に潜む人類に投げかけられている真の問いを複眼的に理解し、解決へ向けて思考できる人材育成を果たす義務があるからに他ならない。その質を落とすことは、地域社会の発展を結果的に妨げる要因となる危険性を含んでいる。現在、改組の準備が進められているが、来年度も、この機会をポジティブに捉え、人類の未来への人材育成という観点から、この現代における人文科学研究の真の意義と責任を各研究科構成員が再認識する時としたい。

今後も学生と教員間の情報交換・情報共有を可能にする仕組み作りに向けての検討を重ねていきたい。また、院生アンケートを継続させ、院生の要望をよく聴取し、院生の研究や研究環境の充実・改善にむけた提言を行っていく。

第13章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

専門職学位過程（教職大学院）教職実践高度化専攻では、原則、すべての授業を公開しており参観を認めている。教職大学院担当教員であれば、その授業担当者に断ってふだんから多数参観をしている。また教職大学院担当教員以外の参観希望者には、3週間ほど前に授業担当者に参観希望を伝え、許可を得たうえで参観してもらうようにしている。

従来の授業公開は、特定の期間、特定の授業を公開するかたちで行われてきたと思われるが、それでは、参観の予定が合わない、ふだんとは違うよそゆきの授業を意識してしまうといったことが生じてしまう。授業公開を日常的なものにすることで、授業者としてのふだんの努力、教育力の向上を、また学生の緊張感維持と学習成果の向上を期待して制度化したものである。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

第1回FD研修会

「コミュニティ・スクールが創り出す変化と今度の在り方」

日時：令和2年10月14日（水）14:30～16:00

講師：相田康弘（光市立浅江中学校教頭）

参加者 教職大学院関係者等：約20名

研修内容

- (1) （地域連携教育の視点で見た）高大接続改革
学校と企業・組織などを公式につなげる場である学校運営協議会において、地域創生・課題解決、ごローカルな視点をもつリーダー、地域・社会に求められる人材の育成が必要。
- (2) 「地域に開かれた学校」から「地域とともにある学校」へ
何のために「学校・課程・地域の連携・協働」の取組が必要なのか。
なぜ学習指導要領に「社会に開かれた教育課程」の理念が登場したのか。
教員委員制度は何のためにあるのか。
なぜ学校運営協議会制度の仕組みが必要な理由。
関係者が意見やアイデアを出し合い、目的や目標を共有しみんなで方向性を決めるには、公式な協議の場が必要となる。
- (3) 「コミュニティー・スクールの仕組みの良さ
学校区の保護者、地域住民の意見を公式に学校運営に反映できいる。
計画段階から教育活動に参画することで、保護者・地域住民も教育の当事者として関わられる。
学校運営協議会は、学校と対等の立場で議論できる。
学校運営のPDCAサイクルの中で、学校と地域の協働により取組や活動を効果的に実施できる。
- (4) コミュニティー・スクールあさなえ学園の紹介

第2回 FD 研修会

「山口県における若手教員の授業力向上に向けた取組」

日時：11月11日（水）15:00～16:10

講師：大田 誠（山口県教育庁義務教育課指導班指導主事）

参加者：教職大学院関係者等：約20名

研修内容

- (1) 新学習指導要領における「見方・考え方」と授業づくり
- (2) 新学習指導要領における学習活動のあり方
 - 学習評価の基本的な考え方
 - 観点別学習状況の評価の観点
 - 学習評価の基本構造
 - 知識技能の評価
 - 思考・判断・表現の評価
 - 主体的に学習に取り組む態度の評価
- (3) 主体的・対話的で深い学びのための ICT の活用
 - 1人1タブレット端末を使った授業

第3節 教育改善に関する活動

教育学研究科の改組にともない、カリキュラムマップを作成している。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

IYOKAN2 システムで確認した過5年間の学生授業評価・教員授業自己評価の実施率を示す。



平成31年度には減少していた授業評価の実施率は、学生・教員ともに上向いている。とはいえ教員

についてはいまだ過半数が入力しない状態にある。IYOKAN2 システム等からの情報に基づく、未入力
の授業担当者への直接実施を促す対策を講じることが必要である。

第5節 FD実施経費報告書

FD活動の経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

教育学研究科は、これまでの教職実践高度化専攻（学校経営コース、教育実践開発コース）、学校教育
専攻、教科教育専攻教科教育専修からなる研究組織から、教職実践高度化専攻、学校臨床心理学専
攻臨床心理学専修の研究組織に改組した。この変革をふまえたFD研修会開催が引き続き必要である。

教員自己授業評価の入力率は、やや上向いたとはいえ、依然低水準で推移している。入力率の向上
に関する組織的な取り組みは、教育学研究科においても大きな課題であり、早急にその原因を特定し、
改善策を講ずべき課題である。

第14章 経済学研究科のFD活動

第1節 授業公開

授業公開に関しては、従来から公開希望者や参加者の減少など形骸化が進んでいたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために対面授業を中止、オンライン授業に切り替えることとしたために授業公開は実施しなかった。しかし、一方で急遽、オンライン授業を実施することになったために、その研修会を開催したり、Moodle上でオンライン授業についての情報交換を行うなど、授業公開に近い活動を行った。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

2-1 遠隔講義等に関するFD研修会

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために急遽オンラインでの授業実施を行うことになった。多くの教員がオンラインでの授業実施に対して知識や経験が不足しているため経済学部と合同で「遠隔講義等に関するFD研修会」を4月9日（木）午後2時半から第2大講義室にて全教員を対象に行った。

内容

- Moodleの使用例
- ZOOMの利用実験
- 修学支援システムの利用例
- 意見交換

2-2 教員向け英語研修

経済学研究科の公共管理コースでは、全ての講義を英語で開講している。担当教員を中心にその英語能力を高め、留学生向けの英語授業や留学生とのディスカッションをより円滑にするために同研修を以下通り行った。

第1回 研修会

日時：2020年9月10日（木） 10時から12時

場所：経済学研究科・東アジア研究科棟307号室

講師：尊田 望

参加者：6名

第2回 研修会

日時：2020年9月17日（木） 10時から12時

場所：経済学研究科・東アジア研究科棟307号室

講師：尊田 望

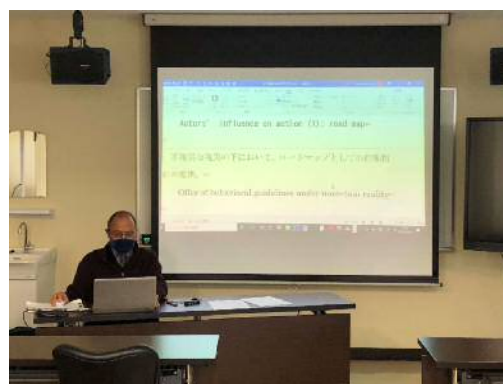
参加者：6名

第3回 研修会

日時：2020年9月24日（木） 10時から12時

場所：経済学研究科・東アジア研究科棟307号室

講師：尊田 望



講師の尊田先生

参加者：6名

第4回 研修会

日時：2021年2月19日（水）

10時から12時、13時から14時

場所：経済学研究科・東アジア研究科棟
307号号室

講師：尊田 望

参加者：5名



研修会の様子

第5回 研修会

日時：2021年2月24日（水）

10時から12時

場所：経済学研究科・東アジア研究科棟307号室

講師：尊田 望

参加者：5名

2-3 教育改善FD研修会

経済学部と合同で2021年1月20日（水）13時30分から14時まで教育改善FD研修会をZOOM配信方式により行う。講師は、山口大学教職センター・アドバイザーの森重祐二先生、テーマは「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校における学校・教育改善の実際～」。参加者62名（うちZOOM参加60名）。



講師の森重先生



オンライン参加の様子

第3節 教育改善に関する活動

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために急遽オンライン授業を実施することになったが、とりわけ経済学研究科では、渡日出来ない外国人留学生が多く、国境をまたぐオンライン授業を円滑かつ迅速に実施していく必要があった。そのため、経済学研究科では、経済学部と合同で「遠隔講義について（COVID-19 対応）」というコースを Moodle 上に設け、その中で「ZOOM の利用について」「修学支援システムの利用について」「動画作成について」「学生たちの様子について（ケアになど）」「教員として（フリートーク）」「資料倉庫」の5つのフォルダを設け（以下参照）、情報や意見交換を行うことで遠隔授業に関する教育改善を図った。

遠隔講義について (COVID-19対応)

Home > 経済学部 > 遠隔講義について (COVID-19対応)

ナビゲーション

- Home
- ▶ ダッシュボード
- ▶ サイトページ
- ▼ 現在のコース
 - ▼ 遠隔講義について (COVID-19対応)
 - ▶ 参加者
 - ▶ パッジ
 - ▶ 一般
 - ▶ ZOOMの利用について
 - ▶ 修学支援システムの利用について
 - ▶ 動画作成について
 - ▶ 学生たちの様子について (ケアなど)
 - ▶ 教員として (フリートーク)
 - ▶ 資料倉庫
 - ▶ マイコース

ニュースフォーラム

ZOOMの利用について

- ▶ 操作方法について
- ▶ トラブルについて
- ▶ 意外とよかったと思える点について (メリット?)
- ▶ アイディア・ヒント集

修学支援システムの利用について

- ▶ 課題提出について
- ▶ 授業アンケート (出欠確認に利用) について
- ▶ 小テストについて
- ▶ 講義資料配布について
- ▶ レポート提出について

管理

- ▼ コース管理
 - ✎ 編集モードの開始
 - ⚙ 設定を編集する
 - ▶ ユーザ
 - ▼ フィルタ

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
経済学研究科	教員向け英語研修	講師謝金	59	
	教員向け英語研修	書籍	5	
		計	64	

第5節 来年度の課題

来年度は、対面授業と遠隔授業を同時に実施していくハイブリッド型の授業が主体となっていく。ハイブリッド型は、対面授業や遠隔授業のみとは異なる授業運営の難しさが想定されるため、一層の情報や意見の交換を通して教育活動の改善をはかっていく必要がある。

また、Society5.0 時代到来の中、新型コロナウイルス感染症問題とは関係なく DX 教育を推進していく必要があり、より効果的な遠隔授業の方法 (例えば、修学支援システムの利用した授業外学習時間の確保、適正な成績評価など) を来年度も検討していきたい。

第 15 章 医学系研究科の F D 活動

平成 21 年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科の F D 企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）の F D 活動に参加する形で F D 活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第 7 章）の F D 活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第 6 章）・工学部（第 8 章）ないしは創成科学研究科（第 16 章）の F D 活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第 9 章）ないしは創成科学研究科（第 16 章）の F D 活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第 16 章 創成科学研究科の F D 活動

理学系

第 1 節 授業公開

1. 基盤科学系専攻情報科学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「情報科学ゼミナール I、II」

1) 概要

①日時： 令和 2 年 12 月 4 日(水)

②対象学生： M1, M2

③授業概要： 情報科学ゼミナール I, II の履修者が、各自の研究課題に関するオンラインでオーラル発表を行い、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。研究発表能力の向上、および聞き手として友人の研究に建設的・批判的にかかわる態度の養成を目指した。

④授業の到達目標：

- ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
- ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。

⑤授業担当教員： 情報分野教員

⑥レビューの方法： 授業に出席の後、授業改善点等について議論する。

2) レビュー結果

①授業内容

・学生を 5 グループに分け、受講生一人にオンラインで 15 分間ずつ発表を行った。発表者以外の学生は、レビュアーとして、質疑応答を行った。

・総発表件数と発表スケジュールは以下の通りである。

第 1 グループ： 13:05-14:05 (発表 4 件)

第 2 グループ： 13:05-14:05 (発表 4 件)

第 3 グループ： 14:15-15:15 (発表 4 件)

第 4 グループ： 14:15-15:15 (発表 4 件)

第 5 グループ： 15:25-15:40 (発表 1 件)

②授業の進め方

・各レビュアーはそれぞれ発表に対して採点を行い、その結果は授業の成績の参考に使う。

・採点では、「発表には研究の概要が簡潔、かつ分かりやすくまとめられていたか?」、「説明(話し方)はわかりやすかったか?」、「発表者は研究内容を十分に理解して研究を行っていると思われるか?」の各項目に対して 5 段階評価を行った。さらに、発表の改善点、発表を聞いたコメントを発表者にフィードバックした。

・理学部物理・情報科学科では研究室の仮配属を開始したこともあり、3 年生に対してレビュアーとしての参加を呼び掛けた。3 年生が参加するため、発表者はより分かりやすい説明を心掛ける必要が

ある。

③その他、改善点

- ・本年度、コロナの影響でオンラインに開催になり、1グループあたりの発表者を極力少なくし、レビューの人数を多くした。
- ・近年は教員が参加しなくても学生間で自由な意見交換が行われている。情報科学ゼミナール I, II を通して M1 と M2 が参加し、より良い議論の場ができあがっていると思われる。
- ・一人あたりの持ち時間が15分間と若干短めであることから、発表内容によっては議論する時間が少なかったようにも感じられる。ただ、発表時間を長くとるためには発表グループ数を少なくする必要があります。そのため、引き続き、このタイムスケジュールで様子を見たいと考える。

2. 地球圏生命物質科学系専攻生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「地球科学ゼミナール I 及び II」

1) 概要

- ①日時：令和2年10月21日（水） 15:00～17:00 理学部15番教室
- ②対象学生：創成科学研究科地球圏生命物質科学系専攻地球科学コース1・2年生(22名) (2単位)
- ③授業の概要
「地球科学ゼミナール I 及び II」は通年で実施される修士論文に関する研究活動を発表する科目である。各発表者は、持ち時間30分程度でパワーポイントスライドを液晶プロジェクターに投影、発表し、発表後の質疑応答時間で、各教員や学生から質問やコメントに対して返答する。司会進行は、2年生が担当しており、発表及び質疑応答の時間配分などを仕切る。
- ④授業担当教員：川村喜一郎
レビューアール：大和田、志村、太田、阿部、永嶋、大橋
- ⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート（無記名）とレビューアールによるコメント（授業観察カード記載）、授業研究会の開催

2) レビュー結果

- ① 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、野外教材・案内資料の利用）
発表者一人一人によって、個人差があり、うまくできる学生とそうでない学生とがいる。また、15番教室ということもあり、うしろの方はパワーポイントスライドが見えにくいという意見もあった。
- ② 授業内容・授業構成に関して（難易度・過不足など）
今年から座長を2年生に任せているが、2年生が座長だと学生からの質問が出やすいなどの意見があった。
- ③ 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して
概ね問題ないようである。
- ④ 学習活動、学生の参加どに関して（学生の質問など）
座長を大学院生にしたとしても、学生からの質問が少ない、という意見が目立った。
- ⑤ 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）
大学院生の授業科目ということもあり、特に目立った意見はなかった。
- ⑥ 学生の授業アンケートについて
「自分自身が考えるこの授業の学習達成度」は、多くの学生が70%以上であった。また、「この実習の内容に興味をもてましたか」は、多くの学生が「もてた」、「非常にもてた」と答えた。話し方や教え方に関しては概ね良い回答であった。自由回答では、マイクスタンドのようなものがあるとよかつ

た、発表者と座長と2つのマイクがあると良い、オンラインよりも対面の方がよかった、質問者の声が聞こえにくい、などの意見があった。

3) 授業研究会

日時：令和2年11月18日（水） 9:30～10:00

出席者：大和田、志村、坂口、阿部、川村、永嶋、大橋、辻、岩谷

研究会概要：

学生アンケートと授業観察者によるコメント（授業観察カード）をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。授業内容については、今年度の取り組みとして、大学院生の司会進行が一定の成果を上げたことに対して評価がなされた一方で、発表会における会場の設定や全体の発表の流れ、個別のプレゼンテーション手法、学生の参加度の向上について、今後も継続的に改善の努力が必要であるとの意見が出されるなど、多くの指摘と議論があり、次年度につながる有意義な場となった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、創成科学研究科（理学系）として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

- ・教育改善FD研修会

第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科（理学系）単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

第4節 学生授業評価

2020年度に創成科学研究科が開設している科目136科目のうち、理学系学生授業評価対象科目は67科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは49科目で、実施率は73.1%であった。下図は2020年度までの過去5年間における学生授業評価アンケートの年度推移である。

図1は学生の授業外学習時間の年度推移、図2は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図3は学生の授業理解度についての年度推移、図4は学生の授業満足度に関する年度推移、図5は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。2020年度前期はコロナ感染症対応のために講義がオンライン形式となったことが、授業外学習時間(図1)の増加の理由と考えられる。学習目標達成(図2)、理解度(図3)、満足度(図4)は2020年度はやや低下したが、2016、2017年度と同水準であることからオンライン化による大きな悪影響はなかったと判断できる。



図 1



図 2



図 3



図 4

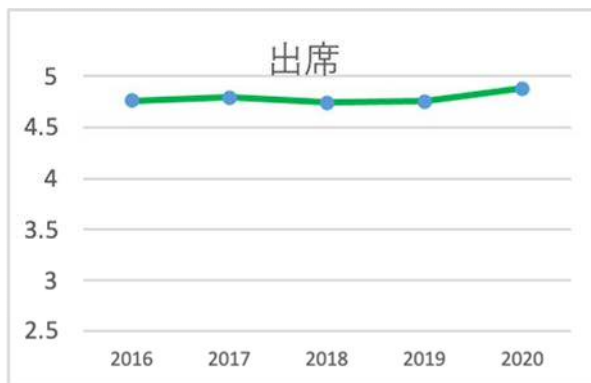


図 5

第 5 節 F D 実施経費報告書

今年度は、創成科学研究科（理学系）・理学部ともに、FD 実施経費を使用していない。

第 6 節 来年度の課題

創成科学研究科（理学系）の教員は理学部の教員でもあるため、理学部第 5 節の課題を創成科学研究科（理学系）の検討事項として掲げる。

農学系

第1節 授業公開

創成科学研究科（農学系学域）の各教員が、全ての教員と大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総理解の促進を図った。

(1) 植物香気成分多様性創出機構の解明と代謝工学への展開

日時：2020年6月11日（木）17:00～ 肥塚 崇男 准教授

(2) 植物の活性酸素シグナル伝達メカニズム—活性カルボニル種の関与

日時：2020年7月14日（火）17:00～ 真野 純一 教授

(3) 酢酸菌の代謝：細胞表層代謝 vs 細胞内代謝

日時：2020年10月30日（金）17:00～ 薬師 寿治 教授

(4) コケの話

日時：2020年11月17日（火）17:00～ 松井 健二 教授

(5) フラボン・スチルベンを基質とするグルコシルトランスフェラーとO—メチルトランスフェラーゼについての話

日時：2020年12月22日（火）17:00～ 小崎 紳一 教授

(6) 昆虫を用いた老化抑制と寿命延長をめざした研究

日時：2021年2月1日（月）16:00～ 井内 良仁 准教授

(7) 山口大学教員免許状更新講習

・小麦栽培からパンづくりまで 高橋肇 教授

・山口県のコムギ栽培 荒木英樹 教授

日時：2020年8月21日（金）9:00～16:00

第2節 学部・研究科主催FD研修会

創成科学研究科（農学系学域）では、農学部FD研修会と一緒に、各種FD研修会を以下の内容で開催した。

1. アラカルトFD研修会「著作権法35条改正と学校教育」

日程：2021年2月17日（水）13:30～14:10

場所：農学部大会議室

講師：小川 明子（知的財産センター長・国際総合科学部教授）

参加者：28名（アンケート回収 22名）

2. 令和元年度 教育改善FD研修会「新時代の大学における授業のあり方について考える」

日 程：2020年11月25日（水）13：30～14：00

場 所：農学部大会議室

講 師：美作健悟（教育学部准教授）

参加者：25人（アンケート回収23人）

3. 「外部資金獲得方法について」

日程：2020年10月21日（水）13:30～14:00

場所：農学部大会議室

講師：山本晴彦（創成科学研究科農学系分野 教授）

参加者：25名

4. 「科学技術振興機構（JST）事業の特徴について研修会」 日程：2020年11月25日（水）13:30～14:00

場所：農学部大会議室

講師：實近 健一（大学研究推進機構 産学公連携・研究推進センター URA）

参加者：25名

第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科（農学系学域）は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

令和元年度に設置申請中のジョイントディグリープログラムによる山口大学・カセサート大学国際連携農学生命科学専攻（仮称）のシラバスなどについての再検討を行った。大学院の授業科目のナンバリングも行った。

第4節 FD実施経費報告書

本年度は大学院教育に関するFD実施経費の申請はなかった。

第5節 来年度の課題

研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間においてもカリキュラムや教育方針が同一でない。このため、FD活動についても研究科独自の取り組みが今後必要になるように思われる。

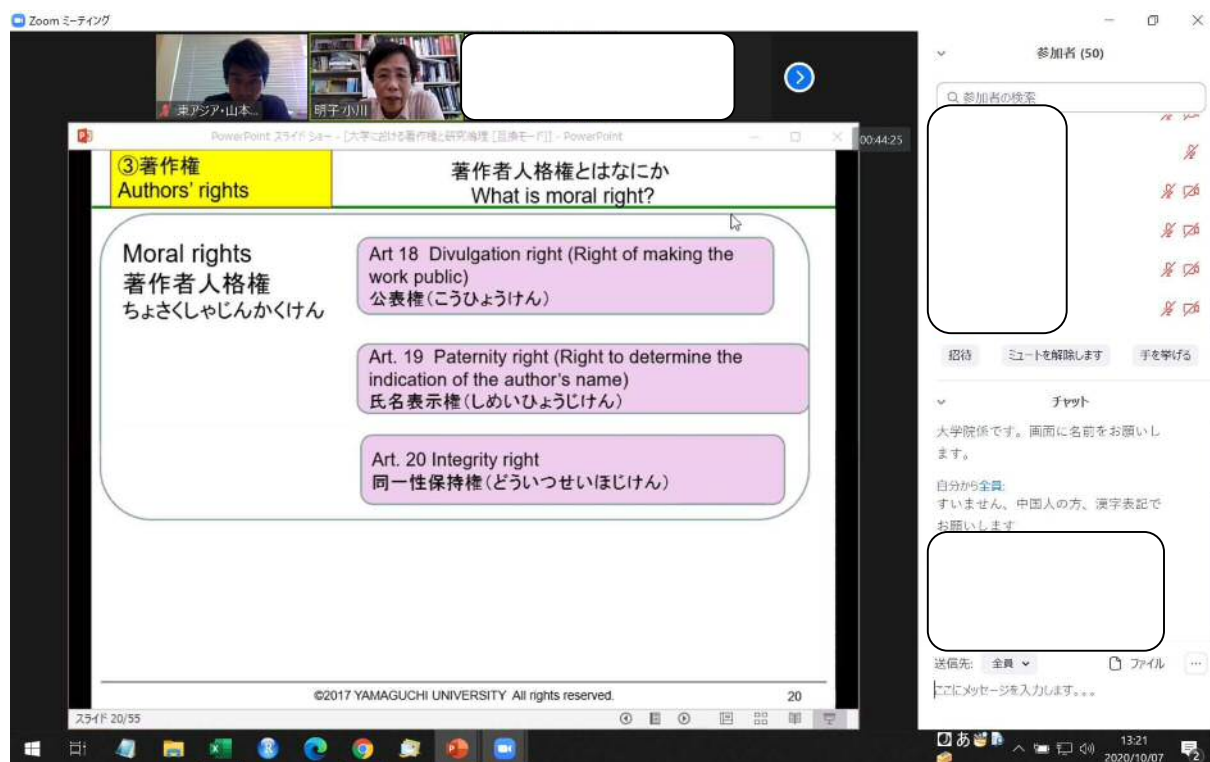
第17章 東アジア研究科のFD活動

第1節 授業公開

本研究科は基盤及びプロジェクト演習において、多くの教員が参加しているので、これが実質的な授業公開である。詳細は第3節で述べるが、そこでお互いの教員の教育方針について議論がなされているので、そちらを参照されたい。

第2-1節 研究科主催FD研修会：その1

昨年と同様に10月7日（水）12.50~14.20に研究科主催のFD研修会として、教員及び学生を対象とした「知財教育に関する教職員・学生向けセミナー」を開催した。担当の講師は本学の国際総合科学部国際総合科学学科の小川明子先生であった。当日の出席者は約60名であった。なお、新型コロナウイルスの影響で、換算拡大の防止のためにオンラインのzoomでセミナーを実施した。



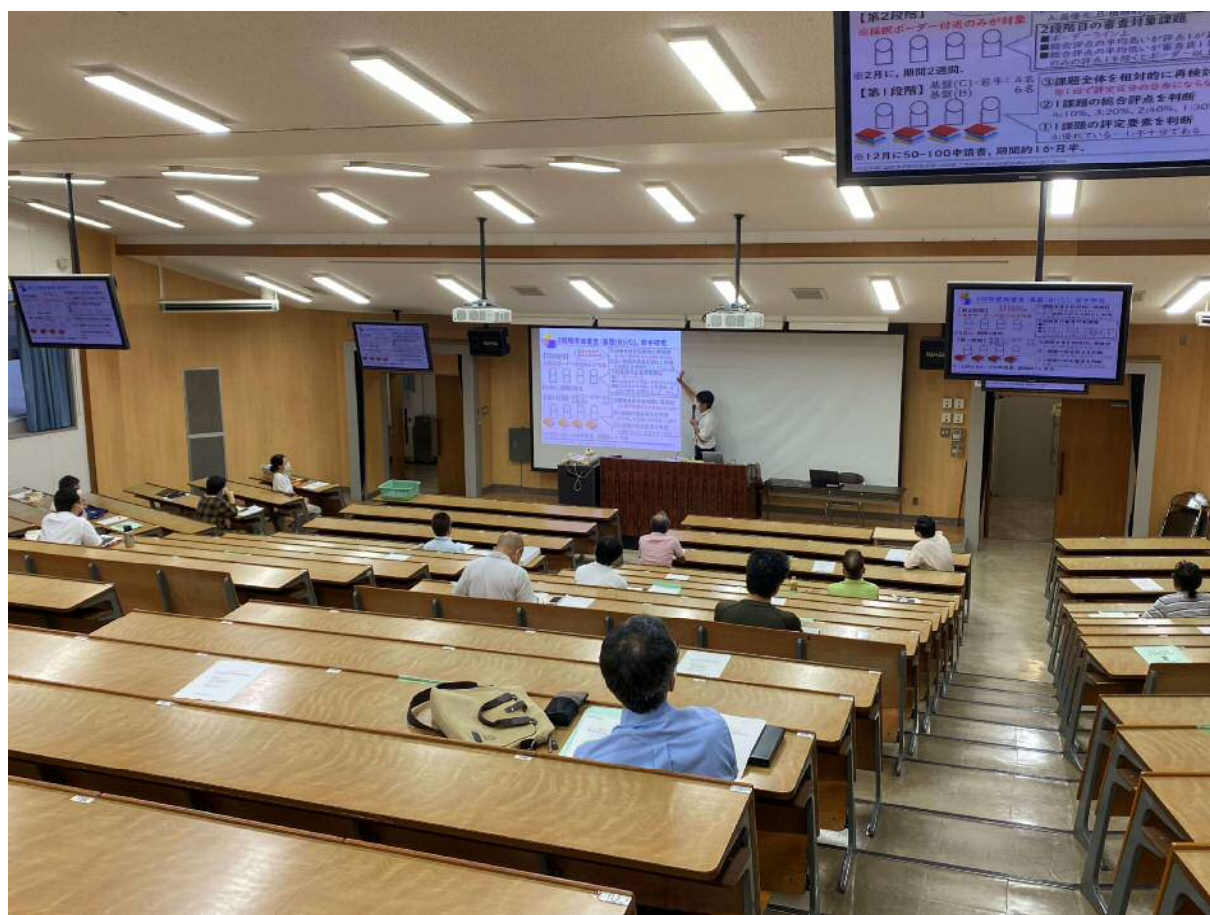
小川先生は非常に熱心に大学における著作権と研究倫理について日本語と英語の両方の言語でわかりやすく講演して頂いた。報告資料のスライドも非常に丁寧に作成されており、イラストをも交えながら視覚的に理解することができるものであった。

特に、本研究科の所属学生の多くは留学生が占めており、著作権に関する知識や概念が乏しい場合がある。そのような状況の中で博士論文を執筆して学位を取得するためには、著作権や研究倫理に対する知識は必要不可欠であり、このFD研修会は、その構築に大きく貢献したと言える。

本研究科では著作権に関する教育を非常に重要視しているため、この試みは2021年度も継続する予定である。

第2-2節 研究科主催FD研修会：その2

7月22日の水曜日の本研究科の教授会の冒頭の30分の時間を使って、教員を対象とした「科研費申請に関するセミナー」を開催した。担当の講師は本学の教育学部で本研究科の兼任も務められる鷹岡亮先生であった。セミナーのタイトルは「審査委員の気持ちを考えながら協働の組織をウリにするためには」であり、秋に科研の申請書を作成する先生方にとって大きなサポートになったと言える。



学内の研究教育費は年々減少しており、外部資金の獲得が喫緊の課題となっている。さらには、外部資金の獲得は大学の評価の一つの重要な指標となっており、外部資金の獲得は単に資金を獲得する以上の重要な意味を持っている。同様の試みは経済学部でも既になされており、本研究科もそれに倣って2019年度から実施している。非常に好評であったので、2020年度も引き続き実施した。この一連の取組みによって、外部資金獲得の機運を高めたり、ノウハウを共有したりなどをして、将来の外部資金の獲得の実績に繋げていきたいと考えている。

なお、このFD研修会のポイントは、科研の締め切りが10月であるので、それ以前の時期に実施することが重要である。本研究科は、教育学部、経済学部、人文学部及び国際総合科学部という様々な学部から構成されているので、講師の選定の際に注意が必要である。

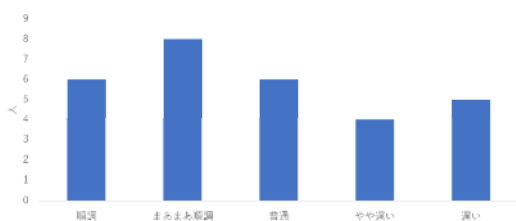
第3節 教育改善に関する活動及び教員による授業評価

東アジア研究科の教育の主体は主指導教官及び副指導教官を中心とした研究演習である。さらに、

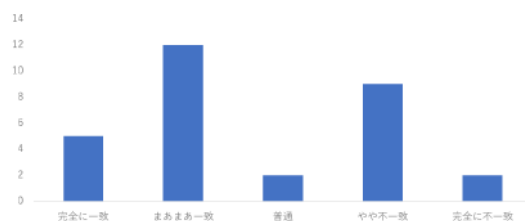
初年度には基盤演習、次年度にはプロジェクト演習も加わるように、講義ではなくて演習が主体となっている。そこで、教育改善のためには、これらの演習の質の向上が欠かせない。そこで、現状を把握するためにアンケート調査をおこなった。以下では、その調査結果の概要について述べ、それを基に、教育改善のための提言をおこないたい。

教員に対するアンケートでは 30 名の方にご回答して頂いた。このアンケートは「院生への指導に関する教員向けアンケート」という題目で東アジア研究科の指導学生を受け持っている指導教員に対して 2020 年の秋に実施した。なお、2019 年度の回答者は 9 名であったので、今年度は多くの先生方のご協力を頂いた。主要な結果は下の図に示している。なお、縦軸は人数を表している。

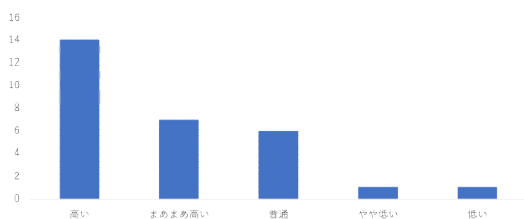
質問 1. 学生の研究の進捗具合はどうか？



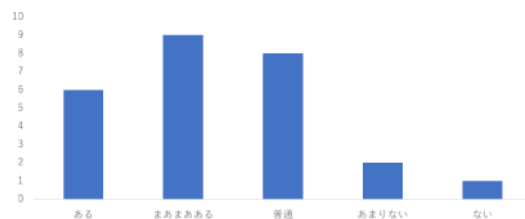
質問 2. 学生の研究分野とご自身の研究分野は一致していましたか？



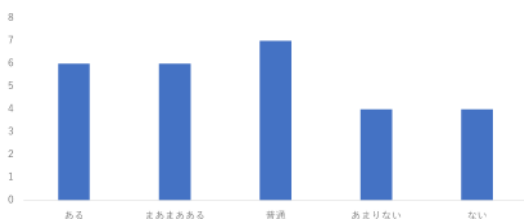
質問 3. 学生の研究へのモチベーションは高いですか？



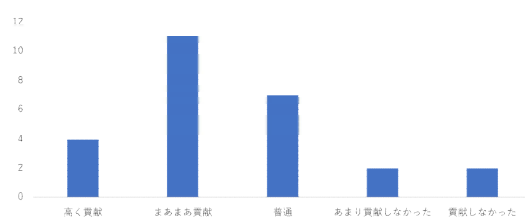
質問 4. 学生が論文を査読付き雑誌に投稿する時、採択される見込みはありましたか？



質問 5. 指導教官以外の他の先生との連携はありましたか？



質問 6. 基盤演習は学生の研究の進捗に貢献しましたか？



以下、特筆すべき点と回答された先生方からのコメントについて簡単に述べたい。まず、質問 1 に関して、学生の研究の進捗具合について一定程度配慮すべき学生が存在している点に注目したい。先生方からのコメントを基に詳細を見ると、留学生や社会人の学生のケアが必要であると考えられる。特に、留学生は学業だけではなく、生活面でもストレスを抱えやすく、精神面のケアも必要であると考えられる。これは今後の重要な課題である。留学生センターとの連携も模索する必要がある。

次に、質問 2 に関して、教員と学生の研究分野が「やや不一致」との回答が目立つ。その際に、教員はどのように対処しているのだろうか？コメントを紹介すると、「指導教員も勉強したほか、他教員の協力を仰いだ」、「直接的な指導学生はいない&科学的な論理展開について評価した」、「自身の専門分野や学術研究の常識の範囲で、論理性や妥当性を問うように指導している」、「主に、学問的なもの

第6節 来年度の課題

来年度の課題については第3節で述べているように、昨年度に引き続き、教員と学生の研究分野が一致していない、というのがあったが、これに対処する必要がある。この原因は、教員の定年退職や転出による学生の演習間移動が考えられる。この問題は、FD 活動だけでは解決できる問題ではなく、本研究科全体で取り組む課題であると言える。また、東アジア研究科は留学生の比率も多くなり、言語の壁を意識した基盤及びプロジェクト演習のあり方が重要になってくる。最後に、学内外の指導教員の連携が重要であり、副指導教員のあり方が一つの鍵となる。これには、給与マネジメント改革も関係しており、東アジア研究科内で全体で取り組む課題と言えよう。

第 18 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。日本人社会人を対象とした日本語による大学院講義は、広島教室および福岡教室の 2 教室体制で授業を行っている。また、留学生を対象にした英語による講義は、常盤キャンパス（宇部教室）において平日のカリキュラムにより授業を実施している。これらの講義は、全教員が担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。

令和元年度に実施したピュアレビューの評価項目を付記する。

◆ 優れていると感じた点について

【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド 1 枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習や討議などの実践形式による学習がバランス良く取り入れていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 授業の進め方や教材について、創意工夫を取り入れていますか。
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行に応じて、グループワークやグループ討議が適切に行われていますか。
- ・ 学生から発言を引き出すように授業をリードしていますか。
- ・ 特定の学生の発言回数が増えないように、注意していますか。

◆ 授業を参観し、参考になる感じた点について

【事例】

- ・ Webex などのオンライン講義の中で、ブレイクアウトセッションを利用したグループ討議

やディベートの進め方が参考になった。

- ・ 調査に時間を要する内容について、課題レポートとして割り当てる。
- ・ 教材の作成方法
- ・ パワーポイント教材に図表や写真などを配置し、テキストだけ教材と比較してビジュアル的にアピールする。
- ・ 参考資料を活用する。
- ・ ビデオ教材やドキュメンタリー映像などの動画を用いる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

令和2年度 教育改善FD研修会(教育・学生支援機構との共同開催)

タイトル

新時代の大学における授業のあり方について考える
～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～

概要

平成26年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあります。特に、令和2年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であります。

そこで、今年度の教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えてみます。

令和2年度 教育改善FD研修会

日時: 令和2年12月8日(火)午後2時30分～(30分程度)

講師: 藤上 真弓(山口大学教育学部 教授)

研修対象者: 技術経営研究科 教職員

研修スケジュール

15:00 ～ 15:40(40分) 学修ポートフォリオの説明(大学教育センター)

15:40 ～ 16:00(20分) 質疑応答・意見交換

令和2年度教育改善FD研修会（技術経営研究科）

日程：令和2年12月8日（火）[常盤地区] 14:30～15:00

場所：大学院技術経営研究科棟 1階 会議室

（会議室・オンライン聴講併用によるハイフレックス型開催）

講師：藤上 真弓（教育学部 専任講師）

参加者：10名（アンケート回収 6名）

【★説明内容】

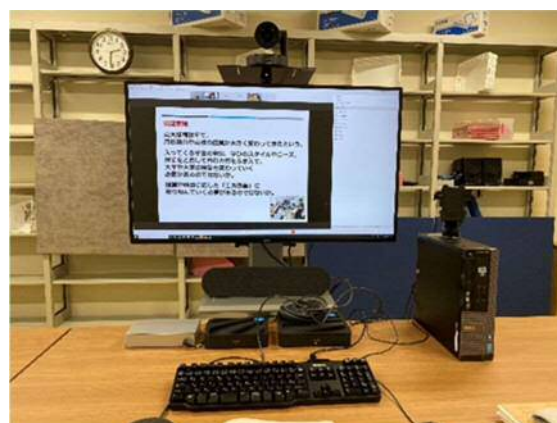
今年度の教育改善FD研修会のテーマは、「新時代の大学における授業のあり方について考える～高等学校教育改革の動向を踏まえながら～」である。その趣旨・目的として、2014年12月に公表された中央教育審議会答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』以降、大学教育改革はもとより、高等学校教育改革、大学入学者選抜の見直しなど、大きな制度変更が行われつつあり、特に、2020年以降、新学習指導要領による高等学校教育の新しい教科枠組の実施、大学入学者選抜改革が進む中で、大学教育のあり方が改めて問われることが必至であることを挙げている。

そこで、教育改善FD研修会では、新時代の大学における授業のあり方をテーマに、高等学校教育改革の動向などについて話題提供しながら、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の初年次教育・専門教育の充実について考えている。

今回は、藤上 真弓 教育学部専任講師がFD講師を務め、会議室・オンライン聴講併用によるハイフレックス型開催で行った。高大接続改革の必要性や高大接続で育む「学力の3要素」を解説しながら、変わりつつある高校教育や高校授業の実際について、山口県内の高校の事例を現場教員の声を交えながら紹介した。特に、萩高校の普通科・探究科の教育・学習内容を取り上げ、大学等との連携を強化しながら、探究学習が活発に行われていることが報告された。その中で、教師の教え方の変容や生徒の自主性の向上などが図られつつあり、大学の授業を通して同様に学生に考えさせる豊かな授業が求められる。



教員会議室の遠隔会議システム



Webex オンライン（パソコン端末）
（オンライン配信スタジオにて）

後半の質疑応答では、以下のようなやりとりがあった。

Q1 大学の初年次教育の現状はどうなっているのか。また、学生の反応はどうか。

A1 旧態依然の科目がまだあることは確かであるが、例えば、教育学部ではスタート科目を改善して、同学部教員が一体となって授業に関わり、学生の主体性を引き出す授業運営に取り組んでいる。

Q2 高校教育の全般的な状況はどうなっているのか。

A2 今回紹介したい事例の多くが山口県内の先進校の事例であり、高校教育全般においては、まだまだ底上げが必要な状況にあると考えている。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	16.7%
良かった	3	50.0%
どちらとも言えない	2	33.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	6	100.0%

2020年度FD研修（技術経営研究科 主催）

タイトル

Derwent Innovation による特許検索と分析
～グローバル特許データから技術情報の把握～

概要

普段論文情報になれている研究者の方々に、技術情報としての論文と特許の側面についてお話しさせていただき、さらに、グローバルにおける過去10年の特許出願動向の変化やそれを取り巻く状況など触れさせて頂きながら、弊社の Derwent Innovation 及び Derwent World Patents Index (DWPI) についてその特徴や価値を紹介させていただきます。グローバルな特許データの検索分析を行って、技術情報のスピーディーな把握を実現します。

令和2年度 FD研修

日時: 令和3年3月9日(火) 午後1時～午後2時30分

講師: 宮田 和彦 (クラリベイト・アナリティクス・ジャパン)

研修対象者: 技術経営研究科 教職員

研修スケジュール

13:00～14:00(60分) Derwent Innovation の説明

14:00～14:30(30分) 質疑応答・意見交換

Derwent Innovation による特許検索と分析 ～グローバル特許データから技術情報の把握～

宮田 和彦

クラリベイト・アナリティクス・ジャパン
IP グループ、ソリューションコンサルタント

Derwent Innovation は、世界で信頼される特許および学術文献データベースであり、市場をリードする特許調査・分析プラットフォームとしての活用方法と学術研究への展開を研修する。

日時 2021年3月9日(火)午後1時～2時30分

講師 宮田 和彦

クラリベイト・アナリティクス・ジャパン
IP グループ、ソリューションコンサルタント



The screenshot shows the Derwent Innovation search interface. At the top, there are tabs for '特許検索' (Patent Search), '公報番号' (Publication Number), and '検索を非表示' (Hide Search). Below this, there are sections for '検索テンプレート' (Search Template) and '特許コレクション' (Patent Collection). The search criteria section includes fields for 'IPC または CPC-すべて' (IPC or CPC-all) with the value 'G06N', 'AND OR NOT' operators, and '抄録-用途-DWPI' (Abstract-Use-DWPI) with the value 'factory'. There is also a date field for '公報発行日' (Publication Date) with the value '1836-01-01'. A '新規テンプレートとして保存' (Save as new template) button is visible. Below the search criteria, there is a section for 'クエリーの表示と編集' (Query Display and Edit) with a text area containing the query: 'AIC=(G06N) AND USE=(factory) AND DP>=(18360101);'. A '構文をチェック' (Check Syntax) button is located at the bottom right of the query editor. At the very bottom of the interface, there are buttons for 'すべて解除' (Reset All), '元に戻す' (Reset), and '検索' (Search).

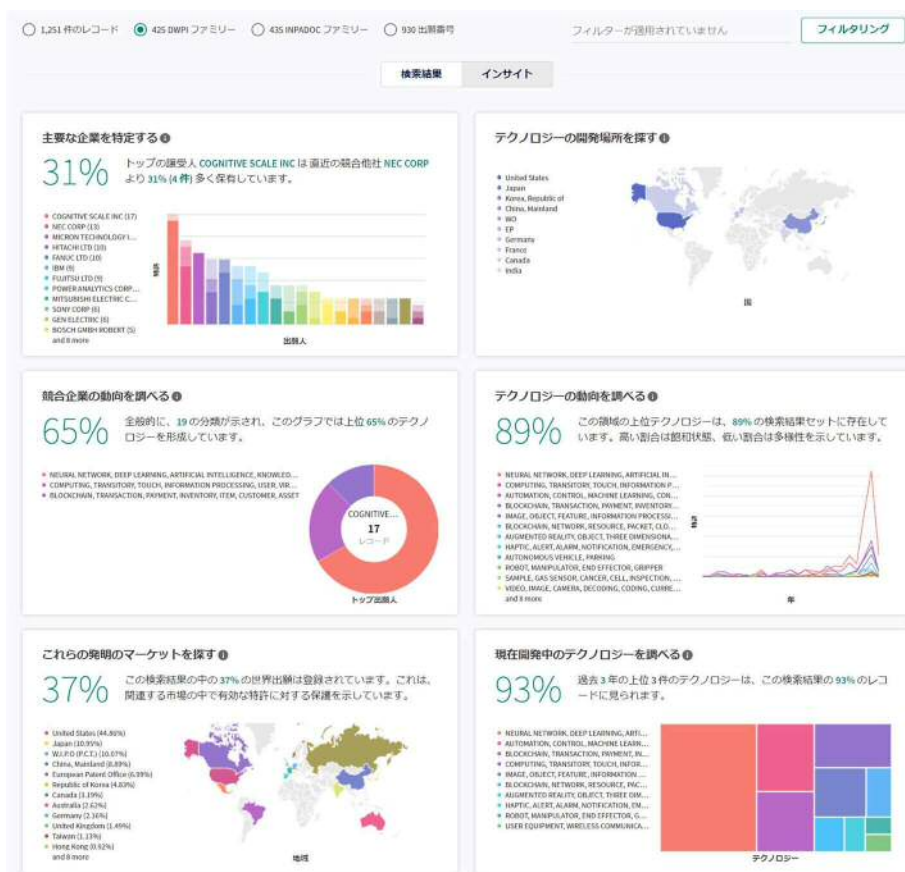
セミナーの概要

・はじめに

普段論文情報になれている研究者の方々に、技術情報としての論文と特許の側面についてお話しさせていただき、さらに、グローバルにおける過去10年の特許出願動向の変化やそれを取り巻く状況など触れさせて頂きながら、弊社の Derwent Innovation 及び Derwent World Patents Index (DWPI) についてその特徴や価値を紹介させていただきます。グローバルな特許データの検索分析を行って、技術情報のスピーディーな把握を実現します。

・Derwent Innovation (特許総合プラットフォーム) について

ダーウェント・イノベーション (Derwent Innovation) は、世界で最も包括的な国際特許の範囲と業界の強力な知的財産 (IP) 分析ツールを組み合わせたリーディング IP インテリジェンスおよびコラボレーションプラットフォームの1つです。Derwent Innovation により、ユーザーは Derwent World Patents Index (DWPI) の信頼できる正確な特許データを検索できます。DWPI は、強化された特許文書の世界で最も包括的なデータベースです。Derwent Innovation は、ユーザーの便宜を図るため、複数のソースをチェック、外国語への対応、不完全なレコードの処理などに掛かる時間を節約し、できる限り検索漏れなどのリスクを回避し、商業的利益を創出する包括的で関連性の高い信頼できる情報を提供します。すべての特許レコードについて、Clarivate の専門家が手作業で英訳された公報の抄録作業及び索引付けするので、特許情報が正確にインデックス化されています。これにより、研究者が戦略的決定を下すために必要な情報をすばやく見つけることが容易になるとともに、技術動向や競合状況の把握、FTO の見解の通知、特許出願の手続き、資産の収益化などを支援します。



Clarivate
Derwent[™]

Derwent Innovationによる特許検索と分析
-グローバル特許データから技術情報の把握-

山口大学 大学院技術経営研究科
FD (Faculty Development) 研修

クナバート・アナリティクス・ジャパン株式会社
JPグループ、ソリューションコンサルタント
富田 和彦 [Kazuhiro MIYATA]
2021/3/9



Agenda

<第一部>

- はじめに
 - 技術情報としての特許
 - 出願構造の変化
- Derwent Innovationの紹介
- DWPI(Derwent World Patents Index)の紹介
 - DWPIタイトル/DWPI抄録
 - DWPIファミリー
 - DWPI出願人(コード)
- まとめ
- 質疑応答

<第二部>

- Demolについて
 - 特定分野のAIに関する調査
- <資料> インサイト・スマートサーチ
- 利用ポリシーについて
- サポートサイト紹介
- 質疑応答/フリーディスカッション

Clarivate

はじめに

Clarivate

技術情報としての論文と特許

- 論文投稿
 - 論文は、原則1報に1主題が述べられる。
 - 論文の質を担保するため査読が行われることがあり、投稿後に修正を行うことができる。オリジナリティーの無いものは掲載されないし、一旦投稿は認められない。
 - 一定の範囲に分野が特定された雑誌に投稿される。
- 特許出願
 - 発明は、原則1発明1出願で、特許を受けようとする同じ出願がなされ、それぞれの国で公報が発行される。同一発明を特許ファミリーという単位で整理
 - 権利範囲を確定するために新規性・進歩性などの審査がなされる。明細書の補正は認められない。
 - 特許分類は出願後各国の特許庁で付与される。

→

- 国ごとに異なる言語の公報を読む必要がある。
- 特許ファミリーを把握する必要がある。
- 論文と異なり主題が明確に記載されていない場合が多い。
- 特許情報から1つの技術主題を把握するのを容易にしている

Clarivate

出願構造の変化-10年でどう変わったか？-

1-1-22 出願国別出願件数(2010-2020)

出願国別出願件数(2010-2020)

中国の出願が増加が著しい。各国から中国への出願も増大。

Clarivate

パテントファミリーからみる変化

Volume of DWPI family 2007-2017 (DWPI Basic)

2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

日本をファミリーメンバーに含めない出願が増加していることがわかる。

→ グローバル特許を対象とした発明分析の必要性が高まっている

Clarivate

Derwent Innovationの概要

Clarivate

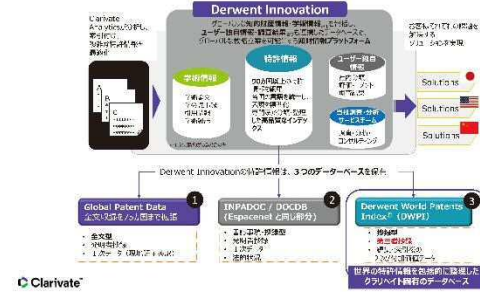
Derwent Innovationの保有機能

特許調査ツールのDerwent Innovationでは、検索のみならず、逆時機能、情報入力機能、情報移行機能、分析機能など業務を効率的に行えるサポート機能を搭載しております。

- 情報検索
 - 高度な検索条件
 - 多言語対応検索
 - フレキシブルなフィルタリング
 - 検索履歴
 - Smart検索
- 逆時
 - 高度機能
 - アラート機能
- 情報入力
 - 特許公報の取り込み
 - 特許抄録の取り込み
- 情報共有
 - 特許家族の検索
 - 1対1のベストマッチサポート
 - 特許ファミリー
 - クロスファミリー
- 分析
 - 特許
 - 分析ツール
 - ファミリーマップ

Clarivate

Derwent Innovationの機能、仕組みと収録データ



Global Patent Data

フルテキストの収録進化

2020年9月
75か国への拡張を完了した。

最も古いものは1876年から収録している（US特許等）

- ✓ オリジナル言語のフルテキスト
- ✓ 英訳のフルテキスト
- ✓ 文字列検索可能な公開PDF

Clarivate



Derwent World Patent INDEX(DWPI)の特徴

Clarivate

DWPIの歴史

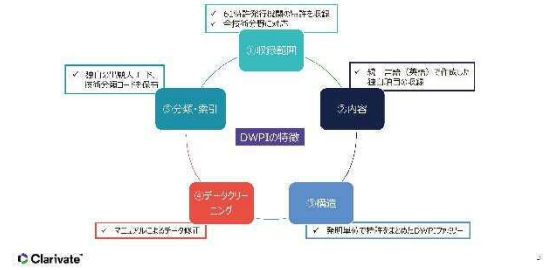
50年にわたる圧倒的な歴史

Derwentの父、特許ファミリーの父
Morty Hyams 博士

Morty Hyamsは、1950年代から特許情報分野の世界的なリーダーとして、ロンドンの自宅で独自の特許ファミリー構築の作業を始めた。その結果、世界の特許情報に多大な影響を与え、現在も多くの特許ファミリー構築の基礎となっている。

Clarivate

DWPIの5つの特徴



DWPIの特徴：① 収録範囲

✓ 594特許発行機関+7技術誌を収録
✓ 全段階の権利を含む

収録国/地域(55) + 機関(7)

機関/地域	国/地域	国/地域	国/地域	国/地域	国/地域	国/地域
PCT世界	中国	フランス	韓国	米国	オーストラリア	
欧州特許	韓国	インド	台湾	日本	ロシア	
ドイツ	日本	インドネシア	台湾	韓国	韓国	
中国	インド	韓国	台湾	韓国	韓国	
韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	
韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	
韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	
韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	
韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	
韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	

Clarivate

DWPIの特徴：② 内容

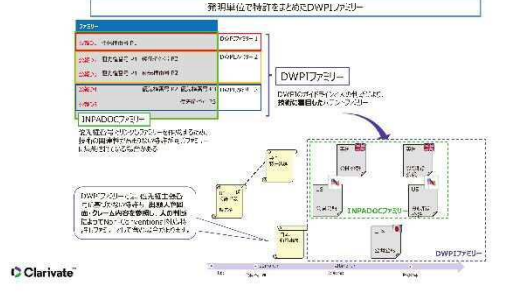
✓ 約 100言語 (英語) で作成したDWPIタイトル、DWPI特許の独自項目を収録

DWPIの特長

- ✓ DWPIタイトル: 約100言語 (英語) で作成したDWPIタイトル
- ✓ DWPI特許: DWPI特許の独自項目を収録
- ✓ DWPI特許: DWPI特許の独自項目を収録
- ✓ DWPI特許: DWPI特許の独自項目を収録

Clarivate

DWPIの特徴：③ 構造



Derwent Innovationを活用すると

- 75機関のフルテキスト、59機関のDWPI収録を活用したグローバル特許コンテンツを利用
- 『DWPIタイトル』・カテゴライズされた『DWPI抄録』を活用した、効率の良いテキスト検索
- IPC, FI/Fターム, CPC等の国内/国際特許分類、さらに独自のマニュアルコードを加えた多彩な特許分類を利用
- DWPIファミリー(重複排除・中刺し検索)、出願人コード(名高)を活用したマクロ分析
- インサイトや解析グラフ機能を使った、結果の俯瞰、可視化が実現

グローバル特許の多角的な検索及び分析をスピーディーに実施可能



ここまで質問などありますか？

この後実際に「Derwent Innovation」を用いながら DEMOを行います

「特定分野のAIに関する調査」



特定分野のAIに関する調査

- IPC/CPC
 - G06N : 特定の計算モデルに基づくコンピュータシステム
 - G06N3/00 : 生物学的プロセスに基づくコンピュータシステム
 - G06N5/00 : 知識ベースモデルを利用したコンピュータシステム
 - G06N7/00 : 特定の数学的モデルに基づくコンピュータシステム
 - G06N10/00 : 量子コンピュータ
 - G06N20/00 : 機械学習

キーワード
タイトル/抄録/請求項
DWPI-抄録-用途/新規性/每位性

「人工知能」
artificial intelligence
machine learning
deep learning
Semi-supervised Learning
Machine Intelligence



インサイト (分析チャート)



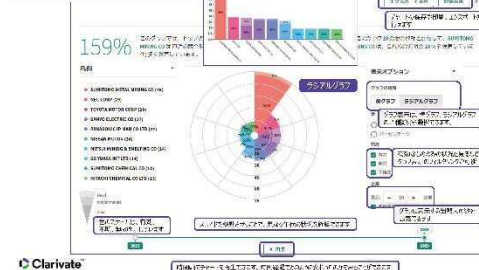
インサイトでご用意しているチャート

Derwent Innovationには、様々な分析コマンド検索結果の動向を簡単にみるためのチャート機能の「インサイト」があります。インサイトには、現在6つのチャート機能を搭載しております。



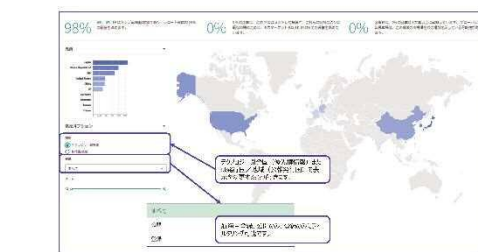
チャート①：主要な企業を特定する

検索結果の中の上位発明人を把握します



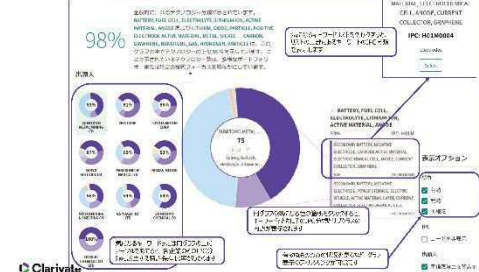
チャート②：テクノロジーの開発場所を探る

企業が最初に出願する場所を明らかにします



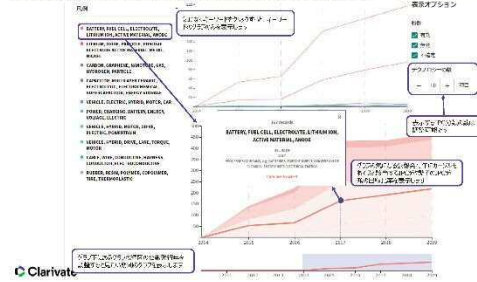
チャート③：競合企業の動向を調べる

競合企業が注目している技術領域を把握します



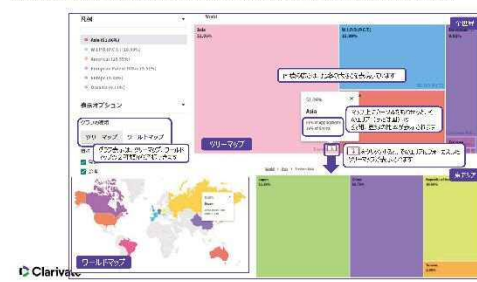
チャート④：テクノロジーの動向を調べる

あるテクノロジーが最初に登場した時期、および時間の経過に伴う進化を明らかにします



チャート⑤：これらの発明のマーケットを探る

発明者が保護した特許領域、および技術革新のための潜在的な公開市場をどこにあるかを明らかにします



チャート⑥：現在開発中のテクノロジーを調べる

直近の技術革新、およびそれらが属する成長中の分野を明らかにします

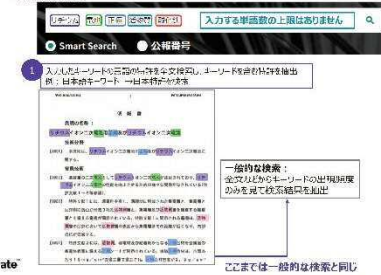


スマートサーチとは



スマートサーチをした時にDI内で行われていること①

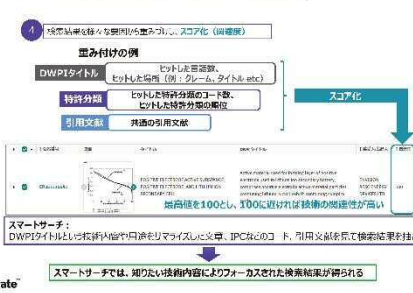
単語検索の場合



スマートサーチをした時にDI内で行われていること②



スマートサーチをした時にDI内で行われていること③



Derwent Innovation 利用ポリシー（山口大学様向け）

Clarivate

Derwent Innovation 利用ポリシー（山口大学様向け）

- ・ 本利用による制限
 国立大学法人山口大学との契約であり、教育・研究目的での利用に限られる。
 社会人大学学生など切り分けが難しい身分も含まれるが、山口大学(大学関係生)としての研究要素が含まれていなければ利用することができない。
- ・ 引用について
 出典としてClarivateを適切に表示することと条件として、当社のデータを引用し転載することができる。
 例えば、分析結果(統計情報、グラフのコピー)を論文などに転載する場合には、利用ツールのDerwent InnovationやコンテンツのDerwent Word Vitals index|WVリソースの出版を明らかにしてください。山口大学での研究目的として自由に使用していただけます。
- ・ データの取り扱い
 得られるデータに関する著作権はClarivateにあるため以下の点ご注意ください。
 データを高頻度・大量のダウンロードしてアーカイブしてはいけない(ロボットの利用、データベースの構築等)。
 AI等のアルゴリズムのトレーニング目的でデータを使ってはならない(著作権の発生が不明瞭になるため)。
 教育・研究の目的が必要がある場合には、個別に目的や利用形態をご相談ください(一律に禁止するものではありません)。
 また、通知や利用制限がかかる場合もございます。

Clarivate

サポートサイト紹介

Clarivate

Derwent Innovation製品サポートサイト (Topページからのアクセス方法)

Derwent Innovationは、1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、1年、2年、3年、5年、10年のサブスクリプションがあり、ユーザーの規模に合わせたプランがあるよう、お選びいただけます。価格表は、お問い合わせ先へお問い合わせください。

TOP Page (日本語サイト) : <https://clarivate.com/ja> Clarivate TOP PAGEからのアクセス

Clarivate

Derwent Innovation製品サポートサイトのご案内

サポートサイト URL : <https://clarivate.com/derwent/ja/learning/derwent-innovation-2/>

Clarivate

Clarivate

カスタマーサービス (ヘルプデスク)
 Tel (フリーコール) : 0800-170-5577
 Tel : 03-4589-3107
 Email: ts.support.jp@clarivate.com

サービス時間 : 月～金 (祝祭日を除く)
 午前9時30分～午後5時30分

Clarivate

第3節 教育改善に関する活動

令和3年度のカリキュラム・授業の改善に向けて、教員懇談会を実施し、情報共有並びに議論をおこなった。

教員懇談会

令和2年7月14日(火) 午後3時

令和2年9月8日(火) 午後3時

令和3年3月9日(火) 午後3時

第4節 FD実施経費報告書

令和2年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
技術経営研究科	2020年02月12日 山口大学教育改善FD研修会		0	技術経営研究科教員全員が本研修を受講し、新時代の大学における授業のあり方を考察するとともに高等学校教育改革の動向などについて認識を深めた。
	2021年3月9日 Derwent Innovationによる特許検索と分析 -グローバル特許データから技術情報の把握-	講師謝金・旅費 1名	80	学術研究における特許分析データベース「Derwent Innovation」の活用方法について研修を実施した。
		計	80	

第5節 来年度の課題

背景

情報通信技術(ICT)の高度化に伴い、社会経済が大きく変化している。この状況の下、新たな知識・スキル・思考力を獲得するため、社会人が大学で学び直す必要性が増している。また、グローバル化の進展により、海外大学と共同で国際的に活躍する人材を育成する必要性が生じている。これらは本学が「明日の山口大学ビジョン2015」において掲げている「高度な専門性と社会性を持つ指導的人材の育成」や「グローバル力を強化する大学院教育の推進」といった目標と同じ方向性を持つものである。これらを受けて本研究科では、「国内では西日本地域において、国外では東アジア・東南アジアにおいて<技術経営>者を目指す人々の『最優先志望』となることを目指す」という中長期ビジョンを掲げ、福岡・広島教室においては日本人社会人を、宇部教室においては留学生を対象とする技術経営教育を実施してきた。

課題

コロナ禍をきっかけとして、社会人学生が自宅からオンラインで受講したり、留学生が渡日前に自国からオンラインで受講したりと、修学スタイルの多様化が始まっている。すなわち、対人対面型の教育に限定せず、オンサイト(教室における対面)およびオンラインで同時に教育を行う、つまり、高度なハイフレックス型教育の実施が必要となっており、これを実現するためには、遠隔講義システムの拡充が不可欠である。ハイフレックス型教育を実施する環境を整えば、これを活用して従来よりも

充実・高度化した教育を実施することも可能となる。すなわち、福岡・広島教室ならびに宇部教室を相互に接続して複数教室を結んで日本人社会人と留学生とがともに学び議論するような教育環境を構築することや、各教室と海外提携大学とを接続し、海外提携大学と共同で講義を実施するような教育環境を構築することが可能となる。すなわち、本事業によって遠隔講義システムを拡充することにより、臨場感あふれる多地点同時教育を実現することが可能となる。

第 19 章 共同獣医学研究科の F D 活動

共同獣医学研究科のFD活動は、共同獣医学部のFD 活動に参加する形で活動を行った。
具体的活動内容に関しては、第10章共同獣医学部の F D 活動 を参照されたい。

令和2年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職名	氏名	任期	備考
	副学長（教育学生担当）	松野 浩嗣		大学教育機構長
教育・学生支援機構	教育支援センター長	仲間 瑞樹		
〃	学生支援センター長	高橋 肇		
〃	保健管理センター所長	奥屋 茂		
人文学部	教授	真木 隆行	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	和田 学	31.4.1～3.3.31	
教育学部	教授	松岡 勝彦	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	木谷 秀勝	31.4.1～3.3.31	
経済学部	教授	古賀 大介	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	内田 恭彦	2.4.1～3.3.31	
理学部	教授	西井 淳	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	山中 明	31.4.1～3.3.31	
医学部	教授	齊田 菜穂子	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	白澤 文吾	2.4.1～3.3.31	
工学部	教授	大原 渡	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	赤田 倫治	31.4.1～3.3.31	
農学部	教授	荒木 英樹	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	小崎 紳一	31.4.1～3.3.31	
共同獣医学部	教授	島田 緑	2.4.1～4.3.31	
〃	准教授	下田 宙	31.4.1～3.3.31	
国際総合科学部	准教授	星野 晋	2.4.1～4.3.31	
〃	教授	北西 功一	31.4.1～3.3.31	
事務局	学生支援部長	出雲 武		
〃	学生支援部教育支援課長	福田 孝		
〃	学生支援部学生支援課長	原田 浩子		

令和2年度 山口大学 学部・研究科FDコーディネータ 名簿

部局等	職名	氏名	備考
人文学部 人文科学研究科	教授	上田 由紀子	
教育学部 教育学研究科	教授	森下 徹	
経済学部 経済学研究科	教授	有村 貞則	
理学部 創成科学研究科(理学)	教授	西井 淳	
医学部(医学科) 医学系研究科	教授	白澤 文吾	
医学部(保健学科) 医学系研究科	教授	湯尻 俊昭	
工学部 創成科学研究科(工学)	教授	三上 真人	
	教授	赤田 倫治	
農学部 創成科学研究科(農学)	教授	荒木 英樹	
共同獣医学部 共同獣医学研究科	教授	島田 緑	
国際総合科学部	教授	堀家 敬嗣	
東アジア研究科	准教授	山本 周吾	
技術経営研究科	教授	大島 直樹	

令和2年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」
令和4年2月発行

編集・発行 山口大学教育・学生支援機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083) 933-5060 (学生支援部教育支援課)